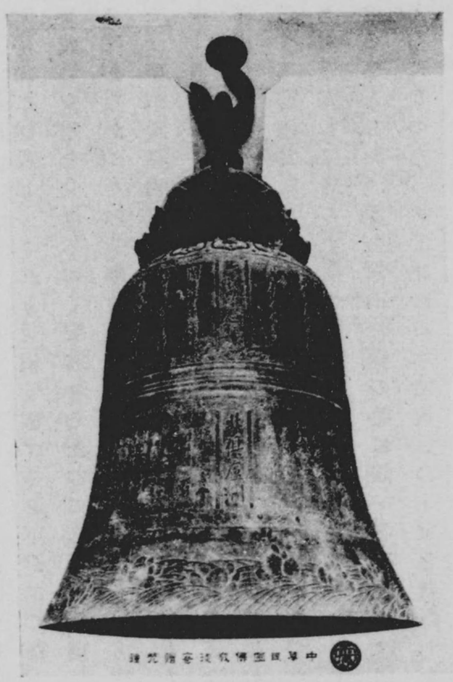
と共同して其の深厚なる好意に副ふ可き旨を答へたのであつた。斯くして大正十四年春になつて本會の事業計畫が確定したので、日本佛教聯合會は該梵鐘を欣然受領する事として、之れを被服廠跡に安置するを適當と認め、十四年九月二日附を以て寄贈狀を本會々長に提出して來た。本會は直に其の受領を承諾して、同時に日災會へ宛て趣旨に副ふ旨通告した。依つて同會では其の梵鐘の鑄造地である杭州から上海に運び、上海から更に横濱に送り、同年十一月一日現在の記念堂建設地に運ばれた。そしてその翌日日本佛教聯合會を通じて東京市當局に交附し、次いで本會が之れを引受けたのである。此の間種々盡力した上海の王一亭氏の名は特記する必要がある。

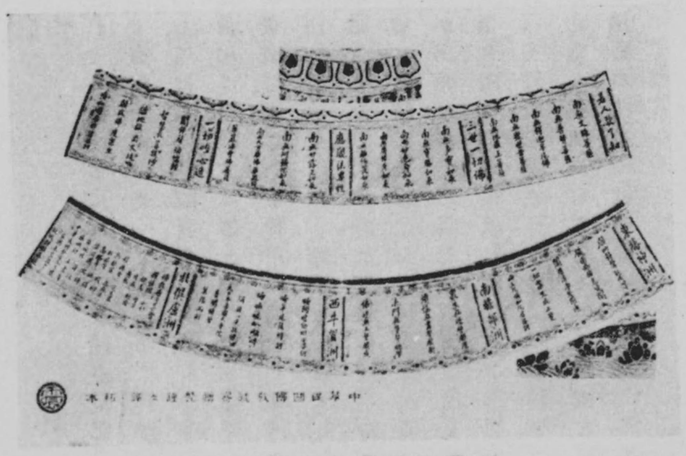
此の鐘に就て說明する上に必要なことは、普濟日災會の主唱の下に全中華に亘つて行はれた各種の功德卽ち念佛及法要等の數字を列記しなければならぬ。卽ち

一、念佛　二千二百二十二萬五千五百四十二聲(內に佛及菩薩の名を含む)
一、呪文　百五十一萬五千九百〇七遍(往生咒及諸呪を含む)
一、誦經　二十三萬八千四百〇五部(華嚴法華其他の諸經を含む)
一、禮拜　十八萬五千五百八十八拜(諸佛及彌陀拜を含む)
一、道場　四五壇(一壇を七日とし祈安、佛七、水陸普利等の式を行ふ)
一、永日供養　千四百六十日(一日、七日、十四日等を合算す)
一、講演　一部(摩訶觀全部の講義)
一、幽冥鐘　一千二百八十七晝夜(七晝夜又は四十九晝夜及び百晝夜合算)

以上であつたが、其の法供養の最終結願が、卽ち此の弔靈鐘の鑄造となつて具現したものである。そして前記の法要の外に現銀で壹萬五百十九元八角八分の寄贈を得たので、同會は其の內から會の直營せる法要費及び慰問使の派遣其の他の諸費を支出した上、黃銅で此の梵鐘を鑄造したのである。梵鐘は高さ五尺六寸、口經四尺、重量四百十六貫で、形は寫眞にあるやうに普通のものと異り、下方が外に開き頂部に孔が開けてある。胴の周圍には寫眞に示す如き文字が刻まれてある。



中華民國寄贈梵鐘



中華民國寄贈梵鐘々銘

第二節　鐘樓の建設

本會としては斯くして前記の弔靈鐘の寄贈を受けたが、之れを安置するには相當な鐘樓を記念堂構内に建設してこれを受納安置する必要があつた。そこで寄附受領に先つて東京市に鐘樓建築費の交附を受ける可く交渉をしたのであつたが、東京市としては其の建設資金の財源には確たる案がなかつたので、佛教聯合會の斡旋に依つて内務省の社會局に協議する事となつた。社會局では事が國際的問題にも關するので協會より見積した工事費概算書に依る費用壹萬圓を義捐金中より交附するに就いて本會をして被服廠跡震災記念堂構内へ鐘樓を建設し、梵樓を安置せしむる樣東京市へ通達したので、東京市は直ちに其の旨を本會に通告した。尙梵鐘は鐘樓の建設が竣成する迄適當な方法に依つて保管する樣附言があつた。本會は當時震災記念堂の建築位置等がまだ確定して居らず、從つて鐘樓の建設位置等も決定する事が出來なかつた爲、先づ假安置所を設ける事とした。即ち假納骨堂の脇に假安置臺を設け、周圍に柵を圍み、由來を記した立札を設備する事になつた。次で之れに木造板張の上家を新設した、此の假安置所の竣成したのは同十四年十一月中旬であつた。そして一方に本鐘樓の設計案を作り、記念堂の敷地決定すると共に位置を定めて建築に著手すべく時機を待つた。かやうにして梵鐘竝鐘樓の建設に就いては各方面から熱心なる考慮が爲されたものであつた。

第三節　設計と工事

本鐘樓の設計は曩に記念堂の設計者である本會顧問工學博士伊東忠太氏に依頼した。その構圖、意匠等は記念堂の設計と同時に出來たが、此れが實施設計となり工事に著手する事は、前記の敷地關係の點及建設費支出の關係で直ちに實行する事が出來なかつたが、昭和五年頭初になつて愈著手する運びになつた。そして設計原案に基いて本會の建築部に於て工費を計算し、設計書を作製した次第で、その設計目途額は金壹萬壹千八百圓であつた。

之れを請負工事として起案し請負人九名に入札させた結果、金六千五百九拾參圓で京橋區南傳馬町一ノ四戸田組(代表者戸田利兵衞)に決定した。而して同五月卅日契約を完了して六月二日工事に著手する事となつた。途中で屋根葺下地の件に就いて一部設計變更をしたが金壹百貳拾五圓七拾八錢を增額し、八月卅一日に愈々竣工した。此の設計の概要として請負契約書に記載したものは大體左の如くである。

設計概要

位置

東京市本所區横網町六番地横網公園内

敷地面積

五、九二二、八一坪(在來建物及植栽地帶ヲ含ム)

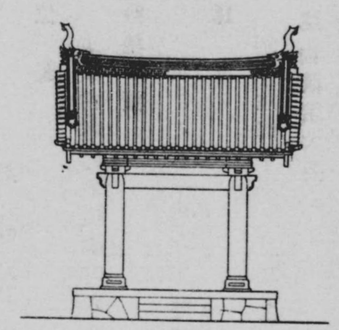
建坪

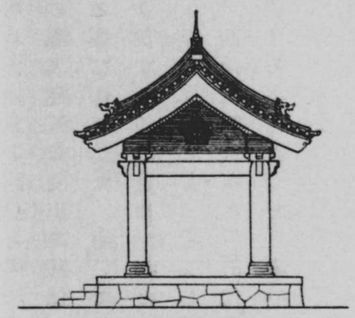
四坪(柱眞ヲ以テ計算ス)

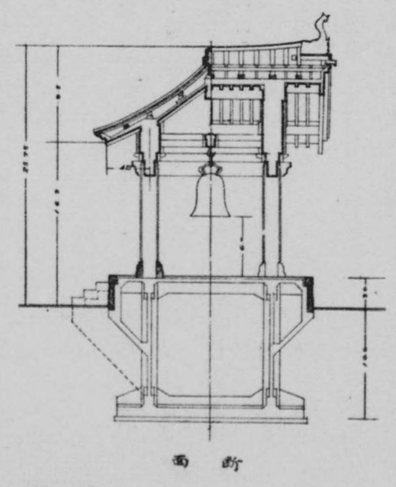
建物構造大要

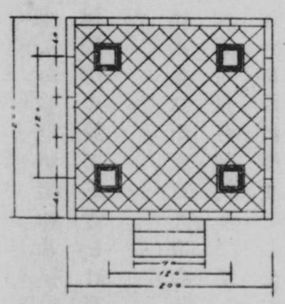
鐵筋混凝土ヲ以テ、基礎ヨリ床、柱、軒先、棰、化粧野地迄構成シ、屋根ノ一部ヲ木造トシ、藥掛本瓦葺耐震構造トス

(イ) 基礎根伐ヲ爲シ硬質割栗石所定ノ厚サニ充塡搗キ堅メ全面ニ均シ混凝土ヲ打均シ基礎床盤竝基礎梁等ヲ鐵筋混凝土ニテ打固ム可シ









鐘樓設計圖

(ロ) 軸部、柱、床、梁、床盤、鐘釣梁、丸桁廻リ、化粧野地、棰其ノ他共鐵筋混凝土打トナス

(ハ) 屋根、野地木造、特種藥掛、本瓦葺、各棟役物瓦同質

(ニ) 外部仕上、基礎廻リ、階段廻リ、葛石、根卷等石材使用、柱頭貫內外部、同貫上小壁ノ一部(外部ノミ)田中式セメントストン叩キ仕上ゲ、桁行及妻小壁ノ一部ハ圖示ノ如ク特製〔タイル〕張リ兩妻ノ一部ニハ彫刻付石材ヲ張付ケ軒先、破風棰、棰間、出桁、鐘釣梁等色〔モルタル〕塗上トス

(ホ) 床、鐵筋混凝土〔スラブ〕上ハ表面小叩キ仕上ノ四半石ヲ敷込ムモノトス

(ヘ) 雜工事、鐘ハ中華民國ヨリ寄贈ノモノヲ指定ノ釣鐵物竝撞木ヲ作製釣込ムモノトス

以上の如く落成し十月一日盛大な梵鐘始撞式を擧行して本鐘樓建設一切の完了を見たので、本會は十一月十日を以て鐘樓竝梵鐘を東京市に假引繼を爲した。かくて昭和六年八月三十一日震災記念堂と併せて東京市に寄贈の手續を完了したのである。

又本會は本梵鐘寄贈に際して熱心に關與した上海の王一亭氏及中華民國佛教關係方面に對し、梵鐘始撞式當日の寫眞其他を添へ昭和五年十月十六日外務省の手を通じて王一亭氏に宛て感謝の意を罩めて發送した。

附　「梵鐘始撞式」

斯くて本協會では落成式を兼ねて盛大な梵鐘始撞式を擧行することを計畫し、梵鐘寄贈に關係深き外務省、內務省社會局、佛教聯合會と協力して、昭和五年十月一日をトし該式を擧行した。式典は左の順序で午前十時に始められた。

式次第

昭和五年十月一日午前十時

奏樂　各員著席

一、開會
一、會長式辭
一、外務大臣式辭
一、中華民國公使祝辭
一、佛教聯合會代表啓白
一、來賓祝辭
一、梵鐘由來（水野梅曉氏）
一、讀經
一、始撞（會長、外務大臣、中華民國公使、遺族代表）
一、禮讚舞
一、總回向文
一、挨拶（會長）
一、閉會

奏樂

引續キ震災記念堂内ニ於テ留日華僑遭難者追悼法要

留日華僑遭難者追悼法要は記念堂に於て嚴かに行はれた。之れは梵鐘とは關係はないが、此の機會に震災當時關東在留の中華民國人中不幸にも異鄕にて遭難死亡せる人々の靈を懇に追悼する爲に催したもので、特に中華民國公使及中華民國關係者の參列を請ふたものである。

右始撞式典に要した經費は金壹千圓であつたが、之れは外務省の補助金五百圓及佛教聯合會寄贈金四百圓、佛教護國團寄贈金壹百圓を以て充當したのであつた。本式典の爲めに特に參列の案内狀を發したものは、外務大臣以下外務省、内務省、文部省、東京府、東京市、及地元關係者、日華關係團體及中華民國本邦在留者、本會關係者竝名譽會員等八百名であつた。尙式に於ける會長及來賓、遺族代表等の祝辭は左の通りである。

以上

式辭

大正十二年九月大震火災遭難死者追福ノ爲中華民國佛教徒等佛教普濟日災會ヲ組織シ汎ク淨財ヲ募リ梵鐘ヲ新鑄シテ外務省竝ニ佛教聯合會ノ斡旋ニ依リ内務省ヲ通シテ大正十四年十月之ヲ本會ニ寄贈セラレシヲ以テ曩ニ震災記念堂構内ニ鐘樓建築ヲ企圖シ本年六月工ヲ起シ今ヤ記念堂落成ト相前後シテ竣工ヲ告ケタルヲ以テ玆ニ本日ヲトシ梵鐘始撞式ヲ擧行ス

惟フニ旦暮撃撞ノ一聲ハ遭難者ノ英靈ヲ久遠ニ弔慰シ得ルト共ニ又日華親善ノ一助トナル可キヲ信シテ疑ハス本式典ヲ擧クルニ際シ隣邦國民ノ熱誠ナル厚意ヲ感謝シ愈遭難死者ノ追弔ニ意ヲ盡サン事ヲ期ス

一言蕪辭ヲ陳ヘ以テ式辭トス

昭和五年十月一日

祝辭

財團法人　東京震災記念事業協會
會長　永田秀次郎

大正十二年關東大震災ノ當時中華民國ハ深ク同情ヲ表シ多額ノ金品ヲ罹災者ニ寄贈シ殊ニ同國佛教界ニ於テハ中華普濟日災會ヲ組織シテ全國ヨリ淨財ノ喜捨ヲ求メ遭難死者ノ冥福ヲ祈ル爲メ梵鐘ヲ鑄造シ東京市ヘ寄贈セラレタルカ今回震災記念堂ト共ニ鐘樓ノ建築成リ茲ニ本日ヲトシ梵鐘始撞式ヲ擧行セラル

惟フニ此梵鐘ハ中國多數ノ佛教信者カ永日ノ供養ヲ行ヒ虔誠ノ祈念ヲ籠メテ鑄造シタルモノニ係リ此鐘樓ニシテ此鐘アリ倶ニ以テ數萬遭難者ノ靈ヲ慰ムルニ足ル是誠ニ我同胞カ隣國ノ同情ヲ永久ニ傳フル好記念ニシテ其意義實ニ深遠ナリト謂フヘシ彼我兩國人士ハ將來益此精神ヲ發揚シ以テ善隣ノ誼ヲ全フセンコトヲ望ム

茲ニ式典ニ當リ聊カ所懷ヲ陳ヘ以テ祝辭トス

昭和五年十月一日

祝辭

外務大臣　男爵　幣原喜重郎

維時中華民國十九年十月一日東京震災記念事業協會主催ノ下ニ梵鐘始撞式ヲ擧行セラルヽニ當リコレニ參列スルヲ得タルハ余ノ光榮トスル所ナリ

夫ノ七年前ニ於ケル關東大震災ハ全世界ニ於ケル未曾有ノ大悲慘事ニシテソノ慘狀實ニ言語ニ絶エタル所ナリシカハ我カ本國官民ハ固ヨリコレカ救濟ニ微力ヲ盡セリト雖モ如斯慘事ハ全ク人力ノ如何トモ爲シ能ハサル所ナレハ我カ中華民國佛教徒ハソノ宗教的信念ニ基キ佛教普濟日災會ヲ組織シ全國佛教界ニ宣言シテ法要ヲ行ヒ亡靈ヲ弔度スルコトヽシ當時各方面ノ回向ヲ終リタル上ハ幽冥鐘一箇ヲ鑄造シテ之ヲ日本ノ災區ニ送リ長年ニ亘リテ撞擊シコノ鐘聲ノ功德ニヨリ永ク幽都ノ苦ヲ免レシメントト宣言セリ

斯クテ善男善女ノ喜捨ニヨル淨財ヲ以テ抗州ニ於テ鑄造シタル梵鐘ハ中華民國十四年十月コノ地ニ運レタリシカ爾來貴國朝野ノ眞摯ナル復興事業ノ完成ト共ニ震災記念堂ノ竣工ヲ見ソノ壯麗ナル鐘樓ニ於テ長ク弔度ノ鐘聲ヲ放チ以テ貴國罹災者ト共ニ我國罹災者ヲモ亦幽都ノ苦ヨリ免レシムルハ貴國朝野ノ人士ト等シク余ノ最モ慶賀スル所ナリ

由來貴我兩國民間ニハ屢々誤解アリテ時ニ感情ノ背馳ヲ見ルト雖モ上述ノ如キ危難ニ遭遇シテハ自然ニソノ障壁ヲ去リ一致團結シテ患難ヲ相共ニスルモノナルコト震災當時ニ於ケルカ如クコレ兄弟自然ノ情ニシテ殊ニ我カ東洋民族ノ德性ナリサレハ今後我々ハコノ鐘聲ヲ聞キテハ自ラソノ同文同種ノ愛ヲ喚起シ以テ益々親睦ノ誼ヲ增進スヘクコレ余ノ切望スル所ナリ

一言蕪詞ヲ述ヘテ祝辭トナス

中華民國十九年十月一日

祝詞

中華民國特命全權公使　汪榮寶

歲次上章敦牂孟冬爲

本所區横網町震災記念堂建築竣成竝行始撞鐘禮茲欽
諸公精神雄健鼎力奔走能將災靈構堂安置留後追念敬會同人遇此盛會躬親觀禮實深榮幸聊數言
以祝之
溯乎癸亥季秋朔日霹炎一聲山崩地裂昊天不吊烟霧漫揚無辜士庶慘遭災殃魂今無归萬分哀傷舉
世闔耗同聲悼愴構堂已竣靈有寄藏梵鐘一鳴祝皆康壯

東京華商商會執監委員會謹祝

祝　辭

茲ニ本日ヲトシ震災記念堂構内鐘樓梵鐘始撞式ヲ擧行セラル回顧スレハ去ル大正十二年九月
ノ大震災ニ際シ締盟烈國カ寄セラレタル同情ハ深甚ナルモノアリ就中隣邦中華民國々民ハ甚
大ナル厚意ヲ披瀝シ能ク救援ノ道ヲ講セラレ間然スル處ナカリシカ次テ有志等相計リ佛教普
濟日災會ヲ組織サレ遭難者追福ノ爲メ梵鐘一隻ヲ鑄造シ大正十四年十月之ヲ震災記念堂ニ寄
贈セラレタリ今ヤ鐘樓建築全ク成リ始撞ノ式ニ列スルヲ得テ感銘新ナルヲ覺ユ
惟フニ此ノ擧ヤ遭難者ノ靈ヲ永久ニ弔慰シ得ルト共ニ又日華兩國民親善ニ意義アル可キヲ信
スルモノニシテ隣邦國民ノ熱誠ナル厚意ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表スルモノナリ冀クハ我關係
當事者諸賢ニアリテモ更ニ一層遭難死者追福ニ意ヲ盡サレンコトヲ
一言以テ祝辭トス

昭和五年十月一日

遺族代表　磯部尙

第十二章　庭園の築造

第一節　建設設計の趣旨

大震火災當時、罹災地域の人々は先を爭ふて安全地帶へと避難し、廣場と言ふ廣場、道路、公園、庭園、
橋臺地と言はず凡ての空地を目指して各自生命の安全を圖つたが、不慮の災禍は之等の避難地に
迄も及び、大多數の人命は無慘にも奪ひ去られたのであつた。
就中何人にも唯一の安全地帶と思はれた約二萬坪の被服廠跡の大空地に於ても、豫期に反した
悲慘事を惹起し數萬の犧牲者を出すに至つた。其他道路、橋梁、橋臺地は言ふ迄も無く、樹木の相當
繁茂した公園地内でさへも相當の慘事を起したのである。
そしてこのやうな慘事を見た中で比較的避難の效果のあつたのは日本風の庭園で、而も林泉式
に造營せられたものがとりわけ多くの人命を保護したのであつた。
かゝる樣式の庭園にしてよく天災の慘事を幾分にても救ひ得たといふ事は、日本風庭園の大い
に誇りとする處で之れが起因する處は泉池の設備にある事は何人もが肯定する處であらう。
かやうに多數の人命を救護し、多大の貢獻をなした日本風の庭園を記念堂に配し、殊に池、――た

とへそれは小規模にもせよ堀鑿新設をなし之に水を湛ゑ以て記念とすることは、斯の慘事による不言の警告を將來に遺す上に最も至當の事であると考へられ、特に日本風の林泉式を主とした造庭計畫が實施せられるに至つた次第である。

第二節　現在の庭園概要

震災記念堂附帶庭園は以上の趣旨を尊重し地割をなし計畫を實施したのである。

記念堂建物の周圍は祭典其他催物等の際多數の參詣者が群集するも支障なき樣、前庭には約四百坪の廣場を設け、兩側及背面も之に準じた廣場となし、堂の正面に正門を設け、北側に正門に準ずる通路及門を設け、大衆の參拜を便にし、其他裏門、通用門を夫々設置した。

此の記念堂の北側約七百坪の地域は記念すべき林泉式の庭で、外柵沿ひは小丘を築き、樹林地帶とし其の中央を南西より北へ一條の流れを設け、池水をして常時一定の水位を保つ設計である。

其の附近の樹林は柯、樫の常綠闊葉樹其他花木を配し、林間を逍遙する苑路は堂の背面廣場から北門に通じ、池は其の流れを三分して其の池緣には石組をなし、中州松其他を植栽し、春日、雪見の燈籠を配し一つの纏つた景觀を作り、又水位に高低を設け、西池の池水が流れて北池へ落ち、其細流に二つの雅趣に富む橋を架け、純然たる日本風の庭園とした。

尙庭園の外圍は玉垣に沿ひ厚い植込地となし、將來密林となる豫想の下に柯樹、樫樹、松等の常綠樹と、櫟、公孫樹等の落葉喬木を主木とし、其他六十餘種の樹木竝に二十餘種の株物と地被植物芝、龍の鬚等を植栽した。

此の外正門內廣場の兩側と北門に至る通路の植樹帶には公孫樹を列植して記念堂に對せしめ其の雄大なる建築物の前景とした。

東北隅の復興記念館附近には印度杉、棕梠其他を植栽して庭園記念館との調和を計り、又堂の正面廣場には香籠、花立、手洗場、飲用水栓、及献燈(高二十尺)二基を施設し、廣場左側には鐘樓竝に事務所、材料置場を設け更に記念堂の南面には悲しみの群像を設けて周圍は鬱々たる植込地とした。

之等施設の他、園內各所にベンチを配し、又夜間照明として一〇〇ワット光源の地上高十四尺の照明燈二〇基を配した外適所に便所を設けた。

附帶庭園

面積	五九二二坪八一
內譯	
道路廣場	二、七二〇坪〇〇〇
植込地	二、四四八坪八三三
池	一六一坪〇〇〇
建造物敷地	五九二坪九七七

工程

起工　昭和四年四月八日
竣功　昭和六年六月三十日

植栽植物

樹木　柯樹外六八種　二、一四五本
株物　八角金盤外廿六種　三、六四〇株

高麗芝　一、〇三五坪
鬼齒朶　一、〇〇〇株
堂吾　五〇〇株
龍の鬚　二束
シヤガ　一〇〇本

第三節　建設費及材料の勸募

一　建設費

本庭園の建設費としては當初に於て十二萬圓の豫算を計上せられたが、其の後經費の緊縮を計り、庭園材料及勞力費は廣く有志の協力に俟つて設備するを最も有意義と爲し、當初の經費の約半額金六萬四千四百貳拾圓を計上して實施されたのである。

經費內譯

總額	內譯	支出額	細別	支出額	摘要
五九、四二六・六九〇円	植物費	二一、一二五・二五〇円	樹木植付	一七、三〇九・一七〇円	
			株物植付	二、九八四・〇八〇	
			芝其他	八三二・〇〇〇	
	土木費	三〇、六六七・〇六〇	地均	二〇、九〇四・七八〇	
			道路廣場	二、七五六・九三〇	
			土留下水並暗渠	三、三〇九・八一〇	
			池新設	三、一九六・三四〇	
			橋梁	四九九・二〇〇	
	營繕費	六、九三九・一五〇	人止柵	二、八二〇・八六〇	
			便所	九六四・九〇〇	
			電燈	一、三五五・〇〇〇	
			諸設備	一、七九八・三九〇	
	雜費	六九五・二三〇			

二　植物其他勸募

こゝに前記の經費を以て五千九百二十二坪八合一勺の庭園を設備するには、相當困難が伴ふことを豫期して庭園材料の寄附勸誘に著手したのであつた。

先づ庭園の主要材料である植物の寄附募集準備のために、東京市內及近郊の主なる造庭師、植木商組合等を糾合して、その第一回協議會を昭和四年二月廿七日東京會館に於て開催した。

尙當日協議したる募集方針は左記の通りである。

一、寄附募集植物ハ大樣別表ノ通リトス。

二、植物寄附申込ハ別紙樣式ニ依リ昭和四年六月末日迄ニ之ヲ爲スコト。

三、寄附植物ノ搬入ハ受領ノ際之ヲ指定スルモ、大體昭和四年九月ヨリ開始シ、昭和五年六月ニ終了スルモノトシ、搬入方法ニ就テハ指示ニ從フコト。

四、寄附植物ノ根廻シ荷造ハ一切寄附者ノ負擔トシ、各樹寄附者ノ住所氏名ヲ明記セル木札ヲ取付ルコト。

五、寄附植物ノ運搬費用ハ寄附者トノ協議ニ依ルモノトシ、本會ニ於テ其ノ費用ヲ負擔スル場合、其支拂方法ハ指示ニ從フコト。

六、寄附植物ハ總テ移植後活着ノ完全ヲ計ル爲メ搬入以前豫メ根廻シ、又ハ移植ヲ爲シタルモノタルコト。

七、根廻シ及荷造方法ハ別ニ之ヲ指示ス。

八、植物寄附者ハ本會々員規則ニ依リ本會々員トナスコト。

以上

寄附募集植物表

樹木　二、二〇〇本

内譯

種目	寸法	員數	摘要
第一種			
柯	高サ三間以上 四尺上リ三尺廻リ	一〇	幹物
同	〃 五間 二尺廻リ乃至四尺廻リ	一七	
同	〃 二間半乃至三間 一尺五寸廻リ以上	一六五	
同	〃 二間 八、九寸廻リ	二六〇	
樫	〃 五間 二尺廻リ乃至三尺廻リ	一〇	
同	高サ三間 四尺上リ一尺五寸廻リ	四五	
細葉冬青	〃 二間半 二尺廻リ以上	一〇	
同	〃 二間半乃至三間 二尺廻リ以上	五	幹物
同	〃 二間 一尺廻リ	二五	
同	高サ九尺 枝巾四尺	六〇	
黒松	高サ三間 四尺上リ二尺廻リ以上	一五	
黒松	高サ二間半 四尺上リ一尺五寸廻リ	四〇	
同	〃 九尺 八、九寸廻リ	三〇	
中洲松	高サ二間 枝巾九尺	八	
同	〃 一間 六尺	一二	
木槲	高サ三間 四尺上リ二尺廻リ以上	一三	
同	〃 三間 二尺廻リ	七	幹物
同	〃 二間 七、八寸廻リ	五〇	
同	高サ九尺 枝巾六尺	三〇	
欅	高サ六間乃至八間 四尺上リ三尺廻リ乃至四尺廻リ	一八	
同	〃 四間 二尺廻リ	一六	
公孫樹	〃 六間乃至八間 三尺廻リ乃至四尺廻リ	二二	
同	〃 五間 二尺廻リ	二二	
珊瑚樹	高サ六尺乃至二間 枝巾四尺乃至八尺	五〇	
海桐花	〃 一間乃至二間 〃 五尺乃至二間	五〇	
羅漢松	高サ二間乃至三間 四尺上リ八寸廻乃至一尺五寸廻	三〇	
馬刀葉柯	〃 二間乃至三間 〃 八寸廻乃至一尺五寸廻	一〇〇	
椿	高サ八尺 枝巾五尺	五〇	
小計		一、一七〇	
第二種			
楠	高サ一間乃至三間 四尺上リ五寸廻乃至一尺五寸廻	二〇	
〃	〃 二間乃至三間 〃 六寸廻乃至一尺二寸廻	二〇	
〃	〃 一間半乃至三間 〃 七寸廻リ乃至二尺廻	二〇	
榧	高サ六尺乃至一間半 枝巾五尺乃至九尺	五〇	
眞脚黃楊	高サ二間乃至四間	二〇	枝下低キモノ
印度杉	〃 一間半乃至三間	五〇	楓類 カズキ、三角、大サ山楓、三葉楓、幹物ヲ含ム
楓類	〃 二高半乃至三間	八	幹物二、三本立切込方正ノモノ
梧桐	高サ五間 四尺上リ一尺五寸廻リ	七	
篠懸木	〃 二間半乃至三間 〃 一尺廻リ以上	一〇	八角柳
柳	〃 二間半乃至四間 〃 一尺廻乃至一尺五寸廻	一五	
白楊	〃 二間半乃至三間 〃 八寸廻リ乃至一尺廻	二〇	
大島櫻	〃 二間半乃至三間 〃 一尺廻乃至一尺二寸廻	一〇	
槐	〃 三間 〃 一尺五寸廻リ	一五	
榎		二六五	
小計			
第三種			

百日紅	高サ二間乃至三間四尺上リ	一〇		
安石榴	〃 一尺廻乃至一尺五寸廻			
〃 二間乃至三間		一三	彼岸、山櫻、吉里、里櫻各五本アリ	
〃 一尺三寸廻リ				
櫻類	〃 二間	二〇		
〃 八寸廻リ				
木蓮類	〃 二間半	二〇		
〃 八、九寸廻リ				
槲	〃 二間乃至三間	四		
〃 一尺廻リ乃至二尺廻				
梅	高サ二間四尺上リ	七	幹物	
木犀	高サ八尺枝巾五尺	三〇		
茶梅	〃 八尺	一〇		
〃 五尺				
比翼檜	高サ二間四尺上リ	二〇		
〃 一尺二寸廻リ				
小計		一三三		

其他ノ樹種

榊	交讓木	櫻	姿羅葉
肉桂	姥芽樫	柊	カクレミノ
五葉松	三葉松	大王松	高野槇
廣葉杉	一位	梓	蠟梅

株物　一〇、〇〇〇株

內譯

種名	寸法	員數	摘要
主ナルモノ			
八角金盤	高六尺 巾五、六本立	一〇〇株	
同	高四尺 巾五、六本立	三〇〇	
同	高三尺 巾三、四本立	五〇〇	
桃葉珊瑚	高五尺 巾四尺	四〇〇	
桃葉珊瑚	高三尺 巾二尺	二、〇〇〇株	
躑躅類（皐月琉球）	高四尺 巾四尺	二〇〇	
同	高三尺 巾三尺	五〇〇	
同	高二尺 巾二尺	一、〇〇〇	
車輪梅	高二尺 巾三尺	一〇〇	
香椿	菩提樹	凌霄花	藤
竹類	業平	大明	矢竹
小計	六三二本		
計	二、二〇〇本		

木槲	高四尺 巾三尺	一〇〇	
同	高一尺五寸 巾三尺	二〇〇	
同	高二尺五寸 巾二尺	二〇〇	
禿松	高三尺五寸 巾三尺	一〇〇	
同	高二尺五寸 巾二尺	一〇〇	
柊南天	高二尺五寸、四、五本立	三〇〇	
夾竹桃	高二、三尺 四、五本立	三〇〇	
柊	高三尺 巾二尺	二〇〇	
瑞香	高二尺 巾二尺	三〇〇	
柾木	高四尺 巾二尺	四〇〇	
イヌツゲ	高三尺 巾二尺	四〇〇	
小計		二、三〇〇	

其他ノ株物（二〇種以上）

伊吹　姨柏　ドウダン躑躅　梭木　連翹　小葉　君ヶ代蘭　黃ソケイ
紫陽花　小蝶花　麻葉繡毬　山吹　薔薇類　衞予　紫莉　糸蘭　其他
木瓜　珍珠花　桧　金糸梅

芝其他　一、四〇〇坪

內譯　（植栽面割當）

高麗芝	一千坪六尺平方	一、一〇〇坪	オカメ笹
龍ノ鬚	一千束四千本一束	二〇〇	棠吾
隈笹	一千五百株五、六寸株十五本立	五〇	鬼齒朶
一千二百株 巾一〇本立	四〇坪		
五百株 六、七株	一〇		
一千株 四、五枚立	一		

三　勸募の實行

二月二十七日の協議會に於て庭園材料募集方針決定を見たので東京府を始め神奈川、千葉、埼玉、茨城の各縣當局へ左記の通り庭園計畫圖及寄附申込書、募集植物表、募集趣意書及規定等の印刷物

を添付し寄附募集の依頼狀を發送した。

依頼狀

拜啓時下愈々御清適奉賀候陳者本會議大正十二年ノ大震火災ヲ記念シ併セテ遭難死者ヲ追弔スル爲一般有志ノ協力ニ俟チ本所區横網町被服廠跡ニ東京震災記念堂ノ建設ヲ企圖シ爾來事業ヲ相進メ居リ候處幸記念堂建設モ今ヤ其ノ工程半ヲ過ギムトスル現況ニ有之更ニ當初ノ豫定ニ基キ附帶庭園起工ノ運ビト相成候處右庭園モ亦本會事業ノ性質上植物其他ノ材料ヲ廣ク有志ノ寄附ニ依リ設備スルヲ以テ最モ有意義ノ事ト存ジ寄附募集致度候ニ付テハ何卒右趣旨御明察被成下御管下町村其他ニ於ケル本募集ニ付格別ノ御高配賜リ候樣致度此段御依頼申上候　敬具

其他農事試驗場、農會、山林會等公共團體を始め植木企業組合、個人に至るまで、文書又は口頭を以て寄附勸誘をした處、庭園協會、武藏野會の雜誌及關東タイムス、松江町報、其他町會週報等官民多數の助力を得ることが出來た。殊に安行村、松戸町、紙敷方面には係員直接交渉を行つたのでその效果も多大なるものがあつた。

次で五月七日には寄附勸募の經過報告を兼ねて、第四回打合會を日比谷公園事務所に開催した。此の結果寄附植物のみによつて築庭の可能なるを知り得たので、更に專心その勸募に努め、九月に至つて植物は大體豫定の品種數量を得るに至つた、又燈籠其他の庭園材料は翌年秋、遣庭計畫諸工事の大半完成を待つて募集を開始する事としたのである。

四　勸募の結果

植物の寄附申込は九月末に於て豫定の大半にまで達した。就中東京近郊の赤塚、練馬、武藏野方面よりの櫟、柯、樫、櫻、海桐花、木犀、八角金盤、桃葉珊瑚等。駒澤附近よりの公孫樹、印度杉、高麗芝等。寺島附近よりの黑松、細葉冬青、夾竹桃。安行地方の躑躅類、印度杉、柯等。千葉縣下の黑松、椿、馬刀葉柯、木槲、桃葉珊瑚等はその寄附の主なるものである。

又燈籠その他の庭園材料は總て東京市内の篤志家の寄贈によるものにて、之等の内譯は左の通りである。

寄附庭園材料

寄附植物

樹木柯外六十八種	二、一一〇本
株物八角金盤外二十五種	一、八五九株
芝　其他	四七五坪
高麗芝	一、〇〇〇株
鬼齒朶	五〇〇株
棠吾	二束
龍鬚	一〇〇本
シャガ	

寄附樹木　内譯

種名	寸法	本數	種名	寸法	本數
柯	高目通 一、五—四、五間 〇、六—三、一尺廻	七三六本	樫	高目通 一、五—六、〇間 〇、六—三、〇尺廻	一四九本

細葉冬青	高一、五—三、五間 目〇、六—三、五尺廻	五二本	楓類	高四寸—一、四〇間 目一、五—一、六尺
黑松	高一、五—三、五間 目〇、七—二、二尺廻	四〇一	梧桐	高三、五—五、〇間 目一、五—二、五尺
木槲	高四、尺—三、〇間 巾四尺—八尺	一五	篠懸木	高二、五—六、五間 目一、〇—二、五尺
欅	高三、〇—八、五間 目一、二—三、六尺廻	四三	柳	高二、〇—二、五間 目一、〇—一、五尺
公孫樹	高一、〇—八、五間 目〇、八—七、五尺	五九	白楊	高二、〇—四、〇間 目〇、九—一、二尺
珊瑚樹	高一、〇〇—三、〇〇間 巾四、〇〇—九、〇〇尺	二八	大島櫻	高二、〇〇—四、〇〇間 目一、〇〇—一、二尺
海桐花	高一、五—三、〇〇間 目五、〇—八、〇〇尺	五二	槐	高三、〇、—四、〇〇間 目一、〇〇—一、八尺廻
羅漢松	高一、〇〇—二、五間 目六、〇〇—九、〇寸	八	榎	高二、〇〇—八、五間 目一、〇〇—三、八尺
馬刀葉柯	高一〇—一五尺 巾四—一	五一	百日紅	高一、〇—二、五間 目〇、九—二、二尺
椿類	高四尺—三、五間 目四寸—一、三尺廻	七六	安石榴	高八尺 目一、〇—一、二尺
楠	高三間 目九寸	一	櫻類	高三、〇—四、〇間 目〇、八—二、四尺
椨	高三、五—三、〇間 目一、八—二、〇尺	三	木蓮	高一〇尺 巾四尺
榧	高二、〇—三、〇間 目〇、六—一、八尺	三九	梅	高二、五—三、五間 目一、〇—二、四尺
眞脚黃楊	高一、〇—二、〇間 目五寸—七寸	八	木犀	高二、五—四、五間 目〇、八—三、二尺
印度杉	高一〇尺—五間 目〇、八—一、七尺	二六	茶梅	高五尺 巾三尺

比翼檜	高一、五—四、〇間 目〇、八—三、二尺	八本	南天桐	高五、五間 目二、七尺
櫻	高一、〇—三、〇間 目〇、五—一、三尺	二一	皂莢	高三、五間 目一、三尺
姿羅葉	高二、〇間 目五寸廻	一	厚朴	高四、〇間 目二尺
肉桂	高二、〇間 目一、八尺	一	槙	高四、〇間 目二尺
交讓木	高一、五—三、〇間 目一、一—一、六尺	二	百合木	高四、〇間 目一、〇尺
香椿	高三、〇—四、〇間 目〇、九—一、三尺	二	七葉樹	高四、〇—七、〇間 目一、四—二、四尺
榊	高一、〇—二、五間 目三、〇—六尺	四六	落葉松	高三、五—四、〇間 目一、三—一、六尺
一位	高四、〇—五、〇尺 巾三尺	四	齊墩果	高二、〇間 目八寸
大王松	高四、五間 目二、三尺廻	一	月桂樹	高一、〇—三、〇間 目一、〇—一、五尺
高野槇	高二、五間 目一、一尺	一	柚	高二間 目七寸
泰山木	高二、五—三、五間 目〇、九—一、三尺	二	杉	高九寸 巾二、五尺
檜	高七尺 目三尺	五	棕櫚	高一、〇—二、〇間 目一、〇—一、四尺廻
赤松	高五、〇間 目二尺	一	シノブヒバ	高一、五間 巾三尺
合歡木	高一間 目五寸	二	花柏	高二、〇間 目三尺
刺槐	高四、〇—六、五間 目一、二—二、七尺廻	一	ソロ	高四、五—六、五間 目〇、九—一、七尺廻

水木	高目通	四、〇間一、九尺	一本
辛夷	高目通	五、〇間一、七尺	
梓	高目通	四、〇間一、七尺	
藤	高巾	四、〇間一、八尺	
業平竹	高	一、〇—二、五間	
箭竹	高	一〇尺	
トサミヅキ	高巾	一、五間五尺	
計			二、一一〇本

寄附株物　内譯

種名	寸法	株數
八角金盤	高三—一二尺巾三—一二尺	
桃葉珊瑚	高三—一二尺巾三—一〇尺	八〇株
鄙躅類	高三—五尺巾三—六尺	六四六
禿松	高三—五尺巾二五—三五尺	二九五
夾竹桃	高二—一〇尺巾四—六尺	五二
柾木	高三—一〇尺巾二—八尺	一六三株
ドウダンツヂ	高三—九尺巾二—四尺	一二九
紫陽花	高三—四尺巾二—四尺	六
衞矛	高七—一〇尺巾三—八尺	九
滿天星	高四尺巾三尺	一
麻葉繡毬	高三尺巾三尺	一
珍珠花	高六尺巾六尺	五
萩	七、八本立	一〇〇
山吹	高二—五尺	二〇六
ウグヒスアグラ	高五尺巾四尺	一
車輪梅	高三尺巾四尺	一
ガク	高二尺巾二尺	五〇
海桐花	高三—四尺巾三—四尺	五五
梫	高二尺巾二尺	二
懸釣子	高二尺	二
莽草	高三尺	一
海棠	高三尺巾二尺	二〇株
伊吹	高八尺巾六尺	一
木爪	高三尺	一
ナギイカダ	高三尺巾二尺	一〇
矮檜	高一尺巾三尺	一〇
計		一、八五九株

寄附庭園材料

イ、燈籠	(雪見型)	笠石直徑三尺五寸	總高三尺五寸	一基
ロ、同	(雪見型)	笠石直徑四尺八寸	總高三尺五寸	一基
ハ、同	(春日型)	笠石直徑二尺	總高六尺	一基
ニ、同	(春日型變形)		總高十一尺	一基
ホ、橋材	(小海產花崗石)	長一二尺巾二尺厚八寸		二枚
ヘ、橋梁	(混凝土人造石洗出)	長一二尺巾六尺		一箇所
ト、露床	(混凝土製擬木)			一〇脚
チ、共用水栓	(鑄鐵マット珐瑯製)			一基
リ、國旗及竿				一組
ヌ、庭石	(七六〇切三)			一三一箇
ル、街燈柱				二〇基

寄附芝其他

種名	寸法	數量
高麗芝	六尺平方	四七五坪
鬼齒朶	四、五枚立	一、〇〇〇株
棠吾	六、七寸株	五〇〇株
龍ノ鬚	長五寸四、〇〇〇本束	二束
著莪	長五寸	一〇〇本

ヲ、街燈用地中線　長一、五尺　巾八寸　一式
ワ、立　札　（植込用）　二六枚

右の諸材料寄附芳名は別記會員名簿に採錄すれば略す。

第四節　築造

一　土木と營繕

震災後帝都の區劃整理事業の進捗に伴ひ、江東方面の道路の改修、地上げ竝に宅地の造成が著々進められた結果、本庭園も地盤の構成に就て根本計畫の變更を見るに至つた。

即ち本庭園周圍は區劃整理によつて決定した標高に基き庭園周圍に於て九尺、中央の記念堂の位置に於て十一尺として庭園内と道路、廣場、植込等地盤の標高を夫々詳細に決定することゝした。

敷地は元陸軍被服廠の事務所及倉庫跡を除いては大部分平坦な地盤であつたが、決定した計畫に對して尚一尺乃至三尺の盛土を必要とすることゝなつた、從つて全園盛土について一、七二〇立坪の土を要し、此の内記念堂建築より生ずる殘土三六四立坪を之に使用すると尚ほ一、三七四立坪の土を必要とするの狀態に迫られたのであつた。

元來江東方面の區劃整理に伴ふ盛土は全般的に必要とするもので、本庭園盛土にかやうに多量の土を一時に求める事はなか〳〵の難事であり、之が實施上には相等腐心、研究をしたのであるが偶々東京市土木局道路課に於て芝區愛宕山下を通ずる愛宕隧道工事の實施せらるゝを知り、同課に諮つて之が殘土の讓受方を交渉した結果、同現場より本庭園までの運搬費一立坪に付二十三圓を要するところ、土木局と會議の上で此の費用を折半して十一圓五十錢を當協會負擔として、土運搬は隧道工事と事實上分離することが出來ないので、この運搬を愛宕隧道工事請負人と隨意契約をして運搬させる事に決定した。

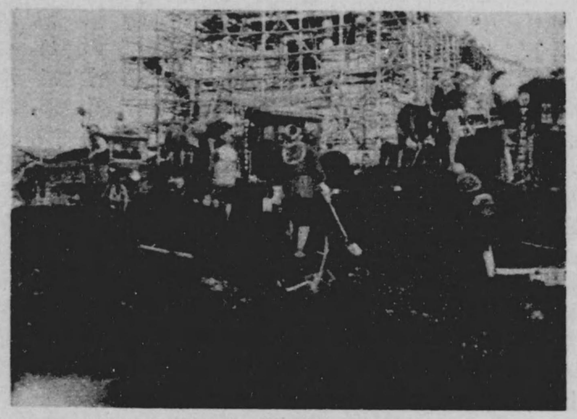
殘土運搬に先つて整地上及諸般の工事進行上、元被服廠建物基礎、其他庭園築造についての支障物件の取片付を昭和四年四月著手し、殘土運搬其他に支障のないやうにした。これは本庭園築造の初めであつて、五月には先に請負で契約した愛宕隧道の工事より生ずる土の運搬に著手し、著々工事の進捗を計つたのである。

而し愛宕隧道工事から生ずる殘土は其の質が大部分砂土で、植物植栽地盤用としては不適當なので先に契約した一、三七四立坪運搬の内から三八〇立坪を減じて九九四立坪に減額設計變更をなした、そして殘土の不足土は東京市土木局下水課下水改良工事神田區三崎町附近より生ずる良質の土を同課と協議の上で、一立坪四圓を以て同工事の請負人と前同樣の形式によつて隨意契約をなし、五年一月運搬に著手して愛宕隧道工事よりの土九九四立坪及下水改良工事よりの土三八〇立坪合計一、三七四立坪を豫定の通り二月運搬の完了を見、本庭園地盤構成についての基がこゝに出來上つた。

土の運搬請負は現場に搬入までの契約であつたので、一月殘土の園内小運搬及盛土地均工事に著手した。

小運搬はトロリーの設備によつて急速に進行し記念堂建築用材料置場其他の關係上支障個所だけは一時除いて記念堂根切殘土及下水課よりの讓受殘土は豫定の植込地に、愛宕隧道からの土砂は主に道路及廣場に盛土敷均し施工をなした。そして盛土個所、道路竝廣場に屬した個所は自然輾壓の他ハンドローラーで充分曳き堅めをなし、植込地に屬した部分は植樹其他に支障なき樣

特に入念に施工した。盛土地均完成個所は之を其の部分毎に道路廣場の新設に著手(五年二月)以來順次工事の進捗を圖つた。



土運搬の狀況

かくして、道路、廣場盛土、地均完成の個所は更に不陸高低敷均の上、六分砂利を厚一寸通り撒布して、更にローラーで曳き堅め、地盤完成を俟つて、表面には三分砂利を化粧用として、六分通りを撒布した。

池底築造狀況

記念堂正面の廣場は特に地盤を強固に築造する必要上、前記の工法の他特に基礎には中玉砂利を三寸通り張立施工することゝし、工事施工中にあつたが偶々三月二十四日帝都復興祭擧行されるに際して、畏くも　天皇陛下復興帝都御巡幸の砌本園にも行幸の旨仰出されたる爲め、記念堂前廣場の地盤を一層強固に築造する必要起り、五年三月土木局道路課援助の下に記念堂正面廣場を全面堀起し最初六噸ローラーにて充分輾壓し、割栗石を厚六寸乃至八寸に張立、目潰用として、良質衣土を使用し尚表面を更に前同樣良質衣土にて三寸乃至五寸厚に之を被覆し、數回に亘りローラー(八噸)にて充分輾壓をなし、表面には化粧用三分砂利を撒布し正面廣場の完全な築造をなし、地下水の排水設備としては、割栗石にて排水渠を築造し表面排水にも相當の設備をし全く地盤の築造を終つて五月には池の新設に著手したのであつた。

竣成せる池及其の附近

竣成したる庭園の一部

特に入念に施工した。盛土地均完成個所は之を其の部分毎に道路廣場の新設に著手(五年二月)以來順次工事の進捗を圖つた。

土運搬の狀況

かくして、道路、廣場盛土、地均完成の個所は更に不陸高低敷均の上、六分砂利を厚一寸通り撒布して、更にローラーで曳き堅め、地盤完成を俟つて、表面には三分砂利を化粧用として、六分通りを撒布した。

池底築造狀況

記念堂正面の廣場は特に地盤を強固に築造する必要上、前記の工法の他特に基礎には中玉砂利を三寸通り張立施工することゝし、工事施工中にあつたが偶々三月二十四日帝都復興祭擧行されるに際して、畏くも　天皇陛下復興帝都御巡幸の砌本園にも行幸の旨仰出されたる爲め、記念堂前廣場の地盤を一層強固に築造する必要起り、五年三月土木局道路課援助の下に記念堂正面廣場を全面堀起し最初六噸ローラーにて充分輾壓し、割栗石を厚六寸乃至八寸に張立、目潰用として、良質衣土を使用し尙表面を更に前同樣良質衣土にて三寸乃至五寸厚に之を被覆し、數回に亘りローラー(八噸)にて充分輾壓をなし、表面には化粧用三分砂利を撒布し正面廣場の完全な築造をなし、地下水の排水設備としては、割栗石にて排水渠を築造し表面排水にも相當の設備をし全く地盤の築造を終つて五月には池の新設に著手したのであつた。

竣成せる池及其の附近

竣成したる庭園の一部

特に池は風致の關係上池の形狀、濡水、其他に深く注意して、池緣は玉石五百個及筑波御影、甲州御影、攝津御影、讃岐御影、根府川石、鞍馬石等約百四十個を使用し捨石風或は組石樣に配置した。池は平水位の深さを約二尺として築造し、池の根切土の殘土は之を周圍築山に使用し池と築山との調和を計つた。池底及側壁の取合せは特に鐵筋混凝土(混凝土厚三寸丸鐵徑三分を一尺間に入れ)にて築造した。池水は之れを水道管より引いて必要に應じて使用し得る樣裝置をし、池水の排水は之れを市下水道に連絡して池水の調節を計る裝置をした。そして池水は水道の水を水源とした爲め瀧口樣の岩組をなし、丘を築いて林間を道遙する小徑を池緣に導いて、風趣に富む石橋(小海產御影石及鐵筋混凝土橋(人造擬石仕上げ)を架し、林間には春日燈籠二基(高十一尺及高六尺)を、池畔には雪見燈籠二基(高何れも三尺五寸)を配置した。此の燈籠及橋は篤志家の寄附に依るもので、寄附者に於てこの施工をしたのであるが、設計及監督は他工事との關係上特に當協會がこの任に當つたのであつた。

道路補强工事の狀況

尙記念堂建築工事用材料置場及記念堂假事務所等の敷地は之等の撤去と共に殘部の整理を始め、同時に鐘樓建設地帶の築造をもなし六年三月全く完了したので同四月土留、暗渠の新設に著手した。土留は植込との調和を主眼として、巾五寸高七寸花崗石粒洗出し仕上げとし、築山內の土留は築山及池との調和上玉石にて之を築造し、園內の排水を完備する爲め土留に沿つて適當に雨水桝を設け暗渠によつて之を下水道に連絡させた。暗渠は割栗基礎上に混凝土基礎を施し、陶管(內徑八寸、內徑六寸、內徑五寸、內徑四寸)を布設し幹線には八寸―六寸、枝線取付には五寸―四寸を使用し、下水管に連絡して園內排水設備を完成した。次いで同六月土留竣工個所每に人止柵の新設に著手し、土留に沿ふて鑄鐵製柱に鐵鎖にて柵を設置し、事務所及倉庫周圍は鐵柱立込鐵板を以て壁をなし、人止柵及周圍柵ともペンキ塗仕上げとし人止柵の設置完成を見た。

尙本園各入口の內正門前は混凝土ブロックで鋪裝を施し、北門は混凝土鋪裝とし、何れも車馬通行の自由なる樣に設備し、西門及南門は之を混凝土鋪裝とし、此處に本園の築造は全く完了を告げたのである。

六年七月四日、記念堂及復興記念館へ畏くも　皇后陛下御巡啓を仰出されたる爲め、六月記念堂より記念館への通路の補强工事に著手し、復興祭當時補强工事を施工したと同樣の工法にて之が補强及復舊を終り、震災記念堂附帶庭園の設備を全く完了した。記念堂と共に意義ある記念すべき庭園が帝都の名所の一つとして江東の地にその華麗を誇ることになつたのである。

二　植物

寄附植物は總べて移植後完全に活着を計るため、本庭園に搬入前豫め根廻の必要があるので針葉樹(主に黑松)一一三本、常綠濶葉樹(柯、樫、細葉冬青等)八八本、及落葉濶葉樹(欅、公孫樹等)七九本に對し四年六月根廻工事に著手した。

樹木の堀廻しに際して鉢の大さは根元直徑の三倍、厚さは約鉢の半徑に等しくした。堀り下げ直根を搜る前に假支柱を施し、側根は大部分切斷してその切斷面は鋭利な小刀で平滑に切直し(但し側根の內樹木自體支持用として三四本存置す)此の側根は鉢面に接したる部分に於て外皮を完

特に池は風致の關係上池の形狀、濡水、其他に深く注意して、池緣は玉石五百個及筑波御影、甲州御影、攝津御影、讃岐御影、根府川石、鞍馬石等約百四十個を使用し捨石風或は組石樣に配置した。池は平水位の深さを約二尺として築造し、池の根切土の殘土は之を周圍築山に使用し池と築山との調和を計つた。池底及側壁の取合せは特に鐵筋混凝土(混凝土厚三寸丸鐵徑三分を一尺間に入れ)にて築造した。池水は之れを水道管より引いて必要に應じて使用し得る樣裝置をし、池水の排水は之れを市下水道に連絡して池水の調節を計る裝置をした。そして池水は水道の水を水源とした爲め瀧口樣の岩組をなし、丘を築いて林間を逍遙する小徑を池緣に導いて、風趣に富む石橋(小海產御影石及鐵筋混凝土橋(人造擬石仕上げ)を架し、林間には春日燈籠二基(高十一尺及高六尺)を、池畔には雪見燈籠二基(高何れも三尺五寸)を配置した。此の燈籠及橋は篤志家の寄附に依るもので、寄附者に於てこの施工をしたのであるが、設計及監督は他工事との關係上特に當協會がこの任に當つたのであつた。

道路補强工事の狀況

尙記念堂建築工事用材料置場及記念堂假事務所等の敷地は之等の撤去と共に殘部の整理を始め、同時に鐘樓建設地帶の築造をもなし六年三月全く完了したので同四月土留、暗渠の新設に著手した。土留は植込との調和を主眼として、巾五寸高七寸花崗石粒洗出し仕上げとし、築山內の土留は築山及池との調和上玉石にて之を築造し、園內の排水を完備する爲め土留に沿つて適當に雨水桝を設け暗渠によつて之を下水道に連絡させた。暗渠は割栗基礎上に混凝土基礎を施し、陶管(內徑八寸、內徑六寸、內徑五寸、內徑四寸)を布設し幹線には八寸―六寸、枝線取付には五寸―四寸を使用し、下水管に連絡して園內排水設備を完成した。次いで同六月土留竣工個所每に人止柵の新設に著手し、土留に沿ふて鑄鐵製柱に鐵鎖にて柵を設置し、事務所及倉庫周圍は鐵柱立込鐵板を以て壁をなし、人止柵及周圍柵ともペンキ塗仕上げとし人止柵の設置完成を見た。

尙本園各入口の內正門前は混凝土ブロックで鋪裝を施し、北門は混凝土鋪裝とし、何れも車馬通行の自由なる樣に設備し、西門及南門は之を混凝土鋪裝とし、此處に本園の築造は全く完了を告げたのである。

六年七月四日、記念堂及復興記念館へ畏くも　皇后陛下御巡啓を仰出されたる爲め、六月記念堂より記念館への通路の補强工事に著手し、復興祭當時補强工事を施工したと同樣の工法にて之が補强及復舊を終り、震災記念堂附帶庭園の設備を全く完了した。記念堂と共に意義ある記念すべき庭園が帝都の名所の一つとして江東の地にその華麗を誇ることになつたのである。

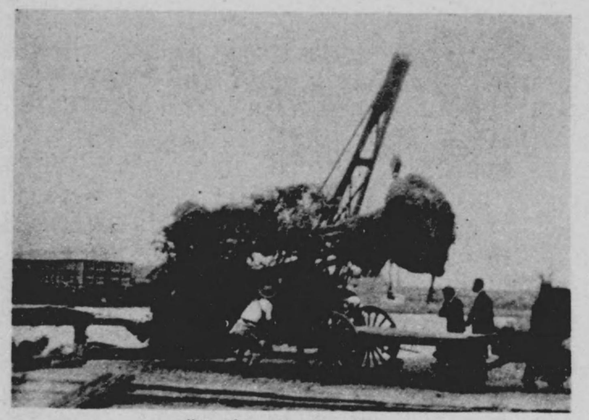
二　植　物

寄附植物は總べて移植後完全に活着を計るため、本庭園に搬入前豫め根廻の必要があるので針葉樹(主に黑松)一一三本、常綠濶葉樹(柯、樫、細葉冬青等)八八本、及落葉濶葉樹(欅、公孫樹等)七九本に對し四年六月根廻工事に著手した。

樹木の堀廻しに際して鉢の大さは根元直徑の三倍、厚さは約鉢の半徑に等しくした。堀り下げ直根を搜る前に假支柱を施し、側根は大部分切斷してその切斷面は鋭利な小刀で平滑に切直し(但し側根の內樹木自體支持用として三四本存置す)此の側根は鉢面に接したる部分に於て外皮を完

全に剝離した。鉢は樽卷をなしたる後、豫め積んで置いた土を小棒にて間隙なく搗込み、灌水を施し地表に水鉢を切り風除の必要なるものは杉丸太にて支柱を施しておいた。

九月には寄附受領せる公孫樹(高六間目通六尺廻)天木の堀取運搬を初めとし、續いて梧桐(高五間目通二尺九寸廻)、柯(高三間半乃至四間目通三尺乃至三尺三寸廻)を千駄ヶ谷より搬入し、十一月には百日紅(高三間目通二尺三寸廻五本立)及樫三本を本郷より搬入し、各池邊の植込となる豫定地へ定植した。

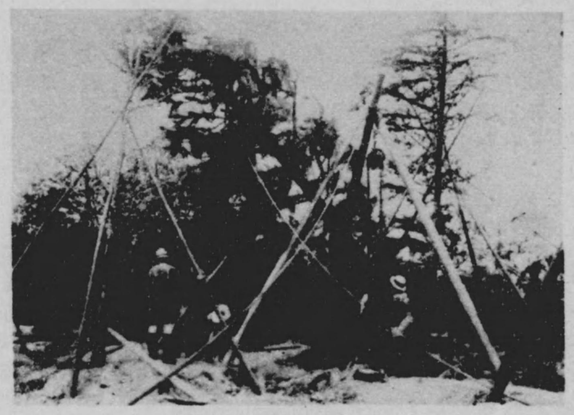


陸揚げ中の木槲

その他寄附者側の希望により早く搬入した樹木及灌木は、未だ植込地の地盤施工中であつた爲め一時記念堂東北隅に假植した。

そして翌五年二月には庭園の地盤構成完了したので、同日工費壹萬貳千貳百六拾九圓にて寄附樹木の運搬竝植栽工事を起工するに至つた。

落葉濶葉樹、欅(高六間乃至八間半目通二尺五寸乃至三尺七寸廻)公孫樹(高四間乃至五間目通二尺乃至二尺五寸廻)篠懸木等の喬木は吉祥寺、練馬、駒澤方面より搬入し、三重の塔の添景として、或は堂北側の主庭、鐘樓地帶、正門附近植込の主木として植栽し、その他千葉、埼玉地方よりも落葉樹を搬入し何れも各要所に定植した。續いて三月下旬よりは柯、樫、等の常綠、濶葉樹、安行より大王松、黑松等の搬入に著手した。そして所定の位置に適應せる樹姿を選定して落葉樹と組合せて景趣を作るべく植栽した。殊に池新設に際しては水道口を水源となすため、附近は瀧口樣の岩組をなし丘を築き樫樹(高五間乃至七間目通一尺五寸乃至三尺廻)柯樹(高三間乃至四間目通二尺乃至三尺廻の幹物)等の常綠喬木を主木とし八角金盤、桃葉珊瑚、珍珠花等の大株を上木の形姿と充分調和する樣配植し欝蒼たる樹林地帶とした。



大公孫樹の運搬

大王松の植付

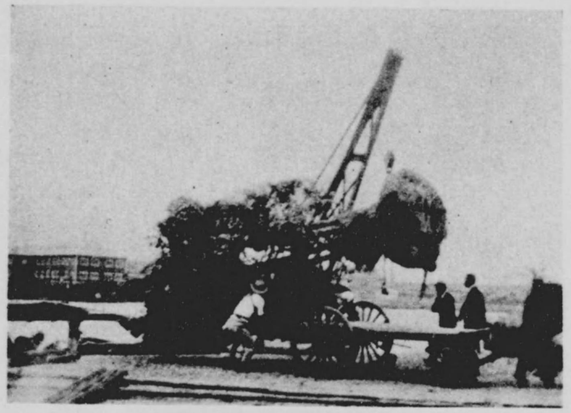
水邊には中洲松、柳、海桐花、竹類に萩、躑躅類、棠吾等を配栽した。

樹木風除け設備は樹木の大小、植栽位置等を參酌し杉丸太を以て支柱連結、布木又は鳥居型扣木を設け、幹の結束部は杉皮を卷き保護の上棕梠繩にて結束し、丸太と丸太との接合部は釘打鐵線掛とし、扣木丸太は豫め「クレオソート」二回塗せるものを使用した。

尙植栽工事中四月上旬には曉星中學の寄附申込により、同庭より大公孫樹を搬入し「悲しみの群

全に剝離した。鉢は樽卷をなしたる後、豫め積んで置いた土を小棒にて間隙なく搗込み、灌水を施し地表に水鉢を切り風除の必要なるものは杉丸太にて支柱を施しておいた。

九月には寄附受領せる公孫樹(高六間目通六尺廻)天木の堀取運搬を初めとし、續いて梧桐(高五間目通二尺九寸廻)、柯(高三間半乃至四間目通三尺乃至三尺三寸廻)を千駄ヶ谷より搬入し、十一月には百日紅(高三間目通二尺三寸廻五本立)及樫三本を本郷より搬入し、各池邊の植込となる豫定地へ定植した。

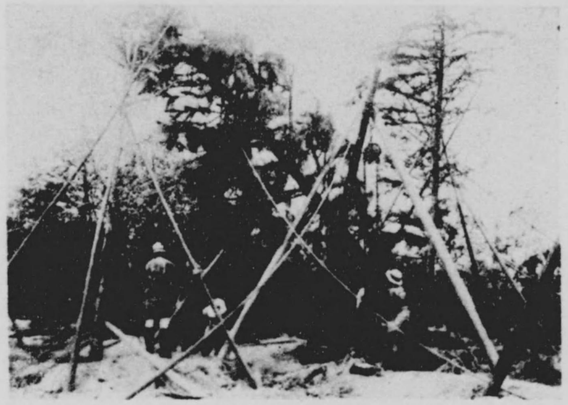


陸揚げ中の木槲

その他寄附者側の希望により早く搬入した樹木及灌木は、未だ植込地の地盤施工中であつた爲め一時記念堂東北隅に假植した。

そして翌五年二月には庭園の地盤構成完了したので、同日工費壹萬貳千貳百六拾九圓にて寄附樹木の運搬竝植栽工事を起工するに至つた。

落葉濶葉樹、櫟(高六間乃至八間半目通二尺五寸乃至三尺七寸廻)公孫樹(高四間乃至五間目通二尺乃至二尺五寸廻篠懸木等の喬木は吉祥寺、練馬、駒澤方面より搬入し、三重の塔の添景として、或は堂北側の主庭、鐘樓地帶、正門附近植込の主木として植栽し、その他千葉、埼玉地方よりも落葉樹を搬入し何れも各要所に定植した。續いて三月下旬よりは柯、樫、等の常綠、濶葉樹、安行より大王松、黑松等の搬入に著手した。そして所定の位置に適應せる樹姿を選定して落葉樹と組合せて景趣を作るべく植栽した。殊に池新設に際しては水道口を水源となすため、附近は瀧口樣の岩組をなし丘を築き樫樹(高五間乃至七間目通一尺五寸乃至三尺廻)柯樹(高三間乃至四間目通二尺乃至三尺廻の幹物)等の常綠喬木を主木とし八角金盤、桃葉珊瑚、珍珠花等の大株を上木の形姿と充分調和する樣配植し蔚蒼たる樹林地帶とした。



大公孫樹の運搬

大王松の植付

水邊には中洲松、柳、海桐花、竹類に萩、躑躅類、棠吾等を配栽した。

樹木風除け設備は樹木の大小、植栽位置等を參酌し杉丸太を以て支柱連結、布木又は鳥居型扣木を設け、幹の結束部は杉皮を卷き保護の上棕梱繩にて結束し、丸太と丸太との接合部は釘打鐵線掛とし、扣木丸太は豫め「クレオソート」二回塗せるものを使用した。

尙植栽工事中四月上旬には曉星中學の寄附申込により、同庭より大公孫樹を搬入し「悲しみの群

像附近に植栽して堂南側植込を強調し本堂及主庭との調和をとることゝした。

この公孫樹は本庭園に於て最大のものであり本園の主とも謂ふべきもので、高八間半目通周圍八尺樹齢約貳百年と稱せられ堀取の際その鉢の直徑十二尺その重量は約三千貫あつた。

五月には更に別途工費で石神井村より三、〇〇〇本の柯樹(高二間半乃至三間半目通一尺乃至一尺八寸廻)を搬入し、主に周圍玉垣に沿つて植込み、綠濃き樹林を作つて江東一帶の煤煙防止の用を兼ねしめた。

株物運搬竝植栽工事も樹木植栽工事と前後して二月下旬に起工し、寄附株物八角金盤外十六種一、三一四株を安行村他四十七ヶ所より搬入し、既植樹木の配置を充分に考慮し上木と調和する樣配植した。

植栽の位置は木石、瓦礫等凡て根の生長に害あるものを取除き、樹根に相當の植穴を堀り底部を軟らげ木振風致よく植栽し、根埋の際は客土を輕く埋込み灌水と共に根廻りを間隙なき樣充分に搗入埋立をした。

六月には寄附株物四九七株の外、更に八角金盤外七點一、七八一株を購入し植込全般に亘つて之が補植工事をなし、これにて樹木竝株物の植栽工事が稍完成したので次に高麗芝(一、〇三五坪)の植栽工事に取りかゝり、園内日常りの良い道路廣場池緣に面し、巾三尺乃至六尺に植付をなした。

先づ在來地盤を五寸乃至六寸通り耕耘し、雜草及土塊、瓦礫等を取除き、整地の上畑土を撒布地均しをし、芝面一坪に付き八拾本の竹串で芝と下敷土とに間隙及凸凹などない樣に丁寧に打付け、且つ被土を斑なく撒布して地均の上灌水を施した。

翌六年五月には復興記念館が落成したのでその周圍の植栽工事を起工し、主要樹木には安行及駒澤より搬入した印度杉を以てし、その前庭には棕櫚を植栽し芝を張つて同館との調和を計つた。

かくして、昭和四年四月本園整地より盛土、地均、植栽其他工事完成まで二年有二ヶ月を費して此處に名實共に記念堂附帶庭園としての植物植栽工事は完了したのである。

第十三章　復興記念館

第一節　建築の趣旨

震災記念堂は不言の警告を不斷に與ふるものであると言ふ趣意の下に建設されたのであるが、其の中に齊しく設計された兩翼の記念品陳列室も此の目的を後世永く宣揚せん爲めに、各方面よりの資料を蒐集陳列せんとしたものであつた。

我々が圖り知ることが出來ぬ自然の偉力によつて投げ出された幾多の思ひ出多き資料は、記念堂内に設けられた小規模の陳列室では到底之を充すに由なき程數多くのものがあつたのであつた。

その上に偶々昭和四年秋、東京市政調査會主催、復興局、東京市後援の帝都復興展覽會開催に際し、其出品物に追憶の情切なるものがあつた。當時の人々は、灰燼に歸した帝都の面影が、髣髴として浮ぶ幾多の被害品に萬斛の涙を注ぎ、眼を轉じては雄々しくも曾ては焦土と化せし地に今は聳ゆる大厦高樓輪奐の美を眺めて、何れも彼の大震火災の事蹟及び帝都復興の事業を永遠に傳ふべき好箇の資料なりと考ふるの輿論が一般に濃厚となつた。その結果、之等東京市史の頁を飾る劃期的貴重なる記念品を一堂に蒐集して、永遠に陳列保存せんとする關係各方面の切なる希望もあつたので、當時東京市、財團法人東京市政調査會及本會協議の上、其の主なる出品物は不取敢本會に於て東京市本所公會堂内に保管することゝなつたのである。

そして右資料及び豫て本會に於て蒐集中の震災記念品を併せ之を永遠に保管陳列し、大正十二年の震災及復興を記念することによつて、將來災變に處する社會教化の指導者として後世に傳ふるに適切なるものと思料せられて、震災記念堂内に設備せんとした陳列室の計畫を變更して、震災復興記念館を建設するに至つたものである。

此に當時本會より東京市長宛震災記念館設備に關する申請竝に日を同ふして發表された計畫案は、次の樣なものである。

庶發第三二一號
昭和四年十一月九日

東京市長　堀切善次郎殿

財團法人東京震災記念事業協會
會長　堀切善次郎

拜啓目下財團法人東京市政調査會主催復興局東京市後援ノ下ニ開催相成居候帝都復興展覽會陳列出品物ハ洵ニ帝都ノ震災及復興ヲ永久ニ記念シ得ベキ好箇ノ資料多數出品セラレ居リ他日更ニ蒐集困難ノモノト被存候本會ニ於テハ豫テ建造中ニ係ル東京震災記念堂内ニ一部同樣計畫有之候モ規模狹小充分ノ効果ヲ收メ難キ遺憾有之候ニ付テハ何卒御市ニ於テ該展覽會陳列物等ヲ陳列シ大正十二年ノ大震災及帝都ノ復興ヲ永久ニ記念シ得ベキ記念館等ノ設備ニ付特ニ御高配賜リ候樣致度得貴意候　敬具

追而現復興展覽會出品物ノ搬出等ニ付テハ本會ノ費用ヲ以テ適當處理不苦申添候。

計畫案

一、建設場所　本所區横網町公園内
一、敷地面積　約四百坪
一、記念館建坪　延約四百坪
一、經費概算　約二〇〇、〇〇〇圓

内譯

建設費　一四〇、〇〇〇圓
陳列費　五〇、〇〇〇圓
設計監督費其他　一〇、〇〇〇圓
一、陳列材料　約一、〇〇〇點
震災記念資料　約五〇〇點
復興記念資料　約五〇〇點

右記念館は昭和五年九月二十六日工を起し、同年十一月二十八日には建設費の一部として東京市より金五萬圓、復興事務局より建築補助金として壹萬七千六百五十圓の下附を受け、他日本館を東京市に引繼べきを豫想し、昭和六年三月東京市に於ては之を復興記念館と呼ぶことに決定し、同年四月十七日建物の竣工を見たが、内部陳列の完備を見るに至らなかつた。七月四日には畏くも皇后陛下復興帝都御巡啓に際し、本館に御立寄の光榮に浴することゝなつた爲め、本會では急ぎ陳列をなし記念物の御台覽を仰ぐことゝなつた。斯くして同年八月十八日には竣工奉告祭竝開館式を擧行し、同日午後零時より一般入場を開始し、本會解散と共に東京市に本引繼を執行したのである。

蓋し本館は依然として震災記念堂の附帶別館であり、且大正大震火災の被害を記念する物品、其狀況を後世に傳ふべき繪畫、寫眞、統計等を整理陳列した小博物館であると同時に、地震火災に關する諸種資料の陳列によつて災害に對する不斷の準備と、其豫防智識を普及し、以て當時の受難者の追弔を主とする記念堂と相俟つて震災復興の記念とするものである。

第二節　設計と施工

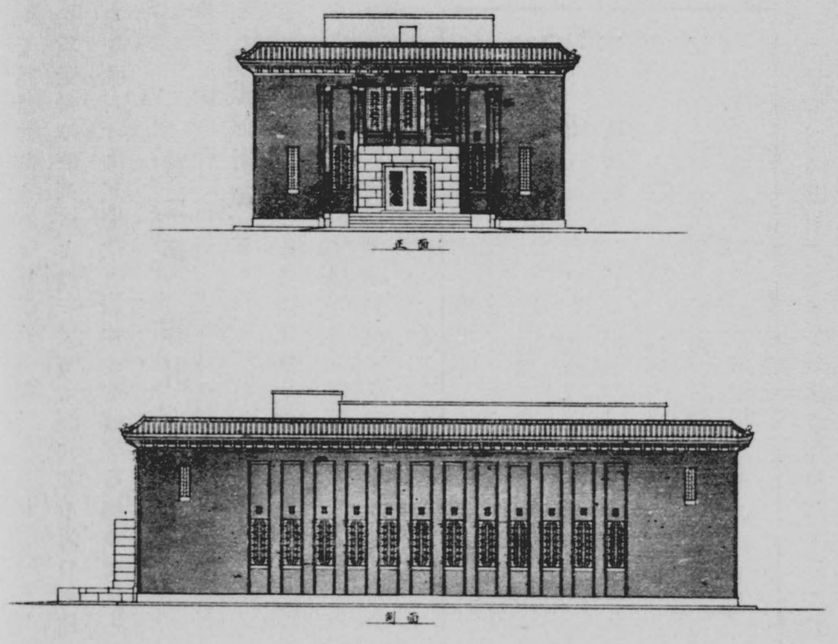
一　建築設計概要

位置　東京市本所區横網町六番地
建坪　一七四坪二七
延坪　三五六坪〇九

内譯

室名	面積	摘要	室名	面積	摘要
玄關	五坪二四		二階廣間	三八坪〇五	
事務室	四坪二二	押入共	階段室	二四坪八〇	
下足預室	四坪二二	傘棚共	物置	七坪二九	
倉庫	四坪三四		一階陳列室	一一四坪一六	
便所	四坪三四		二階陳列室	一二二坪四四	
一階廣間	二六坪九九				

右面積は外壁は二階コンクリート壁眞を以て眞とし間仕切はコンクリート眞を以て計る。



復興記念館設計圖

構造大要

鐵筋コンクリート造にして耐震耐火構造とす。

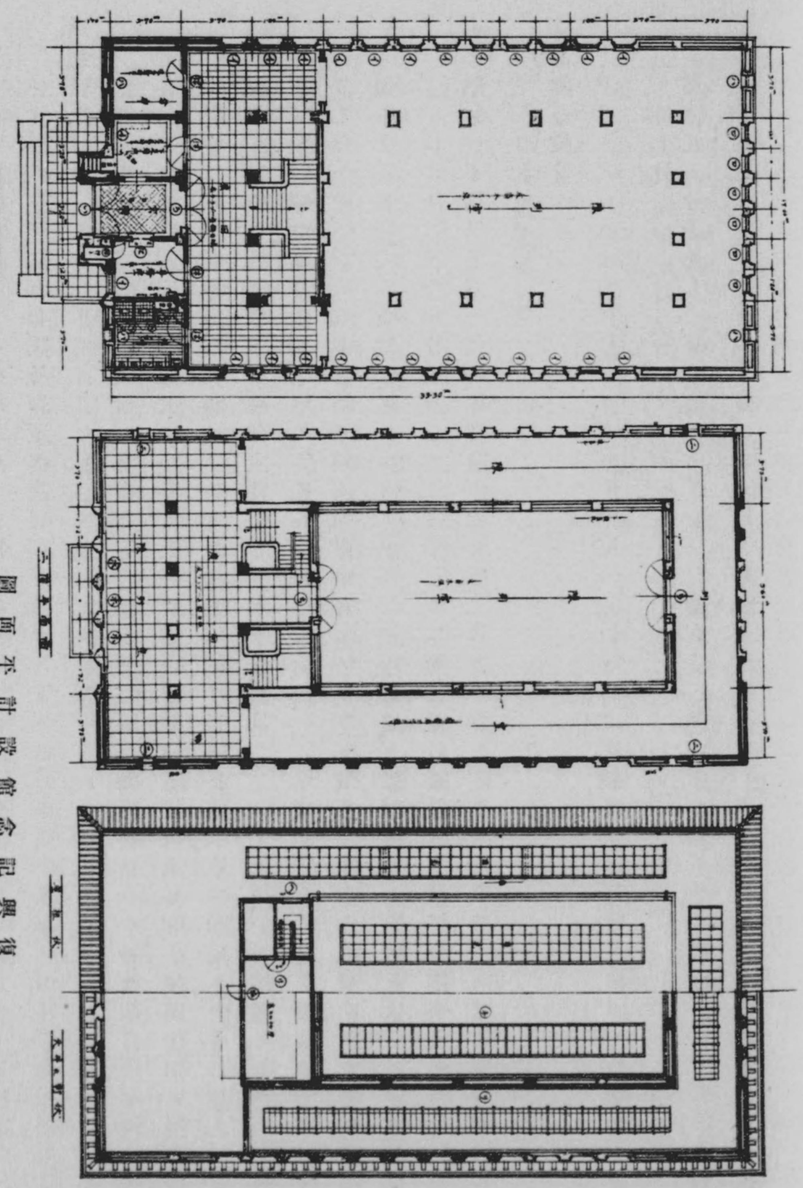
基礎總堀り割栗地形となし、鐵筋コンクリート總床盤基礎梁を縱横に架設し不同沈下を防ぐ。

柱、梁、床、壁體、階段、軒先、其他主要箇所鐵筋コンクリート造、二階陳列室、間仕切二重壁の箇所一部木造とす。

外部仕上げ

基壇、石階段、葛石等總て福島縣產櫻御影を使用、玄關、外壁、建物周圍根石、窓臺石等は香川縣產熊取谷石を以て裝ひ、壁體見切長押下部迄「タイル」張り、見切長押持送り、軒付下端迄及屋上「ベントハウス」等人造石塗り洗出し仕上げとす。

正面柱頭の怪動物及窓上部換氣孔裝飾は「テラコッタ」とす。陸屋根床



復興記念館設計圖面平

「セメントタイル」張り一部明り取り硝子屋根、「ベントハウス」、玄關屋根等防水層上部豆砂利撒とす。軒屋根は棟包、隅棟留蓋等陶器製瓦葺きとす。

內部仕上げ

玄關腰廻り一階廣間、階段室、二階廣間等天井下部迄靜岡縣產敷島石水磨き貼付け、階段々石各出入口地覆石は櫻御影上々小叩仕上げ、受付臺、同額緣、下足預室額緣、小便所仕切立等大理石貼り、一階廣間柱頭石膏製「メタリコン」仕上貼付け、二階各陳列室巾木「ビクチュアレール」木造、其中間壁布張り仕上げ、事務室腰巾木、笠木木造、羽目「ラフコート」塗、便所腰廻り床「タイル」張り、下足預室、倉庫腰木、屋上階段、人造石塗研出仕上げ、一、二階廣間床人造石眞鍮目地棒入れ研出し仕上げ、一階陳列室、二階外側陳列室床、寄木「ブロック」張り、二階中央陳列室床「チーク」寄木張とす。各室天井及壁は「プラスター」塗とし、便所、倉庫、下足預室、屋上物置を除く各室は「プラスター」の上水性塗料仕上げとす。一階より二階に至る階段巾木、蹴桁手摺受迄兩面敷島石貼付け、手摺及手摺子共眞鍮製着色仕上げ、二階より屋上迄手摺及手摺子共眞鍮製「パイプ」着色仕上げとす。

建具其他設備

窓及出入口窓は何れも「スチールサッシュ」とし外側に鐵製格子取付け共に「ペンキ」塗仕上げとす。

硝子正一分素通し、一部分擦り硝子使用、二階廣間各窓「ステンドグラス」嵌込とす。二階陳列室明り採り天井「スチールサッシュ」擦り硝子嵌込み、「サッシュ」は「アルミニュームペンキ」塗とす。正面出入口扉丹銅製、彫刻部分鑄物板、丹銅板何れも鐵骨に鋲止め仕立て軸釣とす。玄關、事務室、陳列室、下足預室、便所、倉庫等、各出入口扉「チーク」製漆拭仕上げ、屋上出入口扉は「スチール」製「ペンキ」塗、「ベントハウス」及便所內扉「タンギール」製、以上各扉何れも蝶番釣とす。二階外側陳列室は床上より外部窓上に換氣孔取設け調節設備を付す。天井換氣孔は天窓に通じ中央陳列室壁面の換氣孔より排出するものとす。

雨水、排水は各樋より溜桝に連絡し素燒土管にて一ケ所に集め更に市下水道に放出するものとす。

二　給水衛生工事概要

給水工事

給水方法は市水道直結とし市水道局規定の給水管を使用し、徑二吋半以下は厚口鉛管を使用するものとす。給水箇所は事務室、便所の二箇所にして事務室に於ては飲料用、洗面用に使用し、便所に於ては手洗及便器洗滌用に使用するものとす。配管は壁、床等見え掛り體裁よく施工するものとし、止水栓、給水栓等見え掛りは「ニッケル」鍍金を施すものとす。

排水及排氣工事

排水管は大小便排水管と便所內手洗、事務室手洗、各床、排水「トラップ」を附し、之を連結し總て鉛管を使用するものとし、建物其他に障害とならざる範圍に於て流水の方向に下り勾配を取り「トラップ」以外は溜水せざる樣注意配管し、要所々々には掃除口を設け入念堅牢に配管するものとす。小便器四個、大便器二個、各連結裝置となし、小便所連結裝置は使用人員數により定量の水を一定時間每に自動シスターンにより洗滌水掃するものにして、大便所用シスターンは鎖付き「ハンドル」式となし使用都度洗滌水洗するものとす。

大便所直下へ排除管本管徑四吋鉛管を以て大便所床より約五十糎の位置より適當の勾配四十分の一以上を付し、鐵製亞鉛鍍金吊金具にて堅固に架渡し、各便器より右排除管に喇叭形の管を垂直連結せしめ、排除本管よりは四吋以上の放臭管を室内臭氣拔管に連結せしめ、支持金物により屋上迄立上げ、指定の頂部笠形を取付くるものとし、室内排氣管は別途工事となすものとす。

洗滌槽は連結裝置用大便器にありては一個當り水量二英「ガロン」、小便器は一英「ガロン」の放水量を有し、小便器にありては四個に對し一個の逆「ボールタップ」を利用したる簡易「サイフオン」式「シスターン」とし、之に眞鍮製「ニツケル」鍍金を施し、内部に「コーペル」銅板十二オンス付を用ひ、落箱に作製し、二重裝置となす。大便及小便洗滌管は鉛管及引拔眞鍮管を用ひ露出部は眞鍮管「ニツケル」鍍金とし、陰部は鉛管を使用するものとす。大便所、事務室床の排水は小便排水管に連結し、下足預室は雨水排水土管に連結し、各自「トラップ」を附するものとす。屋外排水管は「ヒューム」管を使用し、建築線迄敷設し、市下水道に導くものとす。

三　設計變更

斯くして本建築工事は一般競爭入札に附したのであるが、入札の結果は戸田組に拾萬七千九百圓を以て落札したのである。爾來工事進行中には幾多の設計變更をなし、本館は益々其外觀を整備して來たのであるが、其變更したる點を列擧すれば大要次の如くである。

一、正門玄關入口廻り熊取谷石貼付を「タイル」貼付けに變更す。
一、軒屋根瓦下防水層及シンダーの使用を廢止す。
一、建物高さ八糎增加の爲階段々石の高さを變更す。
一、廣間、壁、柱、階段等の貼付け石を全部日華石に變更す。
一、二階外側陳列室床は幅六糎高さ八糎米松並材根太を約四十五糎間に割合せ配置し、その上に捨床杉並材厚八分三厘板を張立て、更に寄木ブロックを貼り付くるものとす。
一、一階及二階廣間巾木は田中式「カストストーン」に變更す。
一、二階中央陳列室換氣孔金物を七箇所增設し二十箇所とす。
一、屋上昇梯子增設
一、階上廊下巾木上換氣孔の中六箇所を減じ三十箇所とす。
一、屋上換氣孔鎧戸三箇所を減じ四十二箇所とす。
一、事務室のブライドを廢止す。
一、正面柱上怪動物「テラコツタ」製を石造とす。

以上で大體本項の說明は終つたのであるが、戸田組の請負總額は設計變更の結果拾壹萬貳千參百五拾參圓拾五錢、給水衞生工事は日本水道衞生工事株式會社に於て施工し請負額六百四拾七圓、尙此の他に東京市の設備した工事がありその詳細は左の如くである。

一、換氣裝置　四分ノ一馬力「ファン」　十二臺
　　八分ノ一馬力「ファン」　十一臺
一、電氣裝置　配線　金屬管陰蔽工事
　　器具　六十六個
　　他ニ　コンセントプラグ　八個
一、日　除　鎧形通風日除　三十四箇所

一、陳列ケース　立ケース　高サ六尺六寸五分、幅八尺、奥行二尺二寸　三個
　　高サ六尺六寸五分、幅六尺、奥行四尺　十二個
　　覗ケース　高サ三尺、幅六尺、奥行二尺、　五十四個

陳列室は階下と階上に分れて居るが階下は主として震災記念物品、寫眞、繪畫を陳列し、階上は主として復興資料の記念品を陳列し得る樣設計せる爲め内壁の利用と云ふ點が本館の特徴とも云ふべきである。

第三節　陳列品の蒐集

一　蒐集の導火線

本會が此の蒐集を開始したる導火線は一に大正十三年九月、上野自治會館に於ける東京市社會局主催、震災復興展覽會に其の端を發するのである。當時災後日尚淺くして市民漸く復興の首途に立たんとする折柄なるも、一は以て市民の精神生活を鞭達し、一は以て復興の大事業を援助せんと企てたる該展覽會に於て、當時の慘禍を追想するに足る被害品は陸續として集積し、之を觀る者又一入の感慨無きを得なかつたのである。此の會たるや當初の期間九月一日より同月十五日迄を三十日迄とし會場を二箇所に設け、上野自治會館に於ては震災記念物を陳列し、不忍池畔觀月橋際に於ては復興參考資料を陳列して大いに市民の注目を惹いたものである。當時市長の各方面に發したる依頼狀の大要は次の如くである。

各官衞、學校、會社、商店、團體、其他宛

拜啓陳者昨秋大震災は本市空前の大創痍でありまして其恢復は到底一朝一夕に於てなさるべきでないとは何人も均しく推斷したる處で御座いました。然るに未だ半歲を出でざるに精神復興は申すに及ばず物質的にも着々として復興の曙光を顯現し、今や舊に劣らざる活況を呈するに至りました事は御同慶欣喜に堪えざる次第で御座います。大震災一週年を期して震災復興展覽會を開催することゝ致しました。扨て會の趣旨は改めて申上げる迄もなくポンペイ市が餘儀なく自然的記念物を殘すに止つた憾みに鑑み吾々市民は科學的に積極的につまり炯爛たる故文化を弔ふに充分なる記念物を持寄つてお互に教育的感銘を深からしめ且又後人の印象と研究とを幇助したいと云ふのが其一つであります。次に前記の通り世界を驚かすべき能率を以て復興しつゝある現東京市に少くとも現代科學と永年の經驗とを提供し所謂復興參考資料として頂く必要を感じた事が其二つであります。

就きましては多忙の場合恐れ入りますが別紙出品規定を御覽の上適當なる御出品を懇請申上げる次第で御座います。

匆々

殿　　東京市長　永田秀次郎

本協會は該展覽會の終るや、直ちに出品臺帳を基礎として其所有者に書面を發し、又は職員を派して其の蒐集に鋭意努力せしも、當時出品者の多くは住居を轉々とせる者、或は移動バラックに住せる者、又は行方不明の者多くして出品應募の勸誘は遲々として其の效を奏しなかつたのである。

二　蒐集の經過

此に於て本協會は徹底的宣傳の必要を痛感し、時の會長故西久保弘道氏は昭和二年五月三日、都下の主なる新聞社に對し、縷々實狀を述べて依頼をしたのであるが、他面に於ては繪畫資料及記念物品募集規定を作成すると共に、電車内には三日間のポスター廣告をなし、各區役所及區役所を通じて各町會に依頼し、町會の掲示板は到る所ポスターを以て埋められたのである。そして職員自らの應募者勸誘も亦夜を日に次で努力をしたのであるが、其赴く所は主として大建築を目標とし帝大圖書館、デパート、丸善等其の主なるもので、其の宣傳、蒐集の努力は實に偉大なものであつた。

左に各區長宛依頼狀を載せて參考とする。

會長　西久保弘道

各區長宛

大震火災記念物品及繪畫資料募集の件御依頼

拜啓豫而御授助相願候本會事業本所區横網町被服廠跡東京震災記念堂ノ建設ニ付テハ廣ク一般ヨリノ寄贈ニ依リ同堂内ヘ當時被害ノ物品及繪畫ヲ陳列シ以テ該記念堂ノ建設ヲ意義アラシメ度候ニ就テハ右募集ニ付乍御手數貴區内各町會ヘ依頼方御配慮相煩度得貴意候也

追而左記印刷物添付致候ニ付依頼狀ニ町會名御記入ノ上貴區より適宜御發送相願度候

記

一、町會宛依頼狀
一、募集規定
一、應募申込書
一、ポスター

一、本會寄附行爲

次に町會宛依頼狀文案を載せて見る。

拜啓時下愈々御清祥奉賀候

陳者本會儀去る大正十二年九月一日の大震火災を後世に記念し併せて數萬の犧牲者を永久に追弔する爲其の際慘害を極めたる本所區横網町被服廠跡に汎く有志の義捐に依り東京震災記念堂の建設を圖り專ら目的の達成を期し有之候處右事業に伴ひ同記念堂内に慘害を記念すべき物品及災害の狀況を記念繪畫として陳列し以て記念堂の建設を一層意義あらしめ度就ては右趣旨御了知相成之が資料の募集に付御配慮相煩度此段得貴意候也

年　月　日

會長　西久保弘道

町會宛

追而別紙募集規定、申込書、ポスター、本會寄附行爲添附候に付問合有之候はば御指示の上可成御取纒め御送附相願度

以下募集規定を記載する。

東京大震火災記念堂内記念陳列物募集

本會事業本所區横網町(被服廠跡)東京大震火災記念堂の建設に伴ひ同記念堂内に當時被害の物品及災害の狀況を表したる繪畫を陳列し以て永久に彼の慘害の事蹟を記念致度就ては左記に依り記念物品及繪畫資料を進んで應募せられんことを希望致します。

昭和二年五月

東京市麴町區有樂町(東京市役所内)
財團法人　東京震災記念事業協會

記

記念物品の部

□募集物品　大正十二年九月東京府下ニ於テ大震火災ノ被害ヲ受ケタル物品ニシテ大小ニ拘ラズ災害ノ事跡ヲ記念シ得ベキモノ

□募集期間　六月末日迄

□應募方法　募集期間内ニ本會宛左ノ事項ヲ具シ申込マル、コト

一、物品名及數量

二、被害場所及說明

三、應募者ノ住所姓名

□選考　應募物品ハ本會ニ於テ八月末日迄ニ選考シ採否ヲ通知ス

□持込　採用物品ノ持込ハ本會ヨリノ通知ニ依リ被服廠跡現場ニ送付スルコト但シ費用ハ協議ニ依ル

□寄贈者　寄贈者ハ本會々員規則ニ依リ本會々員トス

繪畫資料の部

□募集資料　大正十二年九月東京府下ニ於ケル大震火災ノ實況又ハ災害ノ景況ヲ表現シタル寫眞寫生畫類若クハ記述文ニシテ繪畫作成資料タリ得ルモノ

□應募期間　六月末日迄

□應募方法　募集期間内ニ本會宛左ノ事項ヲ具シテ送付セラル、コト

一、資料名及數量

二、場所及說明

三、應募者ノ住所氏名

□應募資料　應募資料ハ應募者ノ希望ニ依ルノ外返戻セズ

□冊子贈呈　本會ニ於テ選考ノ上相當ト認メタル資料ノ應募者ニハ資料ヲ蒐集シタル冊子ヲ贈呈ス

次に應募申込書を記載する。

震災記念物品寄附申込書

物品名	
數量	
被害場所	
說明	
其他	

右東京震災記念堂内陳列ノ爲寄附致度候也

昭和　年　月　日

住所

氏名

財團法人東京震災記念事業協會
御中

次頁にポスターを掲載する。

斯くの如く本會は一般有志の援助を期待すると共に、一面に於ては又繪畫資料購入にも意を注

震災記念繪畫資料寄贈書

資料名	
數量	
場所	
說明	
其他	

右東京震災記念堂陳列繪畫資料トシテ寄贈候也

昭和　年　月　日

住所

氏名

財團法人東京震災記念事業協會
御中

東京震災記念堂

大正十二年大震火災
記念物品繪畫資料　募集

▽記念物品
東京府下に於て大震火災の災害を受けたる物品にして
▽大小に拘らず慘禍の事蹟を回想し得るもの
▽繪畫資料
東京府下に於ける大震火災の實況又は災害の景況を表したる
▽寫眞寫生畫類又は記述文にして記念繪畫作成資料たり得るもの

詳細は町會事務所。區役所。本會へ照會せられたし

麹町區有樂町（東京市役所内）
財團法人　東京震災記念事業協會

募集期間　六月末日限

ぎ、記念堂内に於ける繪畫陳列の方法も亦明治神宮繪畫館の様式に據らむとし、其實行に著手せんとせる折柄、偶々故伯爵後藤新平氏の推薦により、德永柳洲氏筆震災記念繪畫を小島うめ氏より二十五枚購入し、洋畫家田代二見氏よりは震災直後焦土の内を親しく寫生せし油繪五十枚を購入し、著々其完成を急いだ。而して本會が斯かる劃期的事業に奔走せる時、世は既に震災の苦痛から復興への希望輝き昭和四年九月に至りては東京市政調査會主催の復興展覽會開催せらるゝに及び、震災記念品に併せて帝都復興の資料は燦然として同會館に陳列されたのであるが本

會も亦好機逸すべからずと左の如き書面を出品者に發したのである。

拜啓時下愈〻御清適奉賀候
陳者今般財團法人東京市政調査會主催、復興局、東京市後援ノ下ニ開催致候帝都復興展覽會ニ付テハ多大ノ御援助ニ與リ幸ヒ豫期以上ノ效果ヲ收メ近ク閉會ノコトヽ相成候處該展覽會陳列出品物ハ洵ニ帝都ノ震災及復興ヲ永久ニ記念シ得ベキ好箇ノ資料ニシテ他ニ需メ得難キモノト被存候ニ付テハ之等貴重ナル資料ノ保存方法ニ付キテハ目下東京市ニ於テ考究中ニ有之候ヘトモ不取敢財團法人東京震災記念事業協會ニ於テ建造中ニ係ル東京震災記念堂内ニ保存陳列ノ方法ヲ以テ何率御支障ナキ限リ御出品一部ハ閉會ト同時ニ同協會ヘ御寄贈若ハ保管御委託被成下候樣御承諾相願度得貴意候
追而乍御手數右御諾否何分トモ至急東京市政調査會ヘ御回示被成下度
尙御承諾ヲ得候場合ニ於テハ東京震災記念事業協會ノ費用ヲ以テ不取敢東京市本所公會堂ヘ運搬保管致度申添候

昭和四年十一月九日

財團法人　東京市政調査會
財團法人　東京震災記念事業協會
東京市役所

拜具

殿

斯くして本會の蒐集し得た復興展出品物は六百拾點、之に從來の蒐集品六百五點を合して實に壹千貳百拾五點の多きに達したのである。

帝都復興並大正大震火災記念資料募集

本所區横網(被服廠跡)震災記念堂構内に豫て建築中の復興記念館が竣工しました、同館内に陳列の爲左記資料御持合の方は御寄贈若しくは御出品を願ひます。

▽復興記念資料
帝都復興事業を永久に傳へ得べき物品又は繪畫寫眞、書籍其の他の參考資料

▽震災記念資料
大正十二年の大震火災により東京府下に於て被害を受けたる物品又は其慘禍の事跡を回想し得べき諸資料

右記念資料は御申込に依り本市に於て選考の上陳列致します。

申込先本所區横網(被服廠跡)
東京市震災記念堂管理事務所
電話本所(73)一、九〇一番

募集期間六月三十日限

昭和六年四月十七日東京市復興記念館の建設其の功を告ぐるや本會は更に震災記念品、繪畫資料の蒐集に努め上記の如きポスターを市電内に掲載して一般市民に寄贈、出品を依頼したのである。

本會に於ける記念品、繪畫資料の蒐集は其の著手聊か日暮れて途遠しの感無きにしもあらずであつたが、斯く迄に豐富なる材料を得て震災の事蹟を深く回想し又復興への勇猛心が如何に强かつたかと言ふ事を窮知し得ることが出來たのは一般市民諸君の絶大なる御援助に依るものと深く感銘して止まない次第である。

之等蒐集せらたる記念品竝に資料の陳列は、昭和六年五月より著手することゝなり本所公會堂より山積された蒐集品を一先づ復興記念館内に移し、爾來夜を日に繼いで陳列をいそぎつゝあつたが時宛も七月四日畏くも皇后陛下の御巡啓に際し御台覽を辱ふすることゝなつた結果、掛員一同感激し之が完成を急ぎ假陳列を了して台覽に供し奉つたが今日では大體完備されて居る。

因に陳列後に寄贈を受けた記念品の一部と、又類似の資料は陳列されて居らぬが此等は他日適當の時期に交互に陳列換を爲して一般に公開するもので、決して寄贈者の御好意を空しくしないやうに努める筈である。

第四節　陳列品

震火災に因る當時の記念品　其一

□金屬類の被害品□

	出品又は寄贈者
一　破壞せる大鐵管 本品は水道幹線として使用せられしもので、當時淀橋淨水場内に山積されてあつたが、强震の際激動の爲め轉落し、破壞したるものである。	東京科學博物館出品
二　破壞せし工業用酸素管 本品は本所區龜澤町藤井千代吉商店作業場内に於て引火し、爲めに爆破せるを災後同商店より讓り受けたるものである。	小野寺謙三郎寄贈

三　爆破せしアンモニアチューブ　黑田市之助寄贈

本品は製氷用に用ひられ、アンモニア瓦斯が充たされてゐたもので、大震當日日本橋區瀬戸物町所在倉庫に於て引火し、爆破したるものである。

四　橋梁裝飾物の被害品　東京市土木局橋梁課出品

本品は義士に名高き兩國橋に明治三十七年架設以來、取付ありたる親柱の裝飾品をはじめ、竣工標示、橋名板等であつて何れも一日夜火災の爲め燒損したものである。

五　劇場裝飾物の被害品　東京科學博物館出品

支柱頭　柱飾　欄間飾　軒蛇腹能面　掛札　シャンデリアの破片

本品は麹町區有樂町所在の帝國劇場に於ける被害品である。

六　教會堂裝飾物の被害品　早稻田大學寄贈

燭臺　唐草金物　扉ハンドル　鉛塊　裝飾金物　瓦斯口　金屬製水差　其他

右は神田區駿河臺所在ニコライ教會堂燒跡より蒐集せるもので、何れも震火强烈なりし爲め熔着し或は溶塊したるものである。

七　燒損せる大支柱　東京科學博物館出品

本品は當時日本橋區所在の丸善株式會社燒跡のもので、高熱な火力の爲熔折したるものである。

八　鐵扉の燒骸　東京科學博物館出品

悲慘を極めた澁澤倉庫の鐵扉で、曲折し變形せるものにて、一見よく當時の慘狀を物語るものである。

九　シヤツターの被害品　東京科學博物館出品

本品は當時神田區所在の某青年會館燒跡に殘存せしもの。

一〇　扉金具類の被害品　榊原繁太郎寄贈

本品は鐵扉等に取付けられたる鐵車其他にして、罹災後神田方面より蒐集したるものである。

一一　鐵柱の熔塊　大日本麥酒株式會社寄贈

本品は大日本麥酒株式會社吾妻橋工場内にて罹災し、强烈なる大震火の爲め鎔融し一塊となりなるものである。

一二　震火に屈曲せるシヤフト　甲友三郎寄贈

本品は當時本所區長崎町所在の工場内裝置機械を回轉せしむべき主動軸の一部にして、直經一寸長さ十二尺五寸余を有し、工場内中央部に架設してあつたもので、强烈なる震火に燒損曲折したるものである。

一三―一四　印刷機の被害品　三秀社島連太郎寄贈

本品は二臺共に當時神田區美土代町所在の三秀社印刷工場内に於て燒損したものである。

一五―一三　燒損せるルーラー其他の被害品　三秀社島連太郎寄贈

ルーラー　凸版被害品　銅版被害品　活字鑄造用母型等

本品は何れも當時神田區美土代町所在の三秀社印刷工場に於て罹災し、危く原形を逸せんとしたるものである。

一三　燒損せる鐵製ロール　高橋高太郎寄贈

本機は織物仕上用として用ひられしもので、大震當日本所區相生町高橋高太郎氏方にて震火の害を被りたるものである。

二四―二五　窓枠の被害品　東京科學博物館出品

當時陸軍砲兵工廠燒跡より蒐集せるもので、前者は綱入硝子張であつた爲め屋内引火を免れ、後者は並厚硝子で綱無き爲め硝子溶解し屋内引火の災を被り僅かに枠骨のみを殘したるものである。

三六　鐵筋コンクリート柱　東京科學博物館出品

悲慘を極めし麹町區丸ノ内所在、内外ビルディングの玄關脇の柱である。

三七　鑄鐵柱斷片　東京科學博物館出品

本品は横須賀海軍工廠内のものである。

三八　燒損せる市電の電柱　東京科學博物館出品

淺草區田原町附近にて發見せるもので、當時市中街路の慘狀を物語るものである。

三九　ワイヤロープの燒骸　東京科學博物館出品

悲慘筆舌に絶したる澁澤倉庫燒跡より發見されしものである。

三〇―三一　支持金具の熔塊　東京科學博物館出品

本品は麹町區有樂町所在、電氣局構内倉庫に於て燒損したる架空線用支持金具の熔塊物である。

三三　電車モーター　東京科學博物館出品

大震により運轉不能となり軌道上に殘された爲め車體を燒失せる電車に取付在りしモーターで、街路上の火災被害を想像し得るに足る。

三三―三四　電車用コントローラー　東京科學博物館出品

右に同じく軌道上に於て、車體と俱に火災に遭ひ燒損したるものである。

三五―三七　電動機の被害品　東京工業大學寄贈

本邦最初の三相誘導電動機にして他の二臺と俱に、淺草區藏前、東京工業大學構内に於て災害を被りたるもの。

三八　電動機の燒骸　東京科學博物館出品

本品は神田方面より罹災後蒐集せるものにして、何れも小工場とおぼしき燒跡に發見したるものである。

三九　變壓機　東京電燈株式會社寄贈

本品は東京電燈株式會社本所變壓所に据付在りしものなるが、建物の燒失と供に一部溶解燒損したるものである。

四〇　二馬力自動操舟機　保坂松五郎寄贈

ガソリンモーターにして和船、又はボート等に取付けたるもの、一時間六哩乃至八哩の速力を有せし本品も、日本橋區濱町河岸に於て終に引火し舟體燒失と供に燒損したるものである。

四一　自動車の燒骸　株式會社明治屋寄贈

本品は車輛番號第一號の古き歴史を有つ銀座明治屋商店所有の自動車で、罹變當日迄使用せられ、活動中のものなりしも震火に依りボデーを燒失し車體のみ燒殘つたものである。

四三　魚形水雷の被害品　東京自治會館出品

本品は大震當日東京高等商船學校々庭に於て震火の爲燒損したるもの、深川區越中島方面の震火强烈なりし程度をよく物語るものである。

四三―四六　活動寫眞映寫機　松田欣吾寄贈

本品は淺草方面燒跡より罹變直後蒐集せるものにして、一部熔解若くは熔失せるがよく淺草六區に於ける當時の慘狀を想像なさしむに足る。

四七―四八　燒損せる寫眞機　池田銀三郎　增島信吉寄贈

右は本所區及深川區に於て大震火の洗禮を受けしもの。

四九　双眼鏡の被害品　榊原繁太郎寄贈

本品は神田區伸猿樂町方面より發掘せるレンズの破片より推し双眼鏡の被害品なる事を僅かに想像

なし得るものである。

五〇　眞鍮管其他の被害品　榊原繁太郎寄贈

本品は何れも當時神田區西小川町所在の水谷顯微鏡製作所燒跡より發見せるものにして、震火に於ける神田方面の被害程度を知るよき資料である。

五一―六五　顯微鏡　血脇守之助寄贈

本品は何れも當時神田區三崎町東京齒科醫學專門學校にて使用せしものである。

六六―八八　燒損せる懷中時計

玉置金一郎、榊原繁太郎、石橋理助、鈴木周藏、七田健次、山口政五郎、大西由藏、石川榮治郎、池淵繁雄、廣瀨政吉北橋倉之助、大和定平、小濱寅之允　十三氏寄贈

右は何れも京橋、神田、淺草及び江東方面にて發見されしものである。　早稲田大學　山下留吉寄贈

八九―九〇　柱時計

九一―九三　電氣時計の燒骸　東京市電氣局出品

右は市電の電柱に取付ありしもので、震火の爲め齒車、其他の細部及文字板、針等は燒失し外側のみ殘りたるもの。　東京科學博物館出品

九三　磁石式電話加入者受話器

東京中央電話局内に當時取付ありたるを災變後遞信局工務課に於て保存してあつたものである。　東京科學博物館出品

九四　電話用度數計

本品も亦右に同じ。　東京科學博物館出品

九五　電話機用送話器

本品は神奈川縣大磯局事務用のものであつた。　東京科學博物館出品

九六　電話機

本品は小田原郵便局に於て當時震火の害を被りたるもので、よく同地方の被害狀況を想像し得る。　東京科學博物館出品

九七　交換臺

本品も亦右に同じ。　東京科學博物館出品

九八　電信鑽孔器の被害品

本品は當時東京中央電話局内に取付てあつたものである。　遞信省寄贈

九九　被害ケーブルの見本

本品は海底電線の被害狀況を示せるものにして、切損せし部分に依つて當時の震度をよく想像し得。　中村征三寄贈

一〇〇　歐文タイプライター

本品は當時日本橋區本銀町一丁目所在の倉庫内にて、罹災せるもので、原型を危く殘せしも猛烈なる震火の爲同倉庫内に在りし象牙其他が熔解し共に溶着したるものである。　榊原繁太郎寄贈

一〇一　タイプライターの燒骸

本品は芝區佐久間町方面より發掘のものである。　榊原繁太郎寄贈

一〇二―一〇三　金錢登錄器

本品は淺草及神田區の燒跡に發見したるものである。　榊原繁太郎　岡村榮治郎寄贈

一〇四　金庫形貯金箱

本品は當時本所區龜澤町に於て震火の害を被りたるもので、内部に貨幣の燒塊を有す。　渡邊五郎寄贈

一〇五　貯金箱　中島忠平寄贈

一〇六　金庫の破片　榊原繁太郎寄贈

一〇七—一四七　通貨の熔塊、燒損及び燒付られたるもの。

上野鐵郎、小山晉吉、岩井久藏、池田銀三郎、坂本昇、太田屋地所部、高木喜一、辰井吉之助、豐田勝三、宇田川末吉、村松喬雄、越前屋佐兵衞、桂元次郎、坂本源次郎、榊原繁太郎、京豐吉、柴田耕作、志賀高信、竹內正二、平光國雄、三田慶太郎、木場晖峰、石橋理助　二十三氏寄贈

右は、本郷、芝、日本橋其他下町方面燒跡より發見せるものである。

一四八　金庫

本品は震火を被りたるも不思議と外部のみ燒損し、內部は完全を得たるものである。

伊藤辰治寄贈

一四九　金庫

本品は猛烈なる震火災を被り、爲めに燒損したるものである。

山田喜久寄贈

一五〇—一六三　古錢の燒損、熔解及燒付られたるもの。

玉川喜一郎、長谷川久四郎、櫻井萬三郎、池淵繁雄、藤井七兵衞、鈴木周藏、鈴木盛吉、高梨リウ、兼子英一　九氏寄贈

右は、日本橋、京橋、神田及び江東方面より發掘したものである。

一六四—一九六　燒損せる佛像

熊澤豐次郎、窪川旭丈、榊原繁太郎、市川英一郎、山口鐵五郎、堀川寅次郎、伊東市太郎、堀野三四吉　八氏寄贈

右は、日本橋、淺草、神田及び本所等の燒跡より發見したものである。

一九七　燒損せる佛器　熊澤豐次郎寄贈

一九八　燒損せる佛器　服部勇一寄贈

一九九—二一九　神輿の金具　淀川武松寄贈

二二〇—二四五　神輿の金具　鈴木周藏寄贈

二四六　鑄像　血脇守之助寄贈

東京齒科醫學專門學校々庭に在りしものが、大震當時基礎臺より墜落破壞し、後校舍の火災と共に其の一部を溶解せられたるもの。

二四七—二五〇　鑄像

加賀甚四郎、森田銀作、冠與志　三氏寄贈

二五一—二七六　日本刀

岩村貞次郎、池田銀三郎、吉岡ひさ、藤井鐘次郎、藤井七兵衞、榊原繁太郎、鈴木周藏、廣田新五郎、北澤惣吉、松村德太郎、太田屋地所部、江口芳兵衞、森田銀作、太田清十郎　十四氏寄贈

小川千本出品

右は、麴町、神田、下町及び江東方面より發見せるものにして中には有銘の逸品もある。

二七七　短刀　越前屋佐兵衞寄贈

本品は上野(輪王寺)の宮樣御守刀にして、先代佐兵衞に拜領せられしものなるも、一日夜本所區向島須崎町十六番地所在の土藏內に於て震火の爲燒損したるものにして祐定の銘がある。

二七八　短刀　大熊丑之助寄贈

二七九　小柄　池田銀三郎寄贈

本品は銀臺に梅の彫刻ある小柄なりしが震火の爲燒損したものである。

二八〇　小柄　江口芳兵衞寄贈

二八一　柄頭　池田銀三郎寄贈

二八二—三〇三　鍔　榊原繁太郎、池田銀三郎、豐田武雄、廣田新五郎、大熊丑之助、北澤惣吉　六氏寄贈

右は麹町、小石川、神田、日本橋及び江東方面にて見出されたものである。

三〇三—三〇五　鎗　先　村田彦三郎　北澤惠吉　春日亭清吉　三氏寄贈

三〇六　劍　榊原繁太郎寄贈

三〇七　指揮刀　守田整義寄贈

三〇八　元込銃　折笠廣寄贈

本品は英國製元込銃にして、銃臺は全く燒損し銃身のみを殘したるものである。

三〇九　十連發銃　守田整義寄贈

當時燒損せし明治三十七八年式銃の銃身である。

三一〇　製菓器　榊原繁太郎寄贈

三一一—三一三　製菓用鐵鉢　榊原繁太郎寄贈

三一三—三一六　鍋　類　榊原繁太郎　津田岩吉　西村嘉右衞門　平見奈良市　四氏寄贈

三一七—三一四　鐵　瓶　本館藏及藤井鐘次郎　稻見高橋ひで　榊原繁太郎　川田準一郎　服部勇一　熊澤豐次郎　押田信明　八氏寄贈

三三五　藥　罐　三上昇一寄贈

三三六—三三七　水　差　榊原繁太郎　川田準一郎寄贈

三三八　水　入　川田準一郎寄贈

三三九—三三〇　水焜爐　坂本コウ　榊原繁太郎寄贈

三三一—三三三　七　輪　榊原繁太郎　藤井七兵衞寄贈

三三四—三三五　五　德　熊澤豐次郎　藤井七兵衞寄贈

三三六　風　呂　內海榮太郎寄贈

當時本所區原延町に於て燒損したるものである。

三三七—三三八　茶　釜　上田武左衞門　高梨リウ寄贈

當時本所及日本橋區にて震火の洗禮を受け燒損したるものである。

三三九—三四五　茶　托　榊原繁太郎　小宮久藏　川田準一郎　三氏寄贈

三四六—三四八　鎖　上田武左衞門　木場暉峰　榊原繁太郎　三氏寄贈

本品は自在其他に用ひありし鐵鎖にして當時本所、日本橋及本郷にて燒損したるものである。

三四九　花　器　進藤三郎寄贈

本品は日露戰役の際記念として贈られし砲丸を其儘花器として藏せしものである。

三五〇　花　器　池田銀三郎寄贈

本品は日露戰役の折飛來せし敵彈にして記念の爲持歸り花器として愛藏せしものである。

三五一—三五三　花　器　熊澤豐次郎　立原清香　藤本與四郎　三氏寄贈

三五四　花　鋏　池田銀三郎寄贈

三五五—三六一　鋏　小林久太郎　服部勇一　木場暉峰　貝瀨市太郎　四氏寄贈

三六二　鐵葉鋏　津田岩吉寄贈

本品は一部熔解し鐵板に熔着せるものであつて一見よく猛烈なりし當時の火熱を想像し得。

三六三—三六五　槌、鋸　榊原繁太郎寄贈

本品は何れも當時大工職たりし赤坂區田町住某の燒跡に發見蒐集せるものにして木質は悉く燒却され金質部のみ殘りたるものである。

三六六　釘の鎔塊　花島兼吉寄贈

本品は重量二噸にも及ぶ大熔塊にして、當時深川區平久町花島倉庫に保管され在りし鐵釘二萬樽が猛火に熔解され一塊となりたるものゝ一部である。

三六七　釘の鎔塊　大日本麥酒株式會社寄贈

本品は同社吾妻橋工場に於て樽入のまゝ震火を被り大熔塊となりたるも明瞭に樽數を計する事を得。

三六八—三六九　釘の鎔塊　東京科學博物館出品　榊原繁太郎寄贈

三七〇　釘　早稲田大學寄贈

三七一　洋釘の燒塊　帝國倉庫運輸株式會社寄贈

三七二　洋釘　榊原繁太郎寄贈

三七三　洋傘骨の燒塊　中村幸治寄贈

當時深川區陸軍糧秣廠倉庫附近の燒跡より發見し蒐集せるものである。

三七四　洋傘骨の燒塊　榊原繁太郎寄贈

三七五—三七九　丹銅の鎔塊　鈴木金三郎寄贈

本品は銅と亞鉛の合金にして、徽章メタル等に用ひられ製品としての時價は二百圓見當なりしものなるも、大震當時日本橋區横山町に於て震火の害を被り、今日は一圓内外の價値になりたるものである。

三八〇　徽章　島田勇吉寄贈

當時神田區一ッ橋通七番地に於て震火に遭遇し、後燒跡より發見せるものにして、徽章類の一塊となりしものである。

三八一—三八三　銀牌　伊藤勝太郎寄贈

本品は京橋區銀座伊東屋文具店金庫内に藏され在りしものにして、大震當時猛烈なる震火災を被りたるも、不思議と原型を保ちたるものである。

三八三—三八五　銀盃　鈴木周藏　三田松三郎　上田武右衞門　三氏寄贈

三八六　鐘　熊澤豐次郎寄贈

當時日本橋區横山町二丁目十五番地に於て震火の害を被り爲めに燒損したるもの。

三八七　振鈴　佐藤幸六寄贈

本品は大震當夜本所區緣町四丁目四十九番地に於て、震火災を被り一部燒損したるものである。

三八八　振鈴　三田松三郎寄贈

本品は災變數年前紀三井寺にて買求めしものにして、一日夜神田區大和町に於て震火の害を被つたものである。

三八九　鈴　坂本源次郎寄贈

三九〇—三九一　靴　豐田勝三寄贈

神田區錦町土藏燒跡より發見せるものにして、大いなる土塊の下に在りたる爲め原型を保ちしものである。

三九二—三九三　蓮華と蓮華の破片　榊原繁太郎寄贈

本品は何れも神田區西小川町方面の金物店らしき燒跡に發見蒐集せるものにして一部變色し或ひは燒損したるものである。

三九四　秤　榊原繁太郎寄贈

三九五　秤の分銅　小林久太郎寄贈

三九六　銅器の破片　折笠廣寄贈

三九七　金盥　西村嘉右衛門寄贈

三九八　洗面器　榊原繁太郎寄贈

三九九　バケツの熔塊　東京電力株式會社埋設課寄贈

本品は震火の高熱のため七十數個のバケツが溶解して一塊となりたるものにして、災變後本所區龜澤町一丁目四十八番地先に於ける地中埋設工事中發見されたるものである。

四〇〇　肉截斷機　小林久太郎寄贈

當時神田區東松下町に於て燒損したるものである。

四〇一　コロップ締　折笠廣寄贈

四〇二　蓄音機　西村嘉右衛門寄贈

當時日本橋區通油町にて發見されしもの、木部は悉く燒損され金質部のみ殘りしものである。

四〇三　扇風機　西村嘉右衛門寄贈

四〇四　ストーブの破片金具　榊原繁太郎寄贈

四〇五　ストーブの焚口　早稻田大學寄贈

本品は神田區駿河臺ニコライ會堂内に取付け在りしものにして、雲母部分龜裂を生じたるものである。

四〇六　瓦斯器具の混塊　榊原繁太郎寄贈

四〇七—四〇八　アイロン　永田千里　土谷庄藏寄贈

本品は震火により燒損したるものである。

四〇九　ホチキス　西村嘉右衛門寄贈

四一〇　矢立　藤本與四郎寄贈

本品は京橋區南鞘町にて發見されしもの。

四一一—四一三　燭臺　榊原繁太郎　岸村貞次郎寄贈　熊澤豐次郎寄贈

四一三　香爐

本品は當時價格五百圓と云はれし支那製鐵の香爐であつた。

四一四　香爐　榊原繁太郎寄贈

本品は月曉の作にて當時箪笥の小引出内に藏されしが、火勢猛烈なりし爲め半ば溶解したものである。

四一五　香爐　村田彦三郎寄贈

四一六　古鏡　藤井七兵衛寄贈

本品は深川區にて當夜燒損したるものである。

四一七　鏡　村田彦三郎寄贈

本品は德川末期の作にして當時本所區にて震火の爲燒損變色したるものである。

四一八　具足小手の燒骸　榊原繁太郎寄贈

四一九　兜　島連太郎寄贈

本品は鎌倉時代の作にして時價六千圓と評されしものなるが、神田區美土代町に於て燒骸となりたるものである。

四二〇　金具　小林久太郎寄贈

四二一　鍵　木場暉峰寄贈

當時本郷區にて猛烈なる震火に罹災せるも不思義と原型を存せしもの。

四三三　鍵　豐田勝三寄贈

當時本郷區にて震火の害を被りたるも水瓶中に轉落せし爲め、原型を其儘保ちたるもの。

四三三—四三四　引手　榊原繁太郎寄贈

本品は當時下谷區龍泉寺町に於て發見せるもの。

四三五　煙管の燒骸　鈴木周藏寄贈

四三六—四三七　消火器　島連太郎寄贈

本品は神田區美土代町にて震火の損傷を被り、何れも曲折爆破等の害をうけしものである。

四三八　天水桶　東京科學博物館出品

本品は湯島聖堂に備へ付ありたるもの。

四三九　ピアノの鐵骨　市川英一郎寄贈

本品は神田區同明町二番地に於て震火に罹り燒失したる家屋の灰燼中に殘存せるものにして附屬鋼鐵線等は焦土と共に放棄された。

四三〇　鐵管繼手の熔塊　橋本パイプ商店寄贈

本品は日本橋區小傳馬町に於いて强烈なる火熱の爲め鎔解し一塊となつたが、僅かに鐵管繼手なりしを推知し得。

四三一　パイプの熔塊　大日本自轉車株式會社寄贈

本品は自轉車用パイプで、本所區仲ノ郷業平町工場に於て、震火の害を受け鎔着し一塊となりたるものである。

四三二—四三三　戸車　服部勇一　平原淺吉寄贈

四三四　鐵製品小物　中島源太郎寄贈

四三五　鐵塊　佐藤鍵太郎寄贈

當時本所區長岡町にて强烈なる震火を被り、爲に鎔解變色したるもの。

四三六　鐵の熔塊　榊原繁太郎寄贈

四三七　洋銀及錫の熔塊　三田松三郎寄贈

本品は三ツ組大盃及純銀製定紋入湯呑等なりしが神田區大和町に於て震火の厄に遭ひ爲に鎔解し一塊となりたるものである。

四三八—四三九　金属の熔塊　榊原繁太郎・折笠弘寄贈

四四〇　金属の熔塊　鈴木銀作寄贈

本品は淺草區榮久町二十八番地に於て大震當時震火に罹りたる製罐工場燒跡より發見したるものにして、製罐用上下蓋金約八萬、當時價格にして五百圓也が一塊なりたるものである。

四四一　鐵粉と鉛　押田信明寄贈

當時本所區横網町東洋合資會社倉庫内に於て震火の害を被りたるものである。

震火災に因る當時の記念品　其二

□石材石器類の被害品□

		出品又は寄贈者
四四二—四四四	鳥居の柱	東京地方專賣局寄贈

淺草區は駒形に名高い櫻守稻荷の境内にありし石鳥居にして、激震の際折損したるもの。

四四五　日本橋の高欄　東京市土木局道路課　出品

震火は遂に橋上に山積せる避難者の荷物に延燒し、爲めに焦害を被りたる日本橋高欄の一部。

四四六—四四九　藏　石　東京地方專賣局寄贈

當時淺草區駒形に於いて震火を被り破損したるものにして、如何に高溫なりしかを想像し得。

四五〇　裝飾石　安部叔吾寄贈

當時內務省社會局にありしもの。

四五一—四五三　圓　柱　東京自治會館寄贈

本品は日本銀行構內裏に於て燒損したるものである。

四五三　ローラー　東京自治會館寄贈

本品は花崗石製にして當時日本橋區役所構內に於て高熱に依り破壞したるものである。

四五四—四五六　石燈籠の破片　江口芳兵衞寄贈

形は春日形、神田區岩本町にて倒壞破損せしものにして、激動の程度を想像し得。

四五七　石燈籠笠　堀江與平寄贈

四五八—四五九　石燈籠の破片　榊原繁太郎寄贈

赤坂區田町附近より發見せるものにして、輕石の如くなりたるもの。

四六〇—四六一　沓摺石の破片　押田信明寄贈

四六二—四六七　坑火石　東京科學博物館出品

淺草區田原町蛸松月の建築に用ひられ在りしものにして防火上特效ありたるものである。

四六八—四六九　大理石の破片　東京科學博物館出品

帝國劇場燒跡より發見したもの。

四七〇　大理石の破片　東京科學博物館出品

横濱正金銀行正面壁に用ひありたるもの。

四七一—四七三　タイル張門柱　東京自治會館寄贈

本品は本郷區湯島にて發見したるもの。

四七三　タイル　東京科學博物館出品

横須賀海軍工廠燒跡より發見したるもの。

四七四　石　榊原繁太郎寄贈

四七五—四七九　地球儀の破片　東京科學博物館出品

東京帝國大學に保存され在り日本最古の稱あるものなりしが遂に震火を被り破壞せしもの。

四八〇　火鉢　島連太郎寄贈

神田區美土代町二丁目に於て燒損せし古渡朝鮮金石の手あぶりである。

四八一　硯　川田準一郎寄贈

四八三　香爐　田中ナカ寄贈

支那產玉の香爐にして當時日本橋區横山町にて燒損したるものである。

四八三—四八七　盃　川田準一郎寄贈

當時神田區西小川町二丁目に於て燒損したる支那產玉の組盃である。

四八八—四八九　軟玉印材　豐田武雄寄贈

神田區五軒町に於て大震當日、火熱高かりし爲め、變色したるもの。

四九〇　軟玉印材　榊原繁太郎寄贈

四九一　蠟石印材の熔塊　常岡智光寄贈

日本橋區内某印材問屋燒跡に發見せるもの。

四九二　蠟石印材　森田貞次寄贈

四九三　寶石　山口德太郎寄贈

ピーシイ石類の燒殘りたるものにして、當時本所區緣町燒跡に發見す。

四九四　獅々頭　榊原繁太郎寄贈

四九五—四九七　高麗狗　榊原繁太郎寄贈

本品は淺草區田原町方面の燒跡より發見せるもの。

四九八—四九九　佛像　熊澤豐次郎寄贈

本品は何れも日本橋區横山町に於て燒損したるものである。

震火災に因る當時の記念品　其三

□陶磁器類の被害品□

出品又は寄贈者　折笠廣寄贈

五〇〇—五〇一　甕

本所區柳島元町に於て震火災に罹り、暗黑色に變色し且龜裂を生じたるものである。

五〇二—五〇九　花瓶　押田信明　榊原繁太郎　島田勇吉　土谷庄藏　佐藤鍵太郎　磯田慶三　田中ナカ　大和定平　八氏寄贈

唐寧にして紫、黄、鷄血の三彩なりしが、一日夜本所區向島小梅町二百五十四番地に於て震火の害を被り變色したるもの、其他。

五一〇—五一一　一輪挿　太田屋地所部　川田準一郎寄贈

五一二　花立　安藤宗太郎寄贈

五一三　香合　上田武左衛門寄贈

五一四—五一五　置物　榊原繁太郎　中山孝一寄贈

五一六　燒損したる達磨の置物　池田久楠寄贈

五一七　燒損したる壽老人の置物　池田久楠寄贈

五一八　博多人形の被害品　熊澤豐次郎寄贈

五一九　燒損したる博多人形　春日亭清吉寄贈

五二〇　瀨戸人形の被害品　森清吉寄贈

五二一　燒損せる人形　川田準一郎寄贈

四二二　燒損せる人形　山口正三郎寄贈

五二三　青磁觀音像　越前屋佐兵衛寄贈

上野池之端に在りし守田寶丹店の守護神として祭られしものなるも大震當夜震火に罹り燒損したるものである。

五二四　燒損せる香爐　伊東市太郎寄贈

五二五　猫の香爐　大和定平寄贈

京燒初代仁清の作なりしが大震當夜本所區向島小梅町にて震火災に罹り、爲めに變色破壞したるもの。

五二六　燒損せる清水燒香立　藤本與四郎寄贈

五二七—五二〇　土瓶　島勇吉寄贈

池田永治作二個、野生香雪作一個、田南岳璋作一個、何れも愛藏せるものにして、大震當夜神田區一橋通町に於て震火の害を被り燒損したるもの。

五三一—五三三　燒損せし土瓶　森　清吾寄贈
五三三—五三五　燒損せる鉢類　榊原繁太郎寄贈
五三六　震火に變色せし菓子器　折笠廣寄贈
五三七　燒損せる菓子器　高井廣三郎寄贈
五三八—五四〇　燒殘つた薩摩燒の德利　折笠廣寄贈
五四一—五四三　燒損又は破壞せる德利　榊原繁太郎寄贈
五四四　燒損せる德利　高井廣三郎寄贈
五四五　燗德利　塚田すて寄贈
五四六　燒殘つた挽茶々碗　太田清十郎寄贈
五四七　砧青磁茶碗　堀川寅次郎寄贈
五四八　茶碗　榊原繁太郎寄贈

麴町區上六番町附近燒跡より發見したもので、震火高熱なりし爲一部溶解したるものである。

五四九　燒損せし古鳥の茶碗　上田武右衞門寄贈
五五〇　燒殘りたる挽茶々碗　村山銀次郎寄贈
五五一—五五三　燒損せる茶碗　山口富次　高井廣太郎寄贈
五五三　茶碗　森　清吾寄贈

本品は芝區南佐久間町一丁目に於て震火を被りたるものにして、火勢强烈なりし爲め一部溶解變色したるものである。

五五四　不思議と原形を保ち得たる茶碗の蓋　榊原繁太郎寄贈
五五五　燒殘りたる湯呑　野本新太郎寄贈
五五六　火熱に變色したる湯呑　榊原繁太郎寄贈
五五七　湯　呑　土野慶太郎寄贈
五五八　燒損したる茶器　榊原繁太郎寄贈
五五九　茶　銚　堀川寅次郎寄贈
五六〇　洋　皿　坪谷善四郎寄贈

本品は下谷に於ての燒失家屋の燒跡より發見せるものにして不思議と原型を保ちたるものである。

五六一—五七四　燒損したる洋皿　淺見仙藏寄贈
五七五—五七六　火熱に變色したる皿　高井廣三郎　村山銀次郎寄贈
五七七　燒損せる皿　田中仙太郎寄贈
五七八　燒殘つた乾山の皿　榊原繁太郎寄贈
五七九　土燒盃の燒骸　北島力藏寄贈
五八〇　盃　島田勇吉寄贈

小川芋錢作にして、大震當夜神田區一ツ橋通町に於て猛烈なる震火の洗禮を受け、爲めに燒損し一部溶解して盃臺と溶着せしもの。

五八一　瀨戸盃　山口正三郎寄贈

本所區東兩國一丁目に於て、震火を被れる酒盃二百個中本品のみ原型を保ちたるものである。

五八二　燒損したる樂燒盃　村上彌三郎寄贈

五八三　燒損したる萬古燒盃　折笠廣寄贈
五八四　燒殘りたる瀨戸類　西村嘉右衛門寄贈
五八五　乾也燒の燒殘り　鈴木周藏寄贈
五八六　灰皿の燒損せるもの　榊原繁太郎寄贈
五八七　屋根瓦　曾根將一郎寄贈
本品は芝離宮にて拾得したるものにて、激震の程度を想像なし得。
五八八—五八九　瓦　東京科學博物館出品
震災直後小田原城址より發見したるものである。
五九〇　燒殘つた鬼瓦　武下慶三寄贈
五九一　燒損せる鬼瓦　榊原繁太郎寄贈
五九二—五九九　煉瓦　東京科學博物館出品
本品は横須賀海軍工廠燒跡より蒐集せるものにして、日本最古の稱ありしものである。

震火災に因る當時の記念品　其四

□硝子類の被害品□

六〇〇—六〇三　標本の融合物　出品又は寄贈者　村山幸多寄贈
本品は淺草區小島町樂山堂病院細菌研究室に於て、大震當夜震火の害を被り火熱高溫なりし爲め一部溶解し融合したるものである。

六〇四　震火に溶解したるクリーム瓶　榊原繁太郎寄贈
六〇五　震火に溶解したる種玉子　榊原繁太郎寄贈
六〇六　燒損せる義眼　坂本喜一寄贈
六〇七　燒殘つた老眼鏡　增島信吉寄贈
七〇八—六〇九　火熱に溶解せるレンズ類　榊原繁太郎寄贈
六一〇—六一一　ビール瓶の熔塊　東京科學博物館出品
京橋區澁澤倉庫にて蒐集せるものにして、當時震火の如何に猛烈なりしかを想像し得。
六一二　屋根ガラス　東京科學博物館出品
横濱正金銀行燒跡より蒐集せるものにして、震火高熱なりし爲め、溶解し一塊となりたるもの。
六一三　燒殘りたる網入窓硝子　東京科學博物館出品
六一四　火熱に破壞せる網入窓硝子　東京科學博物館出品
六一五　熔塊となりたる網入硝子　楡井藤太寄贈
六一六　ガラス板の熔解せしもの　東京科學博物館出品
六一七　板硝子　德島久人寄贈
淺草區南元町に於て、大震當時箱詰の儘震火の洗禮を受け溶解したるもの。因に硝子は二千度の火熱にて溶解するものである。
六一八—六一〇　硝子類の熔塊　榊原繁太郎寄贈
六一一　釦の熔塊　後藤武夫寄贈

震火災に因る當時の記念品　其五

□木材木工類の被害品□

		出品又は寄贈者
六四三—六四四	座折せる梁と柱	東京科學博物館出品
六四五—六四六	燒殘りたる門柱	志田茲道寄贈
六四七	燒殘りたる玉垣	林精一寄贈
六四八	首尾の松の燒骸	東京地方專賣局寄贈
六四九	燒殘りたる庭園樹の幹	東京自治會館寄贈
六五〇	鯰木	押田信明寄贈
六五一	燒損せる船の一部	東京自治會館寄贈

神奈川縣鎌倉師範學校に於て大震直後蒐集せるもの。

深川區龜住町法乘院冠木門にして、大震當夜震火災に罹り地上なる部分は燒失し地下に埋設せる部分のみ殘りたるもの。

深川區西森下町に於て震火の爲め燒損したるものなるも、之にて火を食止め天祖神社は事無かりしと云ふ。

江戸時代より歌謠にて人口に普及したる淺草藏前(現專賣局淺草工場構内)首尾の松にして猛烈なる震火の爲め殆ど樹幹のみを燒殘す。

當時神田區猿樂町にて震火の爲め燒損せし庭園樹の一部なるも一見鯰の如き形態せるもの。

陸上に於ける猛烈なる震火と烈風の爲め遂に東京灣沿岸に於て引火し船體を燒失せる其の一部である。

六五三	客車天井の破片	花房政秀寄贈
六五三	燒殘りたる車軸	榊原繁太郎寄贈
六五四	半ば燒失せる醫院用額	折笠廣寄贈
六五五	鐵の如くなりし樫製蛸	堀内藤次郎寄贈
六五六—六五七	桝	本郷柱寄贈

大礫附近に於て大震の爲め轉覆せる列車の二等旅客車天井の破片である。

日本橋區本銀町一丁目に於て、震火災に罹りし家屋の燒跡整理中發見せるものにして、不思議と原形を保ちたるものである。

六五八—六五九	燒殘りたるマンドリンとヴァヰオリン	小川伴次寄贈
六六〇—六六四	金庫内にて燒殘りたる根付類	槇正元寄贈
六六五—六六六	燒損せし記章類の箱	槇正元寄贈

震火災に因る當時の記念品　其六

□紙類其他の被害品□

		出品又は寄贈者
六六七	大半燒失せる拾圓紙幣	宇田川米吉寄贈
六六八	小切手の燒殘	野島潮寄贈

六六九—六七〇　經文の燒殘　安倍叔吾寄贈
東京帝國大學圖書館内に藏されし數萬册の書籍中奇蹟的にも燒殘せしもの。

六七一　燒殘つた和書　東京科學博物館出品

六七二　燒殘つた國語辭典　福田彌作寄贈

六七三　洋書の熔塊　東京科學博物館出品
丸善株式會社燒跡より蒐集せるものにして、同所震火猛烈なりし爲めコンクリートと混溶し一個の黑塊となりたるもの。

六七四　燒存せる洋書　榊原繁太郎寄贈

六七五—六七六　燒損せし水晶認印　村田彦三郎寄贈

六七七　燒損せる水晶製腰提　川田準一郎寄贈

六七八　燒損せる水晶製玉　山口德太郎寄贈

六七九　燒殘りたる水晶材　豐田武雄寄贈

六八〇　燒殘りたる珊瑚玉　山口德太郎寄贈

六八一　燒殘りたる簪入玉　川田準一郎寄贈

六八二　燒殘りたる櫛笄の類　山口はま寄贈

六八三　燒損せる中差　村田彦三郎寄贈

六八四　蛙　中村傳四郎寄贈
右は大震當日本所區横網町安田本邸庭園内の池の石垣に於て煙の爲めに死し、後變質して一見木乃伊の如くなりたるもの。

六八五　繩の燒塊　井本助藏寄贈
淺草區田町の燒跡より出でしもの、一見灰塊の如く見ゆるも高熱に變質せし爲、化石の樣に固きものである。

六八六　砂糖の燒塊　東京科學博物館寄贈
澁澤倉庫内に於て震火の害を被り一塊となりたるものである。

六八七　砂糖の燒塊　帝國倉庫運輸株式會社出品
深川區龜住町所在倉庫に於て猛火の害を被りたるものである。

六八八—六八九　燒殘りたる鰹節　榊原繁太郎寄贈

六九〇—六九一　扁額の燒損したるもの　冠與志寄贈
神田區五軒町に於て震火の害を被りし土藏の燒跡に發見したもので桂光春の作である。

六九二　燒殘りたる金唐皮の手文庫　山口はま寄贈

六九三　象牙彫の燒塊　中村澄三寄贈
價格總額二千圓其數大略三十個の緻密なる彫刻人物の置物なりしが、日本橋區本銀町土藏内にて震火の害を被り一燒塊となりたるものである。

六九四—六九六　被害せる象牙彫類　宇田川捨次郎寄贈
横濱市本町サムライ商會依頼にて製作中なりしが、京橋細工場に於て震火災に罹り燒損したるものである。

六九七　燒損したる念珠　坂本源次郎寄贈

旋風に因る當時の記念品

六九八　椎の木　長谷川平治寄贈
本所區横網町二丁目に於て大旋風の爲め捻切られたるもので、サヽラの如くなつた椎の木に一面の燒痕を止めてゐる。

六九九　旋風に捲上げられたるトタン板　東京科學博物館出品
震火に灼熱し猛烈なる旋風に捲上げられて本所區横網町安田邸内の樹木に捲付けられたるトタン板にして、風力の如何に强かりしを想像し得。

七〇〇　自轉車の燒骸　東京科學博物館出品
震火に全く燒骸となり旋風によりて飛來し本所區横網町安田邸内の樹木にかゝりゐたるもの。

七〇一　燒殘り紙片　野島潮寄贈
九月一日午後一時頃市外南葛飾郡瑞江村大字下今井に飛來したるもの。

七〇二　燒殘り紙片　齋藤文一郎寄贈
一日午後四時頃東京を去る十六里、千葉縣山武郡大網町に飛來したるものにして、如何に風力の强かりしかを想像し得。

七〇三　軸　野本清太郎寄贈
深川區東大工町へ猛火中飛來したるもの。

七〇四　軸　田村愛助寄贈
深川區島崎町先へ飛來したるもの。

避難當時の記念品

七〇五　命を繼ぎし頭布　佐野四郎寄贈
被服廠跡へ避難したるも震火遂に襲ふ處となりし折、水溜中に身を沈め火災を免れたる時の記念品である。

七〇六　帶地　土野慶太郎寄贈
被服廠跡内水溜にて命を取止めしも水に濡れ寒さに震へる折、或る親子が娘の死體よりせめてもの供養と解き與へられ命を繼ぎ得たるものである。

七〇七　襯　古川房吉寄贈
大震當夜被服廠跡内にて罹災し、水溜に助命せる折着用せしもので、一面蟲喰の如き燒穴を有し當夜の惨狀を想像し得。

七〇八　燒穴を有するズボン　小貫安太郎寄贈

七〇九　燒穴を有せる伴天　佐野四郎寄贈

七一〇　燒穴を有せる衣類　武井多一寄贈

七一一　燒穴を有せる衣類　薄井藤藏寄贈

七一二　浴衣　大崎みよ寄贈
本品は大震當夜被服廠跡内にて罹災したる折着用せしものにして、薄黑き汚點あるは罹災者燒死者等の血痕である。

七一三　血痕の附着せる洋服　小貫安太郎寄贈

七一四　血痕の附着せる二子縞袷　永澤完司寄贈

七一五　名刺　相生太夫寄贈
隅田川、向島竹屋の渡附近水中に四五時間猛火を避難中、腹卷に入れし名刺入の模樣が其の儘染りたる

もの。

七一六　避難當時燒損したる鞄　赤澤當三郎寄贈

七一七　避難當時燒損したる信玄袋　相生太夫寄贈

七一八—七一九　旗　德永三郎寄贈

山本と印されあるは日本橋區蠣殼町にて、一家離散せる家族の一人が市中搜索の際使用したるものである。

七二〇　尋札　成毛精一出品

當時迷子を拾ひ本人の兩親を探知せるもの。

七二一　尋札　東京科學博物館出品

七二二—七二八　尋ね人調査材料　東京市政調査會寄贈

本品は何れも當時尋ね人調査事務に用ひられたるものにして、之等の事業により邂逅したる者多かりしものである。

尋ね人係標識提灯。尋ね人カードとカード函。

尋ね人報知記載の新聞。尋ね人問合せの書狀。

七二九—七四五　板札　島連太郎寄贈

當時神田美土代町印刷工場燒失し立退ける際、各方面の原稿安全なりしを燒跡に報知したるもの。

七四六　案内所標識提灯　村山銀次郎寄贈

當時燈火のなき燒跡に於て町名を標識し尋ね人其他に便ならしめたものである。

七四七—七五三　急造燈火具　陸軍省寄贈

暗黑は人々をして一層恐怖せしめ淋しからしめた、此の品は鐵葉屑や空罐空瓶の類を利用して作られたるものである。

七五三—七五四　惠まれたる帽子と杖　池谷右馬吉寄贈

七五五　腕章　津田岩吉寄贈

當時本所區役所より發行せられしものにして、印の如きも燒印に肉をつけて捺印せられ配布されたる救護班の腕章である。

七五六　活動を語る當時の大林組腕章　高橋幸次郎寄贈

七五七　罹災兒童を探せる際の腕章　下谷區市立小學校々長會寄贈

七五八　燒損せる儘佩用したる方面委員メダル　上田武左衛門寄贈

七五九　炊出に用ひられたる釜　下谷區役所出品

七六〇　釜　村松喬雄寄贈

七六一—七六五　炊出用具類　宮内省下附

本品は何れも宮内省救護班にて炊出の際使用せられしものである。

炊出用竈。炊出釜。炊出用大杓子。飯臺。飯桶。標識幕。

七六六　御下賜金包と傳達書　薄井藤藏寄贈

罹災者賑恤の思召を以て御内帑金一千萬圓の御下賜があつた、之も一罹災者が感激の涙にむせびつゝ拜受したものである。

七六七—七六九　御下賜金包　高井廣三郎　石川松次郎寄贈

七七〇　炊出用釜　財團法人協調會寄贈

七七一—七七四　慰問文　磯田慶三寄贈

之等のものは皆慰問袋より出たるものにして、各府縣下の小學兒童若くは女學校初年級生徒のいたいけな筆になつたもので、當時之を讀みたる罹災者は再起の元氣と復興への勇猛心とを起し得たものである。

七八五—七八六　手拭にて作られたる當時の慰問袋類　　相生太夫寄贈

七八七　慰問品袋　　磯田慶三寄贈

七八八　茨城縣より贈られたる笊　　本館藏

七八九　地方より贈られたる箸　　下谷區役所出品

七九〇　地方より寄せられし罐詰　　井下清寄贈

當時救護の爲め送られたる食料品類にして現存せるは極めて少なく、本品は東北地方より寄せられし魚肉の罐詰である。

七九一—八〇一　米國寄贈の急救具　　東京市保健局衞生課出品

傷病者用三輪車。ケッテル。便器。タンカ。丁字杖。木製折疊椅子。扎。毛布。

八〇二—八〇九　佛國寄贈の醫療器具　　東京市保健局衞生課出品

床頭臺。平足固定運搬具。鐵製椅子。壺及吸口。醫療器具。便器。標識國旗。

八一〇—八一一　オーストラリヤ寄贈の急救具　　東京市保健局衞生課出品

厨具。ジョッキ。

八一二　思ひ出の作業服　　東京市保健局衞生課出品

燒野原に於けるバラック建設の活動を物語る此服は當時救援品として米國より贈られしものである。

八一三—八一四　大工道具入鞄とカンテラ　　東京市保健局衞生課出品

當時佛國より寄贈されたるものにして、バラック建設等に使用せられしもの。

八一五　標識幕　　宮內省

宮內省巡廻救療班自動車に用ひられしもの。

八一六—八一八　處方箋類　　折笠廣寄贈

紙拂底の當時にて本品も處々より集めたる紙片に記したるものにして、警視廳柳島町第五十七班診療所に使用されしものである。

八一九—八二〇　小皿　　折笠廣寄贈

一度火災を被りたる品なるも、當時食器不充分なる爲め警視廳柳島町五十七班診療所に於て使用せるもの。

八二一　朱塗丸盆　　折笠廣寄贈

當時一度火災を被りたる品なるも警視廳柳島五十七班診療所に於て器具拂底の爲め使用せるもの。

八二二　佛壇　　金子朝一郎寄贈

避難當時上野公園內にて購入しバラック內に祭祀せしものである。

八二三　手提袋　　東京科學博物館出品

紐育赤十字社が日本災害義捐金募集に用ひし紙製手提袋にして各名流婦人達の手に依りたるものである。

八二四—八二六　荷札　　磯田慶三出品

災害當時各府縣下から當局に宛て送られたる救援品荷物に貼付せられしもの。

悲しき形見　横死者遺留品

八三七　迷子札　　新井榮吉寄贈

被服廠跡にて大震當夜燒死せる子供の死體より發見したるものにして、當時の慘狀を想像し得。

八三八　子供用祭の金棒　　松浦幸藏寄贈

一家族八名枕を並べて燒死した中の子供の死體の手にしつかと握られてゐたもので、當夜の被服廠跡の如何に凄慘なりしかを想像し得。

八三九—八四〇　切出　　金子朝一郎寄贈

被服廠跡内にて燒死せし吾子の形見にして、災禍翌日數多き死體の中より日頃所持せるこの切出に依りて吾子なるを知り持歸りたるもの。

八四一　學用品　　土野慶太郎寄贈

本品は何れも被服廠跡内にて燒死したる子供の死體より發見せるものにして、形見の爲持歸りたる文房具類である。

八四二　ハーモニカ　　土野慶太郎寄贈

被服廠内にて燒死せる子供の遺留品である。

八四三　劍　　本所兩國警察署出品

當時署長たりし警視山内秀一氏佩用のものにして、當夜震災の被服廠跡内に在り署員を指揮し、避難者の救護警戒に從事中突怒起りたる一大旋風に拿き犧牲となりて殉職せられ、災後遺骸を捜索せるも其の片影だに認め得ず、佩劍のみ殘りゐたるもの之である。

八四四　劍　　本所兩國警察署出品

當時巡査部長たる荒井又吉氏佩用のものにして、安田邸跡土工施行の際死體と共に發見せり、黑色の塊あるは氏の肉片の附着したるものである。

八四五　警察手帖　　本所兩國警察署出品

當時何人か不明なりしも、死體の携帶せる手帖により巡査部長河本愛三氏の殉職遺骸なる事判明したるものである。

八四六　警笛　　本所兩國警察署出品

當時巡査部長萩原中氏の携帶せるものにして、九月四日被服廠跡に於て死體と共に發見せるもの。

八四七—八四八　形見の書類　　長島松司寄贈

本品は何れも當時被服廠内にて燒死せる家族の所持品にして、兩國警察署より讓受けたるものである。

八四九　指揮刀　　高木喜一寄贈

災後被服廠跡に於て死體の傍より發見したるもの。

八五〇—八五一　海軍手帖　　小久保濱次寄贈

九月五日被服廠跡にて死體より發見したるもの。

八五二　在鄉軍人會徽章　　增島信吉寄贈

被服廠跡に於て燒死したる增島爲次郎氏の死體より發見したるものである。

八五三—八五四　形見の手帖と徽章　　尾崎吉藏寄贈

八五五—八六〇　被服廠跡に於ける燒死者の遺留品　　本館藏

手提金庫。金屬製位牌。迷子札。通信薄と修業證書。有價證券の燒殘。紙幣の燒殘。貨幣の燒殘。指輪類。時計と鎖。置時計。寫眞器。眼鏡。双眼鏡。仁丹容器。入齒。財布と蟇口。名刺類。勳章類。

之等のものは一つとして泪無しには見られないもので、當夜の慘狀を回想するに好適の記念品である。

八六一—九〇一　安田邸跡に於ける燒死者の遺留品　　本館藏

金鵄勳章。免許證。通貨及指輪類。墓口。省線バス。印籠。眼鏡。時計と鎖。印鑑類。卷尺。コンパス。萬年筆。學用品と鞄。

何れも燒死者の傍若くは懐中より發見せられたるものにして、當時の如何に悲慘なりしかを想像し得。

九〇二　經文及附帶書類　　宮本直一寄贈

横死者供養の爲一字一人宛異なれる方々の筆を求めて寫經なしたる經卷である。

復興途上の記念品

九〇三　大國旗　　明治第二小學校出品

强烈なる震火に燒失せし同校に於て、災害直後天長節を祝す可き國旗をと贈られたる慰問品中より取集めて作製したるもの。

九〇四　小學生徒募集の看板　　東京科學博物館出品

燒野と化したる帝都の各所に掲げられ、罹災兒童をして就學に便ならしめたるもの。

九〇五　手工作品　　横川小學校出品

同校に於て罹災後兒童の製作になりたる電信器等の教材用工作品である。

九〇六—九〇九　手工作品　　明德小學校出品

災害直後バラック教場内にて就學兒童の手になりしものにして、バラック、支那料理店等の手工である。

九一〇　花筒と臺　　竹芝小學校出品

教員と兒童との合作品にして一物を殘さず燒失せる同校々庭に發見せし木の根竹の燒殘等を材料としたるもの。

九一一—九一三　筆立　　竹芝小學校出品

罹災後バラック教場に於ける兒童手藝品にして、空罐を利用したるものである。

九一三　手工作品　　錦華小學校出品

當時燒殘りたるリノリユームの一片に骨を拾ひ居る圖を彫刻せるものにして、如何に幼なき者の頭に悲慘なる印象を殘せしかを想像し得。

九一四—九一八　手藝作品　　千束小學校出品

當時バラック教場に於て女子就學兒童の手になりしものにして、何れも燒跡に殘りたる燒殘り布片や米等の慰問袋にて作られたる鞄、手提袋等である。

九一九　手提袋　　富士小學校出品

バラック教場の頃兒童の手になりしもの。

九二〇—九二一　復興途上使用せられし記念品　　復興事務局出品

木材刷込用型紙。復興材料用刷毛印。卷尺。ハンマー。アスフアルト溫度計。燒印。アセチリンランプ。トラクターパネル。トラックパネル。標識提灯。

九二二　板碑　　復興事務局出品

隅田公園新設工事中、地下二十尺の處にて發見したるもの。

九二三　貝型土塊　　小日向彦次郎寄贈

小石川區音羽町九丁目二番地に建築工事中、地下二十數尺の處より發見せるものにして、烏貝の如き貝型なる半化石である。

震災當時刊行せられたる書籍其他印刷物の類　其一

□證明書類□

		出品又は寄贈者
九三四—九四一	罹災證明書	伊東欣一　武井丑松　淺間初太郎　橋本健太郎　池谷右馬吉　長江德次　高井廣三郎　千葉一八氏寄贈
	當時罹災者なりし事を證明し無賃乘車等の場合に示したるものである。	
九四二—九四三	入京證	佐野文治　加藤慶助寄贈
	當時救援等の爲罹災地方へ行かるゝ者に下附し、震災地方通過の便ならしめたるもの。	
九四四	在勤證明書	伊東欣一寄贈
九四五	在學證明書	高梨正三郎寄贈
九四六—九四七	無賃乘車券	唯根伊與寄贈
九四八—九四九	市電の臨時乘車券	淺間初太郎　佐野利左衞門寄贈
九五〇	無賃運輸證	佐藤吉松寄贈
九五一	配給品券	武井丑松寄贈
	當時罹災者に對し發行し、各地より贈られたる食料品其他の配給に便ならしめたものである。	
九五二	簡閲點呼不參屆	久世儀三郎寄贈
	交通杜絶したる爲歸國出來ず、其折差出したるもの。	

震災當時刊行せられたる書籍其他印刷物の類　其二

□ポスター類□

		出品又は寄贈者
九五三—九五七	當時のポスター	東京科學博物館出品
	傳染病の襲來に備へよ。電信電話線を切るな。燒跡の灰燼整理に就いて。罹災者避難先告知札。震災慘死者追弔大法會ポスター。	
九五八—九六二	當時のポスター	東京自治會館出品
	戒嚴令布告の報知。武器取締に關する件。國民小學校ポスター。罹災地人口調査報知。市民諸君に告ぐ。	
九六三—九六七	ポスター	東京科學博物館出品
	協調會臨時病院ポスター。罹災地人口調査報知。帝都震災一覽。地震火災の用心。漫畫ポスター。	
九六八	諸君に告ぐ	警視廳寄贈
九六九	救療班ポスター	宮內省下附
九七〇—九七一	ポスター	東京科學博物館出品
	勤儉奬勵ポスター。御用心ポスター。	
九七二	兒童招集ポスター	下谷區市立小學校校長會寄贈
九七三	病氣のお方は救護所へ	陸軍省出品
九七四—九七九	義捐金募集ポスター	東京科學博物館出品

紐育赤十字社の使用せしポスター。ロスアンゼルス赤十字社の使用せしポスター。市我古に於けるカルホニアに於ける義捐金募集ポスター。ロスアンゼルス赤十字社の使用せし厚紙製ポスター。ロスアンゼルス赤十字社の使用せしポスター。

九八〇　義捐金募集スタンプ　古澤幸子寄贈

在米同胞婦人が母國救濟事業として、雄々しく街頭にたち通行人の同情にすがつたものである。

九八一　震災に關する遞信省第一報　救護に關する遞信省第一報　遞信省寄贈

九八二　暫定葉書と切手類　遞信省寄贈

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其三

□情報及報告書類□

		出品又は寄贈者
九八三	外務省情報綴	東京科學博物館出品
九八四	災害情報	東京市統計課出品
九八五	乙班東京府情報綴	東京科學博物館出品
九八六	乙班參考資料蒐集綴	東京科學博物館出品
九八七	乙班統計綴	東京科學博物館出品
九八八—九九	關東地震調査報告	復興局出品
九九〇	大正大震災震害及火害の研究	震災豫防調査會出品
九九一	震災被害概況	本館藏
九九二	震災豫防調査會報告	帝國大學理學部地震學教室寄贈
九九三	大震災善後會報告書	大震災善後會寄贈
九九四	臨時震災救護事務局囑託協議會報告書	東京市政調査會寄贈
九九五	大震火災事業報告	鳥海伊太郎寄贈
九九六	震災關係文書	大藏省出品
九九七	案内所報	本館藏
九九八	震災に依る被害工場事情	本館藏
九九九	東京市下水道震害調査報告	東京市土木局下水課出品
一〇〇〇	御下賜金及内外各地方震災救援調書	東京市文書課出品
一〇〇一	震災配布情報	協調會寄贈
一〇〇二	震火災統計書	警視廳寄贈
一〇〇三	震災被害概況	本館藏
一〇〇四	震災日誌	日本橋區役所寄贈
一〇〇五	震災日誌	神田區役所寄贈

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其四

□新聞雜誌類□

		出品又は寄贈者
一〇〇六—一〇〇七	報知報聞	金子藤一郎　太田春雄寄贈

一〇〇八—一〇〇九　報知新聞綴　奈良覺右工門寄贈
一〇一〇　朝日新聞　辰井吉之助寄贈
一〇一一　九洲日報　木村莊八寄贈
一〇一二—一〇一三　福岡新聞　小石原龜作
一〇一四—一〇一五　福岡日日新聞　木村莊八寄贈
一〇一六—一〇一七　大阪毎日新聞　小石原龜作寄贈
一〇一八　諸新聞の切抜　磯田慶三
一〇一九　羅府に於ける邦字新聞　佐野利右衛門寄贈
一〇二〇　スクラップブック　東京科學博物館出品
一〇二一　米國諸新聞綴　東京科學博物館出品
一〇二二　自警　本館藏
一〇二三—一〇二三　當時の婦人雜誌類　日米協會出品
婦女界。婦人世界。婦人公論。主婦の友。婦人倶樂部。女學世界。女性。女性改造。家庭雜誌。少女畫報。　警視廳寄贈
一〇二三　新青年　本館藏
一〇二四　寸鐵　加藤英之助寄贈
一〇二五　思想　加藤英之助寄贈
一〇二六　支那時報　本館藏
一〇二七　青年　本館藏
一〇二八　實業の日本　本館藏

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其五

□小學校兒童作品類□

		出品又は寄贈者
一〇二九	小學校兒童震災記念文集	本館藏
一〇三〇	大震災遭難記	京橋高等小學校出品
一〇三一	大震災感想記	京橋高等小學校出品
一〇三二	震災の日	泰明小學校出品
一〇三三	樽を机として	富士小學校出品
一〇三四	震災顚末記	富士小學校出品
一〇三五	震災の反映	西町小學校出品
一〇三六	震災記念文集	外手小學校出品
一〇三七	震災印象記	本所小學校出品
一〇三八	大震災記念文集	横川小學校出品
一〇三九	震災記念文集	本横小學校出品
一〇四〇	震災記念文集	綠小學校出品
一〇四一	震災記念文集	錦華小學校出品
一〇四二	震災の思出	京橋高等小學校出品

一〇五三	學校日誌	柳島小學校出品
一〇五四	學校日誌	綠小學校出品
一〇五五	學校日誌	下谷區市立小學校々長會出品
一〇五六	努力週間日誌	京橋高等小學校出品
一〇五七	努力週間	京橋高等小學校出品
一〇五八—一〇五九	震災直後の兒童出席簿　震災直後の兒童學席	文海小學校出品
一〇六〇	下谷小學校職員罹災調	下谷區市立小學校々長會出品
一〇六一	御眞影奉還奉仕者出勤簿	下谷區市立小學校々長會出品
一〇六三	下谷區兒童調査	下谷區市立小學校々長會出品
一〇六三	兒童調査簿	京橋高等小學校出品
一〇六四	その頃の教材	京橋高等小學校出品
一〇六五	大震災記念號	中倉泰太郎寄贈
一〇六六	當時の教育狀況	錦華小學校出品
一〇六七	震災前後に於ける教育概況	下谷小學校出品
一〇六八	震災後に於ける教育概括	田原小學校寄贈
一〇六九	記述文	高橋多七寄贈
一〇七〇	記述文	永澤完司寄贈
一〇七一	震災の想出	宮晉松寄贈

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其六

□畫報及畫帖類□

		出品又は寄贈者
一〇七二	國際畫報	大正通信社寄贈
一〇七三	關東大震災畫報	本館藏
一〇七四	大正震災畫集	森伊勢治寄贈
一〇七五	大震災記念畫帳	本橫小學校出品
一〇七六	關東震災畫帳	村山銀三郎寄贈
一〇七七	大震火災記念畫帳	阪本小學校出品
一〇七八	大震災寫眞畫報	木村森八寄贈
一〇七九	大震災寫眞畫報	東京科學博物館出品
一〇八〇	大震災寫眞畫報	東京朝日新聞社寄贈
一〇八一	大正震災誌寫眞帳	內務省社會局寄贈
一〇八二	東京大震災寫眞帳	山野邊義智寄贈
一〇八三	震災寫眞帳	福王理玄出品
一〇八四	寫眞帳	有松璋寄贈
一〇八五	寫眞通信	大正通信社寄贈
一〇八六	朝日グラフ特別號	東京朝日新聞社寄贈

一〇八七　朝日グラフの大震災日誌　辰井吉之助寄贈
一〇八八—一〇九〇　母國震災救濟事業記念寫眞帳　古澤幸子寄贈

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其七

□書籍類□

		出品又は寄贈者
一〇九一	大震火災に直面して	本館藏
一〇九二	一九二三年九月東京に於ける大地震と大火災	本館藏
一〇九三	東京震災錄	本館藏
一〇九四	東京震災記	本館藏
一〇九五	赤坂區震災誌	赤坂區役所出品
一〇九六	大正大震災大火災	加藤兼吉寄贈
一〇九七	大正震災記	時事新報社寄贈
一〇九八	大震災全記	本館藏
一〇九九	東京市電氣局震災誌	東京市電氣局出品
一一〇〇	偕行社記事	安倍叔吾寄贈
一一〇一	東京市震災衞生救療誌	東京市保健局衞生課出品
一一〇二	大震災と水問題	本館藏
一一〇三	震災と纖維工業	本館藏
一一〇四	震火災に法律問題	本館藏
一一〇五	地震と震災、其の原因と豫防	本館藏
一一〇六	火災を起し易き藥品の格納法に關する注意	本館藏
一一〇七	震害及火害の研究	本館藏
一一〇八	大正十二年關東大地震々害調査	本館藏
一一〇九	今後の地震	本館藏
一一一〇—一一一一	「十一時五十八分」二冊	山本久子寄贈
一一一二	十一時五十八分	震災共同基金會寄贈
一一一三	十一時五十八分	本館藏
一一一四	大震災經濟史	尾形眞弓寄贈
一一一五	軌道に伏して	澁木直一寄贈
一一一六	大震の日	本館藏
一一一七	大震火災の東京	本館藏
一一一八	大正むさしあぶみ	本館藏
一一一九	震災哀話	近藤蕉雨寄贈
一一二〇	世の妻に	小島八郎寄贈
一一二一	產婆看護婦關東震災殉難記	拓植あい寄贈
一一二二	殉難記	本館藏
一一二三	大正震災後日物語	本館藏

二二四　震災美談　本館藏
二二五　大正震災美績　東京府寄贈
二二六　閻魔裁判艦長拔　本館藏
二二七　灰燼集　古今書院寄贈

震災當時に刊行せられたる書籍其他印刷物　其八

□洋書類□

出品又は寄贈者

二二八—二二七　The Great Earthquake of 1923 in Japan　丸善株式會社寄贈
二二八　Memorandum Reclative to the Reconstruction of Tokyo　東京市政調査會寄贈
二二九　The Great Earthquake of S. E. Japan　震災豫防調査會寄贈
二二〇　The American City　東京市政調査會寄贈
二二一—二二二　Our World　東京市政調査會寄贈

復興途上に發せられたる書面其他

□電文其他書類□

出品又は寄贈者

二二三　復興第一歩への電文　東京市政調査會出品

大震直後故後藤新平伯爵とビアード博士との間に往來せし電文にして、伯爵の打電に對し次の如き有益なる意見を寄せられたものである。

（電文譯）新路線を設定せよ
該路線内に建築を禁ぜよ
鐵道停車場を統一せよ

二二四　新聞原稿材料報告の件　東京自治會館出品
二二五　バラック内申合　東京自治會館出品
二二六　區劃整理講演會關係ビラ　東京市政調査會寄贈
二二七　感謝狀　東京市祕書課出品
二二八　感謝狀　進藤雄太郎寄贈
二二九　表彰狀　東京市祕書課出品
二三〇　移轉補償金決定通知書　進藤雄太郎寄贈

復興途上に刊行せられたる書籍其他印刷物　其一

□ポスター類□

出品又は寄贈者

二三〇—二三二　ポスター　東京自治會館出品

綴む心のねじを捲け。　精神作興ポスター。　體育振興ポスター。　帝都復興の歌募集。　震災美談募集。　復興展出品募集。　復興展覽會ポスター。　帝都復興叢書出づ。　記念標語發表。　復興市立圖書館。　土地區劃整理當選標語。　帝都復興

二三三　復興の寶船　東京科學博物館出品

復興途上に刊行せられたる書籍其他印刷物　其二

□パンフレット及書籍類□

		出品又は寄贈者
一三三四	清浦首相に呈するの書	東京市政調査會寄贈
一三三五	帝都復興の議	東京市政調査會寄贈
一三三六	ビアード博士東京復興に關する意見	東京市政調査會寄贈
一三三七	復興に直面して	東京市都市計畫課出品
一三三八	米國クリーヴランド市土地評價法	東京市政調査會寄贈
一三三九	ドイツに於ける土地區劃整理	東京市政調査會寄贈
一三三〇	ドイツに於ける土地區劃整理の實例	東京市政調査會寄贈
一三三一	後藤子爵記念市民賞入選論文	東京市政調査會寄贈
一三三二	帝都復興に關する建議	東京市政調査會寄贈
一三三三	帝都土地區劃整理に就いて	東京市政調査會寄贈
一三三四	防火地區内建築補助年期繰延に關する建議	東京市政調査會寄贈
一三三五	復興建築株式會社設立案	東京市政調査會寄贈
一三三六	家屋新築及修理に關する耐震構造上の注意	震災豫防評議會寄贈
一三三七	木造小學校建築耐震上の注意	震災豫防評議會寄贈
一三三八	帝都復興に伴ふ學校配置意見	下谷區市立小學校長會寄贈
一三三九	我校教育の復興	月島第二小學校寄贈
一三三〇	復興への犧牲	二葉小學校寄贈
一三三一	帝都復興院事務經過	東京市政調査會寄贈
一三三二	大詔を拜して	本館藏
一三三三	本邦經濟統計	日本銀行文書局寄贈
一三三四	經濟資料	本館藏
一三三五	經濟復興に關する諸研究	本館藏
一三三六	復興と兒童問題	本館藏
一三三七	御成婚と精神作興	本館藏
一三三八	市民の歌へる	本館藏
一三三九	世界震災と桑港の復興	本館藏
一三四〇	復興正史	東京市政調査會寄贈
一三四一	本所區史	本所區役所出品
一三四二	帝都復興事業概觀	東京市政調査會寄贈
一三四三	帝都復興事業大觀	内山善三郎寄贈
一三四四	帝都復興事業大觀	東京市都市計畫課出品
一三四五	帝都復興祕錄	東京市政調査會寄贈
一三四六	東京市各區別地圖	内山善三郎寄贈
一三四七	東京市の復舊概要	東京市統計課出品

一三四八　東京市復舊概要　東京市統計課出品
一三四九　東京市震災後の復舊狀況　東京市統計課出品
一三五〇　東京市震災復舊事業概要　本館藏
一三五一　統計より見たる東京市の復興概況　東京市統計課出品
一三五三　復興局技術試驗所報告　東京市政調査會寄贈
一三五三　復興寫眞帖　長谷川眞澄寄贈
一三五四　都市問題　本館藏
一三五五　東京横濱復興建築圖集　本館藏

繪畫彫刻　其一

□震災を描ける□

一三五六—一三〇五　田代二見筆震災風景油繪　出品又は寄贈者　本館藏

震災直後田代二見氏が親しく罹災地に於て描寫せしものを東京震災記念事業協會に於て購入したものである。

○濱町河岸より本所千歳町を望む
○吉原仲之町
○仲見世より淺草觀音堂を望む
○本所區横網町安田邸(本所側厩橋方面を望む)
○吉原江戸町
○本所竹町より淺草觀音堂を望む
○日本橋箱崎町より深川佐賀町附近を望む
○淺草側より吾妻橋ビール會社跡を望む
○本所番場町より淺草駒形町附近を望む
○御徒町方面より上野松坂屋燒跡を望む
○湯島新花町附近より本郷座燒跡を望む
○車坂より見たる上野驛跡
○神田旅籠町より湯島臺を望む
○湯島四丁目より女子高師を望む
○上野公園の避難者(遠景は清水觀音)
○下谷黑門町より湯島臺を望む
○湯島四丁目より東方高田慎藏氏邸を望む
○京橋明石町附近キリスト教會跡
○京橋區北櫻河岸より鐵砲洲方面を望む
○聖路加病院其の一
○聖路加病院其の二
○京橋明石町河岸附近
○京橋出雲町(外濠方面より京橋方面を見る)
○京橋明石町外人邸宅跡(天主公教會附近)
○京橋明石町天主公教會跡(正面)
○明石河岸附近より天主公教會方面を望む
○銀座最古の煉瓦建家屋(二丁目西側裏通を見る)
○日本橋北詰より江戸橋方面を望む
○立教大學跡其の一
○立教大學跡其の二
○日本橋交叉點白木屋燒跡(正面)
○三十間堀を距てゝ采女町方面を望む
○日本橋通三丁目附近
○神田小川町電車通より鎌倉河岸方面を望む
○ニコライの夕
○ニコライ教會堂跡
○水道橋附近より駿河臺を望む
○俎橋附近より竹橋方面を望む
○湯島臺より旅籠町方面を望む(右方の神社は神田明神)
○神田連雀町附近よりニコライ教會堂を望む
○御茶の水橋際より駿河臺紅梅町方面を望む
○水道橋方面より佛英和女學校跡を望む
○牛ケ淵公園の避難者
○神田橋より鎌倉河岸を望む
○ニコライ教會堂より小川町方面を望む
○駿河臺鈴木町(遠景中央はニコライ教會堂)
○駿河臺井上眼科病院(右)と瀬川小兒科醫院
○大橋邸跡より大橋圖書館を望む

○麹町上六番町
○野毛山公園より横濱を望む

一三〇六—一三三〇　徳永柳洲筆大震災油畫　本館藏

災害當時徳永柳洲氏東京に在りて慘禍を見聞し、其門人と共に之を描寫したるもの、其後米國に送り一般の觀覽に供し彼國に於ける同情を喚起せると傳へらる

○第一震十二階の崩壞
○隅田川端の叫喚
○當夜の永代橋
○淺草北部
○日本橋附近災害の夜景
○本郷元町より見たるお茶の水附近
○上野公園より見たる灰燼の帝都
○被服廠跡
○旋風
○自警團
○翌日の悲歎
○軍隊の炊出作業
○赤十字の活動
○宮城前の避難バラック
○軍隊の傷病者救護
○上野池の端臨時病院御慰問の皇后陛下
○麹町區五番町御巡視中の攝政宮殿下
○鎌倉の海嘯
○熱海線鐵路の崩壞
○横濱の全滅
○小田原の海嘯
○花屋敷
○酒匂川上空の飛行機
○傳書鳩
○避難者の混亂

一三三一—一三三二　震災油畫　本館藏

自治會館より寄贈されたるものにして、當時の災害寫眞と相俟つて混亂の帝都を想像なし得。

○焔に包まれたる銀座
○猛火小傳馬町を一舐にせんとする光景
○被服廠跡の旋風
○神田方面の慘狀
○ニコライ會堂跡
○花屋敷
○破壞せる吾妻橋の市電假橋
○避難者
○罹災者
○配給品分配
○バラック敎場
○猛火の日本橋
○猛火中の避難者
○淺草十二階附近
○駿河臺よりニコライ堂を望む
○軍隊の活動
○傳書鳩
○水道鐵管内の避難者
○傷病者の救護
○震災直後の交通機關
○日比谷公園内バラック
○酒匂川上空偵察

一三五三　三秀社印刷工場の燒跡油繪　島連太郎寄贈
一三五四　萬英舍印刷工場の燒跡油繪　島連太郎寄贈
一三五五　安政地震錦繪　東京科學博物館出品
一三五六　荒都圖繪　木村莊八寄贈
一三五七　避難者　藪川左二寄贈
一三五八　スケッチ(版畫)　野本新太郎寄贈
一三五九　上野公園東照宮境内の被害　磯村茂作寄贈
一三六〇　遞信省跡　麻布松一郎寄贈
一三六一　淺草公園十二階跡　陣内松齡寄贈

一三六三　スケツチ集　磯村犀江寄贈
一三六三　スケツチ　田村愛助寄贈
一三六四　スケツチ　鈴木有哉寄贈
一三六五　震災風景スケツチ　泰明小學校出品
一三六六　震災風景スケツチ　錦華小學校出品
一三六七　震災風景スケツチ　外手小學校出品
一三六八　震災風景スケツチ　小島小學校出品
一三六九　震災風景スケツチ　牛島小學校出品
一三七〇　震災風景スケツチ　本所小學校出品

繪畫彫刻　其二

□復興を描ける□

一三七一—一三七七　田代二見筆　帝都復興の景七枚　寄贈者　井下清寄贈

○上野公園より復興を望む
○隅田公園の夏
○駒形橋
○聖橋
○隅田公園の冬
○清洲橋
○永代橋

一三七八—一三八〇　田代二見筆　帝都復興の景三枚

○濱町公園の春
○晩秋の昭和通
○銀座通

一三八一　復興を豫想して　市川政司寄贈

一三八二—一三八五　寒山拾得の圖　本館藏　王一亭寄贈

本畫は震災當時救援に、又記念堂建設に少なからず、盡力せられたる中華民國一亭王震氏が復興記念館内揭揚の爲め特に揮毫し寄贈せられたるものである。

繪畫彫刻　其三

□彫　刻□

一三八六　業　寄贈者　柴田正重寄贈

震災に依る感銘を受けて作製し、帝國美術院四部に出品されたるものである。

一三八七　慈　光（觀世音木彫像）　神田枯山寄贈

模　型

一三八八—一三九一　バラツク時代から復興へ　本館藏

火焔に包まれたる光景より復興に至る迄を、四景に別けて作られたる小さなパノラマである。

一三九二　帝都復興事業進捗一覽圖　東京市政調査會出品
一三九三　東京市五千分の一模型　復興局出品
一三九四　東京市模型　東京市保健局清掃課出品
一三九五　第一塵芥處理工場模型　復興局出品
一三九六—一三九八　幹線模型
第一號幹線(昭和通り)の一部　第二號幹線九段坂　第七號幹線八重洲橋附近
一三九九　隅田公園　復興局出品
一四〇〇　小名木川筋改修模型　復興局出品
一四〇一—一四〇五　地質試錐標本
月島公園　京橋明石町　品川驛構内　上六公園　元加賀公園　復興局出品

圖表　其一

□震災圖表□

		出品又は寄贈者
一四〇六	震災前の東京	本館藏
一四〇七	震災に依る日本の損失	東京市統計課出品
一四〇八	東京市の震災に因る損失	本館藏
一四〇九	東京市震火災燒失區域圖	東京市文書課出品
一四一〇	東京市震火發火地點及燒失區域圖	東京市文書課出品
一四一一	帝都大震火災系統圖	東京日日新聞社寄贈
一四一二	東京近縣震害情況概見圖	東京科學博物館出品
一四一三	震火災狀況圖	陸軍省寄贈
一四一四	震災罹災者	東京府寄贈
一四一五	罹災者の職業別失業者	東京市統計課出品
一四一六	東京市震災罹災者の散布狀況	東京市文書課出品
一四一七	災害犧牲死者分布圖	本館藏
一四一八	東京市內各區別震災死體收容圖	東京市保健局出品
一四一九	東京市罹災戶數及人口	東京市出品
一四二〇	東京附近罹災地圖	東京科學博物館出品
一四二一	關東戒嚴地域內警備配置要圖	陸軍省寄贈
一四二二	關東震災地域陸軍救療機關配置要圖	陸軍省寄贈
一四二三	關東大震災に於ける陸軍飛行機の活動狀況一覽圖	陸軍省寄贈
一四二四	東京市附近警戒救護食糧品配給所位置要圖	陸軍省寄贈
一四二五	配給被服品の合計	陸軍省寄贈
一四二六	大震災と郵便	遞信省寄贈
一四二七	大震災と電信	遞信省寄贈
一四二八	大震災と無線電信	遞信省寄贈
一四二九	對外震災情報第一信と其連絡系路	遞信省寄贈
一四三〇	御下賜金國內各地よりの震災義捐金	本館藏

一四三一　御下賜金並國內各地震災救援狀況　東京市文書課出品
一四三三　海外友邦震災義捐金品　本館藏
一四三三　海外友邦震災救援狀況　東京市文書課出品
一四三四　新宿御苑內バラツク收容所罹災者罹災地別統計圖表　四谷區役所寄贈
一四三五　新宿御苑內バラツク收容所概況　四谷區役所寄贈
一四三六　移動バラツク平面圖　東京市出品
一四三七　震災後に於ける東京市內の假設建物　本館藏
一四三八　東京市バラツク收容者退去狀況表　東京市出品
一四三九　震災前後の東京府人口　東京府寄贈
一四四〇　大東京震災前後人口比較　本館藏
一四四一　震災前後の交通量　東京府寄贈
一四四二　震災前後の物價と賃金　東京府寄贈

圖表　其二

□學術的研究圖表□

一四四三　震災前後に於ける東京府生產額消長　東京府寄贈
一四四四　大震災前後に於ける東京市歲入の變遷　東京市統計課出品
一四四五　震災前後に於ける市內工場及職工數の比較　東京市商工課出品
一四四六　地球の構造と地震波の擴がり方　本館藏
一四四七　地震波の擴がり方　本館藏
一四四八　地殼の分裂狀況　本館藏
一四四九　局部大地震　本館藏
一四五〇　非局部大地震　本館藏
一四五一　旋風圖表　帝國大學地震學教室寄贈
一四五二　帝都大地震火災系統地圖　帝國大學地震學教室寄贈
一四五三　關東地方大地震年代表　帝國大學地震學教室寄贈
一四五四　關東大地震數元と斷層系　帝國大學地震學教室寄贈
一四五五　關東大地震當時並に前後に於ける關東主要地塊の傾斜運動　本館藏
一四五六　東京地方に於て活動性を有する地塊　本館藏
一四五七　大正十二年九月一日關東大地震氣象　本館藏
一四五八　關東地方西曆千三百年以後大地震進行　帝國大學地震學教室寄贈
一四五九　西曆千八百五十三年以後の大地震進行　帝國大學地震學教室寄贈
一四六〇　明治九年以後東京有感地震　帝國大學地震學教室寄贈
一四六一　明治九年以後東京有感地震年次變化　帝國大學地震學教室寄贈
一四六二　多元性震源を有せる大正十二年九月一日關東地方大地震の數元と斷層系　帝國大學地震學教室寄贈
一四六三　關東地方大地震初動方向及震度分布圖　東京中央氣象臺寄贈
一四六四　非局部關東大地震地變動　帝國大學地震學教室寄贈

一四六五　江戸十六大災圖　本館藏
一四六六　關東火災分布圖　帝國大學地震學教室寄贈
一四六七　震災發火地點と火流　警視廳寄贈
一四六八　大正十二年九月一日より三日に至る東京大火災の氣象圖東京中央氣象臺寄贈
一四六九　羽田地塊及江東地塊の急性運動竝に關東强震に於ける水準變更　本館藏
一四七〇　羽田沖及江東及武藏中部地震氣象　本館藏
一四七一　北伊豆大地震を伴へる地塊運動　本館藏
一四七二　北伊豆地震氣象　本館藏
一四七三　丹後大地震を伴へる地塊運動　東京科學博物館出品
一四七四　相模灘水深變化圖　本館藏
一四七五　地震に出會つた時の心得　本館藏
一四七六　家屋を地震に壞れない樣にするには　本館藏
一四七七　震火災防止上の注意　本館藏

圖表　其三

□復興圖表□

一四七八　復興への先驅　出品又寄贈者
一四七九　帝都復興事業計畫　海軍省寄贈
一四八〇　東京復興計畫の課程　本館藏
一四八一　東京復興事業の內容　復興局出品
一四八二　東京都市計畫地域圖　復興局出品
一四八三　帝都復興事業費　本館藏
一四八四　國施行帝都復興事業費各年度月別支出狀況　復興局出品
一四八五　國施行帝都復興事業費　復興局出品
一四八六　東京市の復興復舊費　東京市統計課出品
一四八七　復興費分擔關係圖　復興局出品
一四八八　東京市施行帝都復興復舊事業財源種別金額圖　東京市財務局出品
一四八九　復興行政機關の變遷及其の統理關係の變動　復興局出品
一四九〇　復興復舊援助者經費調　復興局出品
一四九一　大東京區域　本館藏
一四九二　復興後の東京　本館藏
一四九三　帝都復興材料移入高　東京市商工課出品
一四九四　復興材料移入高　復興局出品
一四九五　帝都復興事業進捗一覽圖　東京市復興事業局工事課出品
一四九六　東京市鋪裝道路一覽圖　東京市土木局道路課出品
一四九七　地下埋設物整理前後狀況　復興局出品
一四九八　地下埋設物配置狀況圖　復興局出品
一四九九　地下埋設物其他工作物整理數量一覽圖　復興局出品

一五〇〇　上野廣小路地下埋設物狀況　東京市土木局道路課出品
一五〇一　上野驛前新舊道內埋設物整理狀況圖　復興局出品
一五〇二　地質斷面圖　復興局出品
一五〇三　試錐標本附圖　復興局出品
一五〇四　復興計畫橋梁一覽圖　東京市土木局橋梁課出品
一五〇五　復興局街路橋型式圖　復興局出品
一五〇六　橫十間川改修圖　復興局出品
一五〇七　帝都復興事業運河改修平面圖　復興局出品
一五〇八　兩國橋計畫圖　東京市土木局橋梁課出品
一五〇九　隅田川六大橋型式圖　復興局出品
一五一〇　十六橋鳥瞰圖　本館藏
一五一一　本所區住宅地實測圖　賀川豐彥寄贈
一五一二　土地區劃整理　本館藏
一五一三　土地區劃整理執行順序　本館藏
一五一四　計畫圖實例と整理圖實例　復興局出品
一五一五　現形圖實側　復興局出品
一五一六　東京都市計畫土地區劃整理前後面積對照圖　復興局出品
一五一七　第四地區現形圖　復興局出品
一五一八　第十地區整理前後街路圖　復興局出品

一五一九　第十地區現形圖　復興局出品
一五二〇　第十地區整理確定圖　復興局出品
一五二一　第十地區埋設物整理狀況圖　復興局出品
一五二二　第十地區東半部土地區劃整理經過次第圖　復興局出品
一五二三　第四十四地區原形圖　復興局出品
一五二四　第四十四地區群割圖　復興局出品
一五二五　第四十四地區八月群割圖　復興事務局寄贈
一五二六　第四十四地區九月群割圖　復興事務局寄贈
一五二七　共同建築設計圖　復興局出品
一五二八　震火災に依る被害建物と復興狀況　東京市統計課出品
一五二九　東京防火地區圖　東京市文書課出品
一五三〇　防火地區　本館藏
一五三一　對火建築補助金說明　復興局出品
一五三二　屋內工作物移轉申請書實例　復興局出品
一五三三　移轉補償金算定順序　復興局出品
一五三四　移轉工事從業職工並賃金推定表　復興事務局出品
一五三五　大東京道路計畫及地域　本館藏
一五三六　萬世橋縱橫斷圖　東京市土木局橋梁課出品
一五三七　上野廣場鳥瞰圖　復興局出品

一五三八　歩道內地下室附帶共同構圖　復興局出品
一五三九　和泉廣場鳥瞰圖　復興局出品
一五四〇　大東京公園計畫圖　東京市保建局公園課出品
一五四一　復興大小公園　東京市保健局公園課出品
一五四三　復興小公園の一日　東京市保健局公園課出品
一五四三　東京市の公園と其內容一覽　東京市保健局公園課出品
一五四四　復興市立病院一覽圖　東京市文書課出品
一五四五　復興市立病院　東京市保健局衞生課出品
一五四六　復興市立小學校一覽圖　東京市教育局學務課出品
一五四七　復興小學校及復舊圖書館　東京市教育局學務課出品
一五四八　中央卸賣市場竝小賣市場分布圖　東京市文書課出品
一五四九　中央卸賣市場建設　本館藏
一五五〇　復興社會事業施設　本館藏
一五五一　街路事業　本館藏
一五五二　上水道事業　本館藏
一五五三　下水道事業　本館藏
一五五四　河川運河事業　本館藏
一五五五　橋梁事業　本館藏
一五五六　電氣事業施設　本館藏
一五五七　塵芥處分設備一覽圖　東京市文書課出品
一五五八　塵芥處分設備　本館藏
一五五九　大東京交通機關　本館藏
一五六〇　大東京郊外土地區劃整理區一覽圖　復興局出品
一五六一　江戸の發達　本館藏
一五六二　町界町名及番地整理　本館藏
一五六三　街路樹の復興　東京市保健局公園課出品
一五六四　工業の凡例　商工省寄贈
一五六五　東京府下工業狀況　商工省寄贈
一五六六　神奈川縣下工業狀況　商工省寄贈
一五六七　橫濱復興事業一覽圖　復興局出品
一五六八　橫濱都市計畫圖　本館藏
一五六九　橫濱土地區劃整理施行地區分劃圖　復興局寄贈
一五七〇　橫濱土地區劃整理前後面積對照圖　復興局寄贈

寫眞　其一

震災寫眞

一五七一—一六六五　震災寫眞　東京市教育局出品
○二重橋前の崩壞　○飛行機より見たる丸の內一部

○東京會館
○燃えつゝある內幸町方面大手門の龜裂
○中央郵便局
○中央電信局の爆破
○日比谷一色活版所附近
○警視廳爆破裝置
○村井銀行より見たる日本橋方面
○日本橋交叉點
○歌舞伎座
○電車の燒骸
○相生橋
○ニコライ堂
○砲兵工廠
○林間理髮店
○華頂宮邸附近の陷沒
○品川驛の雜沓
○陸軍情報告知所
○軍隊に護られて朝鮮人の歸國
○殘骸の取除け
○帝都の殘灰は斯くして取除けらる銀冶橋
○農商務省
○丸ビル附近
○鐵道省
○燃えつゝある日比谷大武寫眞館
○帝劇と警視廳
○警視廳の爆破
○ポンペイを想しむる日本橋附近の廢墟
○銀座通りの復興
○金庫も處々兜町の燒跡
○使用に堪へぬ電車の燒骸
○洲崎大門
○遊就館
○上野寬永寺の鐘堂
○上智大學
○横濱全景
○鶴見附近に於ける軍隊の活動
○兩國橋と國技館軍隊出動
○東洋大學女子曙會救援團罹災者へ着物の分配
○暮れ行く京橋
○銀座通りに於ける殘灰取除け

○綺麗に片付た銀座の道路
○素早く完成したる十五銀行の模範バラック
○二重橋前の天幕
○九段上のバラック村
○日比谷公園の假バラック
○日比谷バラック街の天長節
○帝都最初に出來たるバラック國民小學校
○燒殘りを利用した二階建バラック
○マスク賣り
○丸の內露店の賑ひ
○日比谷の露天飲食店
○東京驛前の露店
○盛に流行する巡回販賣日本橋にて布團屋さん
○芝浦に山と積まれた食料品
○佛國施療院開院式の日
○皇后陛下麻布兵站病院御成り
○赤十字本郷產院御成り
○佛國親日家バレー氏
○左樣なら恩人ウラズ氏がお別れの演說
○罹災兒童救護デー
○上野公園の獨身天幕
○バラックの鐵道省
○罹災婦人救護會が獨身婦人を收容するバラック寄宿舍
○日比谷のバラック
○宮城前廣場天幕村の天長節
○明治神宮外苑にバラック圖書館
○バラックを美くしくする畵家連
○日比谷露店の賑ひ
○振つた看板日比谷の下駄病院
○震災直後の路傍商人
○出揃つた銀座の出店
○震災前より賑かな淺草仲見世
○岩崎男の無料診療所が大繁昌
○竣成した米國寄贈の兵站病院
○皇后陛下產院御成り
○花屋敷跡
○米國親日家ビーアド博士の歸國
○借地人と借家人との和解に區裁判所の巡回裁判
○上野公園罹災者運動會

○菊五郎の罹災者慰安興行
○警視廳彌生祭文を讀む湯淺總監
○被服廠跡の大追悼會
○震災一年を迎へて涙新たなる被服廠跡
○被服廠跡の花賣り
○大震災三週年被服廠跡の大追悼會
○九月一日を偲ぶ玄米飯の炊出

一六六六—一六七八　震災寫眞

○猛火に包まれたる警視廳
○火勢忽ち猛烈を極むる有樂町附近
○九段坂より神田方面の震火を望む
○金庫の護衛
○車に搖られて
○埼玉縣深谷町の被害
○埼玉縣吹上町氷川神社の被害慘況

一六七九—一七二四　震災寫眞

○發震時を物語る東京驛プラットホームの大時計
○倒壞せる木造家屋の被害慘狀
○東京朝日屋上より見たる麴町方面
○東京驛前
○燒け盡した三越呉服店
○日本橋
○震災後の京橋附近
○混雜せる震災直後の淺草仲見世
○傷しき殘骸八階からへし折れたる十二階
○十二階爆破の跡
○二重橋前の避難者
○本郷片町附近の避難者
○雜沓せる避難者(田端驛にて)
○立退先や尋ね人の貼札で埋つた上野公園西郷銅像
○高松宮邸内佛國より寄贈の天幕
○日比谷公園内急設浴場
○舊芝離宮内バラック
○被服廠跡の追弔會
○横濱住吉町附近
○陰慘の氣漲る震後の横濱港
○へし潰れた鎌倉八幡宮の前殿
○七十四號列車轉覆大磯附近

○吉原死の池附近に建られたる納骨堂
○鮮人慘死者大追悼會
○一般參拜者で混雜せる齋場
○被服廠跡大法會
○被服廠跡の納骨堂回向に捧げられたる花束の山
○賽錢をトラックで運搬
○東京震災資料展覽會

東京日日新聞社寄贈

○猛火に包まれたる帝國劇場
○黑門町より見たる西神田方面震火の延燒を望む
○和田倉門前の地割れ
○泳浴せる罹災者
○大正十二年十月十日の須田町附近
○四眠中の蠶全滅

東京朝日新聞社寄贈

○二重橋前の大龜裂
○破壞せる東京會館
○中央氣象臺前より猛火に包まれたる神田方面を望む
○廢墟の如き新橋停車場
○日本橋通り
○銀座通り
○震災直後の野天閣議
○觀世音の參詣で震災直前以上混雜を極むる淺草寺
○十二階爆破の刹那
○燒け落ちた吾妻橋を危く渡る
○日比谷公園内の避難者
○電道軌道に避難せる人々
○避難者を乘せて關西へ向ふ驅逐艦
○鐵管が假の救療所
○米國天幕病院
○震災直後のバラック
○芝公園内のバラック
○被服廠跡
○横濱縣廳前
○總壞となつた横濱岸壁
○鎌倉附近
○保土ケ谷附近
○東海道線山北谷峨間徒步連絡

○鐵橋墜落小山御嚴場間東海道線

一七三五—一七四五　震災寫眞

○市役所前
○上野大佛附近
○十二階
○軍隊の活動
○列車に依る避難者
○傷病者運搬車
○都新聞社の配給
○淺草仲見世
○假設郵便局
○バラック生活
○露天商人

一七四六—一七五九　震災寫眞

○東京驛附近
○電車の燒害
○ニコライ堂
○上野驛附近
○災後の仲見世
○銀座方面
○假設郵便局
○補公銅像附近
○淺草方面の燒跡
○花屋敷の象
○市電に依る避難者
○無料自動車
○布團配給自動車
○被服廠跡
○無料產院
○バラック
○野天飲食店

都新聞社寄贈

○警視廳の出火
○神田驛附近
○九段坂上
○上野驛跡
○永代橋附近
○京橋方面
○應急水道に用ひられたるゴム管

日本電報通信社寄贈

一七六〇　陸軍情報　陸軍省寄贈

一七六一　震災狀況航空寫眞　海軍省寄贈

一七六二—一七六五　震災寫眞　遞信省寄贈

○遞信省の燒跡　○無電に依る重要信一班　○郵便貯金非常拂出し

○臨時郵便局

一七六六—一七六八　臨時診療所寫眞　濟生會寄贈

○濟生會臨時診療所
○皇后陛下の行啓を仰ぎたる濟生會臨時赤羽病院
○濟生會臨時赤羽病院に臺臨の閑院宮殿下

一七六九　舊東京工業學校の震災狀況　東京工業大學寄贈

一七七〇—一七七一　震災寫眞　協調會寄贈

○洲崎病院正面　○善隣館バラック

一七七二　災後に於ける兒童教育　東京自治會館出品

一七七三—一八三三　震災寫眞(其の一)　本館藏

○全潰なぎ倒れの木造建築(砂村方面の倒壞家屋　○大震に俱ふ震火發火瞬間(有樂町方面にて)
○赤坂方面の倒壞家屋　○警視廳爆破の刹那
○十一時五十八分地震で止つた中央氣象臺の大時計　○震災前後の萬世橋停車場附近
○神田方面に於ける窓硝子の被害
○東京帝國大學地震學教室に於ける九月一日の地震記象　○神田小川町方面の被害慘狀
○須田町交叉點より見たる九段方面の燒跡

○上野公園より見たる山下方面の燒跡
○上野公園より見たる廣小路方面の燒跡
○日本橋通三丁目附近の燒跡
○日本橋區人形町通りの燒跡
○三越本館の燒跡
○白木屋の燒跡
○京橋區尾張町方面の燒跡
○銀座通りに於ける電車の燒跡
○本所區横網町安田本邸燒跡
○安田本邸の慘狀
○本所區被服廠跡燒死者白骨の山
○大正十二年九月十九日被服廠跡にて
○江東方面に於ける災後の出水
○本所方面に於ける被害慘狀
○日本電氣株式會社の被害慘狀
○地震に依る水道管の被害(深川にて)
○本郷元町方面に於ける水道鐵管の被害
○破裂せし水道幹線用鐵管
○燒殘りたる淺草下水ポンプ所のモーター
○鐵鋼建築の被害慘狀(月島小學校燒跡にて)
○罹災地に復舊せる東京市の無料電車
○地方來援の奉仕自動車(日本橋方面にて)
○淺草寺境内に於ける救護團の活動
○握り飯を貰ふ人の群
○不思議と燒殘りたる淺草觀音堂
○潮の如く押寄せた二重橋前の避難者
○宮城前廣場に於ける衣類と雜貨の配給
○燒跡の水道に群る避難者の群
○神田方面に於ける給水自動車の活動
○築地本願寺境内に於ける食料品の配給
○深川區岩崎別邸内に於ける米の配給
○本所區龜澤町に於ける衣類の配給
○麹町區牛ケ淵公園内に於ける魚類の配給
○報知新聞社前に於ける魚類の配給
○日本橋本石町不動銀行前の預金者
○新宿配給所に山積せられたる配給品
○本所區小梅町附近の横死者供養塔
○吳服橋附近の横死者供養塔
○軍隊及警官の活動
○芝浦に於ける軍隊の活動

○上野自治館前米國寄贈の配給品分配の光景
○上野公園自治館前に於ける炊出
○東京市役所前の炊出
○東京市役所前に於ける救護班
○青山市電車庫内に收容せる傷病者
○淀橋町に假設したる迷子收容所
○米國寄贈の天幕病院
○災害地に於ける郵便配達
○ビーアド博士寄贈の牛乳配給所
○救護品を滿載して芝浦に入港せる海軍艦船の群

一八三―一八六　震災寫眞(其の一)

○江戸川護岸の龜裂
○東京硝子工場の燒跡
○燒失せる硝子工場の灰燼運搬
○ホースが假の水道管
○一ツ橋に於けるホースの被害
○ニコライ會堂の燒跡
○帝國劇場發火の刹那
○歌舞伎座附近の慘狀
○燒失せる湯島聖堂
○陸軍砲兵工廠の燒跡
○東京齒科醫學專問學校の燒跡
○上智大學の被害
○常盤橋際に設けられし灰捨場
○麹町區東郷伯邸跡

本館藏

○明大生の母校燒跡整理
○活動寫眞館の燒跡整理
○淺草待乳山聖天堂の燒跡
○大地震に襲はれたる鐵筋コンクリート建築の慘狀
○震火災に耐へたる坑火石造の倉庫
○悲慘極りなき丸善株式會社の燒跡
○澁澤倉庫の燒跡
○被服廠跡
○燒殘りたる交番
○警官の活動
○愛國婦人會の湯呑所
○宮内省の救護班
○東京市の臨時救療所
○東京市の臨時無料產院

○聖路加の天幕病院　○野天床屋
○日比谷公園に於ける慰安劇　○御巡啓中の皇后陛下
○罹災地慰問の九條武子夫人　○御巡視中の攝政宮殿下

本館藏

一八六七—一八八四　震災寫眞(其の三)

○麹町區有樂町東京電燈株式會社附近出火の刹那　○兩國國技館の燒跡
○火勢忽ち猛烈を極むる有樂町附近　○內外ビルディング跡
○日本橋區室町附近出火の刹那　○家具潰家の屋根を支へる
○黑門町より見たる西神田方面震火の延燒　○三階家屋潰れて二階家となる
○猛火を背景とせる避難者の雜踏　○兒童机潰校舍の屋根を支へる
○內務省の燒跡　○關東大地震にて倒壞せるも鐵物補强せしため、北伊豆大地震によく耐ふ
○文部省の燒跡　○北伊豆大地震の被害
○農商務省の燒跡　○肩掛雲
○遞信省の燒跡　○積雲

一八八五　災害寫眞　安倍叔吾寄贈
一八八六　スケッチ寫眞　初澤四海知寄贈
一八八七—一八八八　燒失前後の松坂屋　松坂屋寄贈
一八八九　濱松町車庫に於ける電車の燒骸　東京市電氣局出品
一八九〇　天祖神社跡　林精一寄贈
一八九一　巡廻風呂　關篤司寄贈
一八九二　燒跡に於ける慘狀寫眞　有松璋寄贈
一八九三—一八九四　燒跡整理寫眞　島連太郎寄贈

○三秀舍印刷工場跡　○方英社印刷工場跡

一八九五　山內秀一氏　相生警察署合宿所寄贈
一八九六　伊東屋の被害　伊藤勝太郎寄贈
一八九七　今は思ひ出　有松璋寄贈
一八九八　今は思ひ出　德永三郎寄贈
一八九九　當時を偲ぶ　山口政五郎寄贈
一九〇〇　米國に於ける日本義損金募集の狀況　東京科學博物館出品
一九〇一　襟卷雲　東京中央氣象臺寄贈
一九〇二　旋風　帝國大學地震學教室寄贈
一九〇三—一九〇八　移動バラックの實況　東京市役所出品
一九〇九　スケッチ寫眞　森田德次寄贈

寫眞　其二

復興寫眞

一九一〇—一九五七　復興へ　復興局出品

○横十間川筋改修工事中
○運河改修工事寫眞
○護岸改修工事寫眞
○小名木川筋改修工事中
○大島川筋改修工事中
○京橋川筋改修工事中
○神田川筋改修工事中
○聖橋附近
○兜橋附近
○常盤橋附近
○永代橋附近
○豐海橋附近
○雉子橋附近
○街路工事寫眞
○宮城外苑鋪裝工事着手當時の景
○宮城外苑鋪裝工事竣工の景
○東京驛前街路工事着手當時の景
○東京驛前街路工事竣工の景
○麴町一番町附近
○九段坂道路改修工事着手の景
○九段坂道路改修工事中
○九段坂道路改修工事竣工の景
○須田町附近工事中
○歌舞伎座附近街路擴築の景
○上野公園前道路改修工事一部竣工の景
○芝公園內鋪裝街路竣工の景
○街路樹寫眞
○吳服橋通り街路樹寫眞
○赤坂見付街路樹
○金座通り
○尼港記念碑附近街路樹
○靖國神社附近街路樹
○昭和通中の街路樹
○櫻町附近街路樹
○隅田公園
○濱町公園
○錦絲公園
○錦華小公園
○江東公園
○元加賀小公園
○神奈川公園
○山下公園
○野毛山公園
○復興の京橋區役所を望む

一九五八—一九五九　震災直後より移轉整理まで
一九六〇—一九七〇　復興寫眞

○青山學院校庭に復興せる小國民學校
○在京實業家連の復興協議
○日比谷パラツク街に顯れた復興神
○市民感謝デー永田市長の萬歲
○復興第一上野高等女學校の運動會
○京橋日本橋方面の復興

一九七一—一九七三　震災一ヶ月後と復興の東京
一九七三—一九七四　赤穗義士の墓と大木戸跡
一九七五—一九七九　復興寫眞

○復興途上の第一相互ビルヂング附近
○復興途上の三越附近
○復興途上の日本橋附近

一九八〇—一九八三　復興關係寫眞

○故伯爵後藤新平閣下

第十三章　復興記念館

○復興の國技館を望む
○復興の社會局前
○復興のニコライ堂
○ニコライ會堂附近

復興局出品　東京市教育局出品

○銀座の復興
○復興の銀座街
○復興せる松屋
○復興の京橋日本橋方面
○復興した淺草活動街

東京市文書課出品　東京市出品　日本電報通信社寄贈

○淺草仲見世竣工
○永代方面の復興

東京市政調査會寄贈

○チャールス・ビーアド博士

○木曜會實況

東京震災記念事業協會事業資料

一九八三—一九八四　ポスター　本館藏
○大正震災記念建造物設計圖案懸賞募集ポスター
○大正震災記念資料募集ポスター
一九八五　記念堂懸賞募集設計圖案　本館藏
一九八六　震災記念堂建築設計案(伊東忠太博士案)　本館藏
一九八七—一九八九　震災記念堂起工式記念物
○式辭　○祭文　○起工式寫眞　本館藏
一九九〇—一九九四　震災記念堂上棟式記念物
○式辭　○祝辭　○金製の槌　本館藏
○記念のまき錢　○上棟式寫眞
一九九五—一九九七　震災記念堂落成式記念物
○式辭　○祝辭　○落成式寫眞　本館藏
一九九八—一九九九　御下賜金御沙汰書と目錄包　本館藏
二〇〇〇　御下賜品目錄と目錄包　本館藏
二〇〇一　震災記念堂置物申達狀　本館藏
二〇〇二　震災記念堂置物　本館藏
二〇〇三　震災記念堂文鎭　本館藏
二〇〇四—二〇〇七　梵鐘除幕式記念物
○式辭　○祝辭　○梵鐘拓本　本館藏
○除幕式寫眞
二〇〇八—二〇一〇　復興記念館落成式記念物
○式辭　○祝辭　○落成式寫眞　本館藏
二〇一一　震災遭難者遺骨容器　本館藏
二〇一二—二〇一四　東京震災記念事業協會會員章　本館藏
○名譽會員章　○特別會員章　○正會員章　本館藏
二〇一五　東京震災記念事業協會沿革　本館藏
二〇一六　震災記念堂繪　石川光次郎寄贈

第十四章

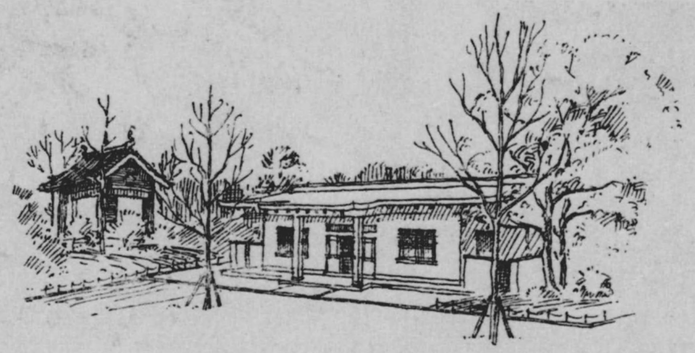
附帶施設

第一節　事務所

本事務所に於ては、震災記念堂竝に復興記念館建設趣旨を貫徹せしむる爲、參拜者の案内説明等をなし、又一般の人々の本記念堂を同様の目的に使用せんとする場合之が許可に關する事務を取扱ふ外、記念堂竝に復興記念館に關する管理事務一切を取扱ふものである。

事務所内には佛教聯合會派遣員が出張してゐる。この佛教聯合會は佛教各宗派を聯合した我國佛教徒の代表團體であつて、震災直後より遭難殃死者の法要弔祭事務を取扱ひ、爾後公式法要の外、遺族其他の參拜者の希望に依つて法要を行ひ、朝夕記念堂開閉に際し看經を行ひ、記念堂の存在を一層意義あらしめてゐる。即ち佛教聯合會は靈的の弔祭奉仕に關する方面を取扱ひ、大衆的の案内管理事務は東京市が之を行つてゐる譯である。

本事務所の建物は震災記念堂の日本風殿堂建築と調和を保ち、且つ壯嚴味あるものとする爲に、大體天平時代の様式に則ることゝし、柱、梁、其他主要部は鐵筋混凝土造として、屋根はセメントタイル張り、棟はテラコッタ張り、外壁は人造石洗出し仕上げ、破風板、化粧棰等は色モルタル塗仕上げとした新味あるものである。



事務所

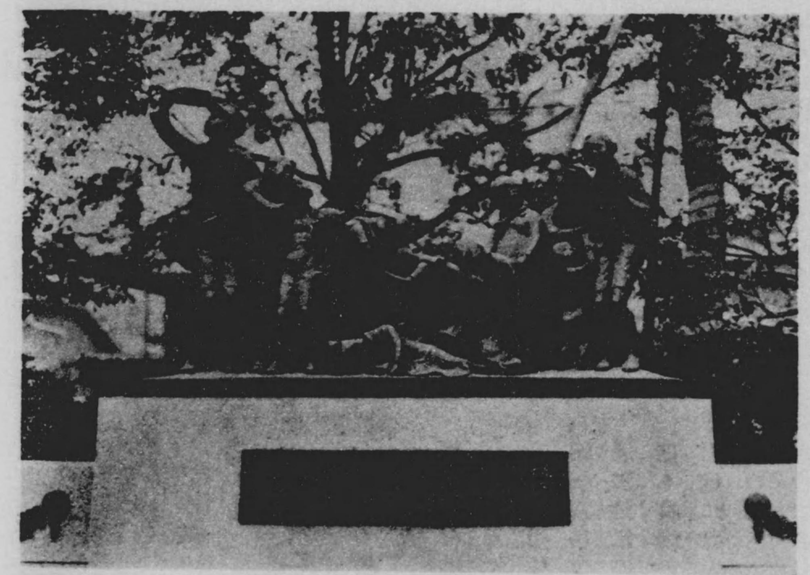
建坪	二四・五坪
工事費	八千六百八拾八圓六拾八錢
起工	昭和五年八月二十六日
竣功	昭和五年十二月十六日

同月二十七日東京市に假引繼をなす

第二節　震災遭難兒童弔魂像

震災の當時東京市小學校兒童で命を喪へるもの無慮五千人に及んだ。この可憐なる遭難兒童の英靈を弔慰する爲、全市小學校長會は相議つて記念物建設を計畫した。

昭和三年九月一日、第五周年忌辰に當つて此計畫が發表されるや各學校兒童の多大の共鳴を得たので、東京市教育局竝に公園課當局の援助を得て全市小學校長を會員とする東京市震災遭難兒童追悼記念物建設會を組織してその實行に著手した。則ち協議の結果記念物建設地を本所區舊被服廠跡震災記念堂附近に豫定し、建設の上は本協會の手を經て東京市に寄附することゝした。又記念物としては本會の立案に基き兒童の群像を建設することに決し、その製作を斯界の權威小倉右一郎氏に依頼したのである。その製作に要した時日は一年半有餘で、尙臺石、小



震災遭難兒童弔魂像

池、袖垣、植樹等の附帶工事の竣成を俟つて、昭和六年五月十六日始めて盛大な除幕式が行はれてこゝに本協會に對して引繼を正式に完了したのであつた。この間その原型の寫眞が新聞紙上に發表になると、その表現あまりに深刻に過ぎ、凄慘味亦强しとて種々な世評に次いで轟々たる議論を卷起す等の事があつて、仕上げの上に多少の修正が加へられたのであつた。

群像は青銅製で高さ五尺、震災直後學童が相集つて遠方の火災を望見しながら驚怖して居る表情と、震災の中に互に相寄り相助け共に慰め合ひつゝある一團の兒童等の可憐な友愛の情とを表現したものであつて、小倉氏の卓越せる藝術的表現は當時の慘狀を眼前に髣髴たらしめ、併せて不言の警告を永久に傳ふるものがある。

臺石は茨城縣西茨城郡稻田產の花崗石を以て作り、高さ五尺八寸、奥行四尺、長さ一丈六尺、正面には「震災遭難兒童弔魂像」の九文字を彫刻した銅版を嵌込み、其左右に砲金製の噴水口花飾を取付け、背面には左の如き由來を彫刻してある。

大正十二年九月一日の大震火災の爲に我が東京市小學校兒童の死亡せし者無慮五千人其の慘狀言語に絶せり學校長等深く之を哀み之を悼み相議りて當時幸に難を逃れ生を全うせる都下の學童をして此の不遇の靈を慰め不幸の魂を弔はしめむことを企畫し第五回の忌辰に際して之を發表するや忽にして學童の共鳴する者拾八萬貳千貳拾七名に及び其の醵金壹萬四千六拾六圓四拾七錢に達せり乃ち小倉右一郎氏に託して震災記念堂の傍に此の群像を建設し保存資金を添へて之を財團法人東京震災記念事業協會に寄附し永く當時を追憶し其の冥福を祈らむとす

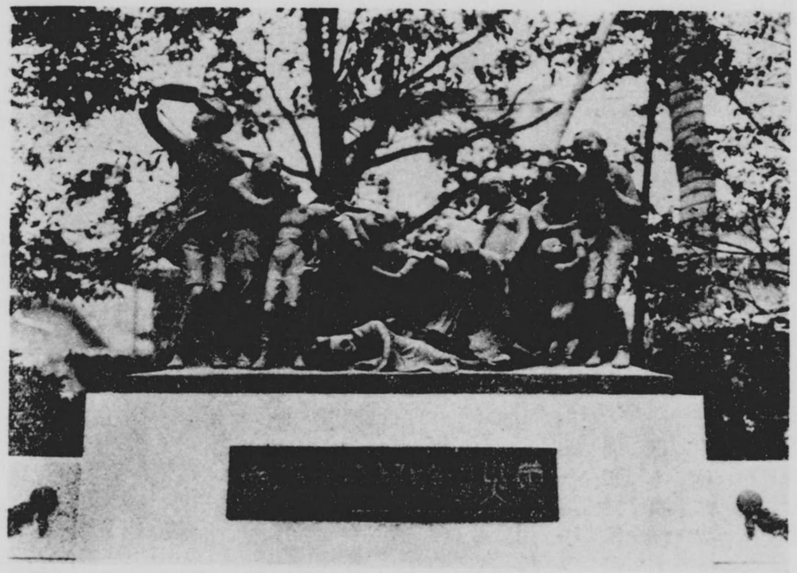
昭和五年九月一日

又群像臺石の前面には長さ二十尺、奥行九尺、深さ一尺五寸の小池を設け、更に臺石の左右に長さ十四尺、奥行十七尺、高さ三尺四寸の袖垣を繞らした。此等の石材は總て稻田產の花崗石を使用してゐる。更に最前面には長さ四十尺の鐵柵を連ねて、その內部に芝生を植付け、背景として大小の樹木を配置してある。

工事費　壹萬壹千六百六拾壹圓九拾七錢

內譯

記念像製作費	七千圓
臺石及小池工事費	參千參百參拾貳圓九拾七錢
袖垣及鐵柵工事費	九百九拾五圓
植栽工事費	參百參拾四圓



震災遭難兒童弔魂像

池、袖垣、植樹等の附帶工事の竣成を俟つて、昭和六年五月十六日始めて盛大な除幕式が行はれてこゝに本協會に對して引繼を正式に完了したのであつた。この間その原型の寫眞が新聞紙上に發表になると、その表現あまりに深刻に過ぎ、凄慘味亦强しとて種々な世評に次いで藝々たる議論を卷起す等の事があつて、仕上げの上に多少の修正が加へられたのであつた。

群像は青銅製で高さ五尺、震災直後學童が相集つて遠方の火災を望見しながら驚怖して居る表情と、震災の中に互に相寄り相助け共に慰め合ひつゝある一團の兒童等の可憐な友愛の情とを表現したものであつて、小倉氏の卓越せる藝術的表現は當時の慘狀を眼前に髣髴たらしめ、併せて不言の警告を永久に傳ふるものがある。

臺石は茨城縣西茨城郡稻田產の花崗石を以て作り、高さ五尺八寸、奥行四尺、長さ一丈六尺、正面には「震災遭難兒童弔魂像」の九文字を彫刻した銅版を嵌込み、其左右に砲金製の噴水口花飾を取付け、背面には左の如き由來を彫刻してある。

大正十二年九月一日の大震火災の爲に我が東京市小學校兒童の死亡せし者無慮五千人其の慘狀言語に絶せり學校長等深く之を哀み之を悼み相議りて當時幸に難を逃れ生を全うせる都下の學童をして此の不遇の靈を慰め不幸の魂を弔はしめむことを企畫し第五回の忌辰に際して之を發表するや忽にして學童の共鳴する者拾八萬貳千貳拾七名に及び其の醵金壹萬四千六拾六圓四拾七錢に達せり乃ち小倉右一郎氏に託して震災記念堂の傍に此の群像を建設し保存資金を添へて之を財團法人東京震災記念事業協會に寄附し永く當時を追憶し其の冥福を祈らむとす

昭和五年九月一日

又群像臺石の前面には長さ二十尺、奥行九尺、深さ一尺五寸の小池を設け、更に臺石の左右に長さ十四尺、奥行十七尺、高さ三尺四寸の袖垣を繞らした。此等の石材は總て稻田產の花崗石を使用してゐる。更に最前面には長さ四十尺の鐵柵を連ねて、その內部に芝生を植付け、背景として大小の樹木を配置してある。

工事費　壹萬壹千六百六拾壹圓九拾七錢

內譯

記念像製作費	七千圓
臺石及小池工事費	參千參百參拾貳圓九拾七錢
袖垣及鐵柵工事費	九百九拾五圓
植栽工事費	參百參拾四圓

起工　昭和五年七月十五日
竣功　昭和六年四月三十日

尙除幕式當日は內務省、文部省、警視廳、東京府、東京市各關係者を始め市立各小學校長、市立府立各中等學校長、各小學校代表兒童男女二名及附添教員一名宛、其他教育關係者、工事關係者等多數參列し、極めて盛大且壯嚴に行はれた。卽ち先づ建設會代表者(誠之小學校長前田捨松氏)の經過報告あつて後、小學校兒童代表者(二葉小學校女生徒)により奏樂裡に除幕が行はれ、次いで小學校兒童代表者(本所小學校男生徒)の弔魂辭朗讀、東京市長の式辭朗讀、內務大臣、文部大臣、東京府知事、東京市會議長、小學校長總代の祝辭朗讀があつて式を終つた。左に弔魂辭及式辭を揭ぐ。

弔魂辭

あの恐ろしい大震災があつたのは僕達がまだ小學校に入學しない六才の時でありました母の脊に堅く負はれながら被服廠跡火の粉の降る中を右往左往走り廻つた記憶が今尙思ひ起されるのに只今茲に五千の橫死少年少女の靈を弔ふ記念像を仰ぐ時八年前に起つたあののろはしい火焰の巷がまざ〳〵と思ひ浮べられます

大波の樣にゆれる大地なだれの樣に崩れる家々渦卷き上る焰は地を燒き天をこがし泣き叫ぶ聲は街に滿ちて之がこの世の終りかと思はれた光景そして江戶時代から幾百年の間人々の絕間ない力によつて築き上げられた大東京がほんの一、二日にして漠々として幾里に連る燒野原となり幾萬の生命が歸らぬものとなり道傍に河中に累々と連る同胞の死骸さてはそれから長く續くバラツク生活等慘憺たる有樣ばかりが走馬燈の如く眼前にくりひろげられるのであります

然しこれは皆僕達の心の底に深い〳〵印象を殘して八年間の歲月が流れてまゐりました

震災直後のバラツク生活それがどんなに苦しくとも又淋しい秋雨が無心に迚る僕達の夢路を亂さうとも僕達はあの五千の少年少女にくらべて如何に幸福でありませうまこと五千の少年少女の運命とは紙一重距てた差であつたのに僕達は生殘る事が出來たのでありますから

靜に考へますとわが東京市は我々の父母や兄さんや姉さんの力によつて立派に復興し今更に發展の途に躍進してをりますこの立派な大東京を受つぐ僕達はなんと幸せでありませう

僕達はこの幸福のかげに五千の少年少女の尊い生命が失はれてゐる事を深く思つて見なければなるまいと思ひます

僕達が今この弔魂の記念像をじーつと見つめる時いつしか我々の心の中に力强く迫つてくるものゝあるのを感ずるのであります

五千の少年少女諸君はたけり狂ふ火焰に吹きまくられ濛々たる黑烟に咽びながら息の續く限り救を求め父や母の名を叫びつゝ悶え苦しんだことでありませうそしてあらゆる希望を挫かれてまう自分の生命をあきらめなければならなかつた瞬間このはかない諸君の魂は同胞愛隣人愛の美しい結晶となつて現れたのでありました　年上は年下をかばひ强い者は弱い者を助けながら運命に靜かに服從して行つたのでありましたこの涙ぐましくも輝しい大精神こそ我々が學ばなければならない最も尊いものゝ一つであります　五千の諸少年少女の歸らぬ生命は餘りにも悲しい貴い犧牲でありました

けれども東京市の續く限り五千の英靈はこの記念像によつて永遠に光を放つものであります

せう　そしてこの貴い精神は市民の心の中に永劫に生きて行くことでありませう
亡き五千の少年少女諸君よ諸君の魂は常に我々の心に往きゝして絶えず我々を鼓舞して下さるのであります　僕達も諸君の誠の心を受けついでこの大東京を益々發展さして行きます
折角諸君の永への安らかな眠りをお祈り致します
最後にこの記念像建立の爲にお世話下された方々に限りない感謝の意を表します

昭和六年五月十六日

東京市小學校兒童總代
本所高等小學校
岸　本　清

式辭

震災遭難兒童弔魂像成リ本日ヲ以テ之カ除幕式ヲ擧行シ財團法人東京震災記念事業協會ノ手ヲ經テ東京市ハ之ガ引繼ヲ了シタリ回顧スレハ大正十二年ノ大震火災ハ實ニ前古未曾有ノ大凶變ニシテ帝都ハ大半其ノ禍害ヲ被リ一朝ニシテ巨億ノ富ト數萬ノ生靈トヲ喪ヒ慘狀寔ニ言語ニ絶スルモノアリ

シカモ我カ東京市小學校兒童ニシテ慘マシクモ之カ爲ニ犧牲トナリシ不遇ノ靈亦無慮五千人ニ及ビ予ハ當時ノ東京市長トシテ親シク其ノ事實ヲ目擊シテ轉タ斷腸ノ感ニ堪ヘサルモノアリキ殊ニ當時親シク之カ教育ノ任ニ携ハリシ者日ヲ經ルニ從ヒ追憶哀悼ノ情愈々切ニシテ昭和三年九月一日第五周年忌辰ニ際シ全市小學校長會先ツ相諮リ都下學童ヲシテ此ノ不遇ノ靈ヲ慰メ不幸ノ魂ヲ弔ハシメンコトヲ欲シ東京市震災遭難兒童追悼記念物建設會ヲ組織スルヤ學童ノ共鳴スル者忽ニシテ拾八萬貳千餘名其ノ醵金壹萬四千餘圓ニ達セリ

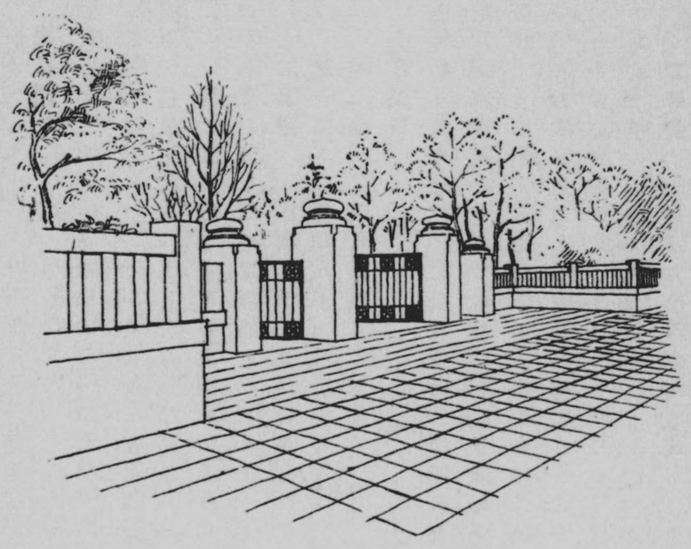
乃チ茲ニ震災記念堂ノ傍ニ震災遭難兒童弔魂像ヲ建設シ保存資金ト共ニ之ヲ財團法人東京震災記念事業協會ニ寄附スルノ計ヲ立テ爾來年ヲ閲スルコト三年關係諸君ノ苦心遂ニ酬イラレ今日其ノ完成ヲ見ルニ至レリ

惟フニ此擧タル固ヨリ遭難兒童ノ靈ヲ弔慰シ永遠ニ其冥福ヲ祈ルニアリト雖モ更ニ又將來萬一ノ慘禍ヲ免レシムル不言ノ警告タルヘク意義甚ダ深長ナルモノアリト謂フヘシ茲ニ本記念像建設ニ關スル關係各位ノ盡力ニ對シ深ク感謝ノ意ヲ表スルト共ニ之カ管理ニ當リテハ適切妥當ナル方途ヲ講シ以テ克ク建設ノ主旨ヲ完ウセンコトヲ期ス

聊カ所感ヲ陳ヘテ式辭トナス

昭和六年五月十六日

東京市長　永田秀次郎



震災記念堂正門

第三節　其他

一、柵と門

震災記念堂敷地の周圍を圍む混凝土柵及門は簡素にして壯重なるを旨として設計せられたもので、柵は高さ一米半、一小間の間隔一間半、延長三百十二間、基礎根切をなし割栗石を搗固め配筋の上混凝土打放し仕上げとしたものである。

門の位置は震災記念堂正面(東側)及敷地東北隅、東南隅、南側、西南隅の五箇所で正面を正門とし、柵同様の基礎を施し、門柱は鐵筋コンクリート造、之に鐵製扉を軸釣にしてある。

工事費　貳萬參千貳百八拾圓七拾五錢
起工　昭和五年一月二十七日
竣功　昭和五年六月六日

二、公衆便所

震災記念堂敷地内には公衆便所三箇所あり、鐘樓裏手及復興記念館裏手にあるものは東京市保健局清掃課所屬のもので前者は記念堂敷地南側に接する道路より後者は同じく北側に接する藏前橋通よりの出入自由である。本協會にて施行したものは記念堂裏手の植込地内にあるもので、あつて、即ち鐵筋混凝土平家建、外部腰は人造石洗出し、同じく上部はリソイド粗面仕上げ、内部はタイル張り及人造石研出しとし、大小便所は自働洗滌式となしてシスターンは屋上に設けてある。

延坪　三坪
工事費　九百六拾四圓九拾錢
起工　昭和六年六月一日
竣功　昭和六年七月二十二日

第十五章　祭典と法要

第一節　四十九日祭

大震火災の殃死者は府市合せて十萬と數へられる。此の諸靈を弔慰するため、大正十二年九月一日より起算して、四十九日に相當する同年十月十九日を以て、當日最も慘禍を極め四萬の死者を出したる本所區被服廠跡に於て、午後一時より府市合同の大追悼式を擧行したのである。

式場は天幕にて三百四十五坪、納骨場は五十六坪のバラック建とし、新に正門を建設して「大震災死亡者追悼式場」の額を掲げ、式場納骨場は黑白の幕を以て裝飾し、式場の正面には「大震火災死亡者之靈位」と墨書せる大位牌を安置して、其前面に祭壇を設け、供物生花等を供へた。死者の骨は、前夜佛教聯合會僧侶の讀經中徹夜を以て、大甕に移して、各行政區毎に併納し、府下の分は位牌を納めたのである。

式の次第は

一、開　式（振鈴）
一、奏　樂（陸軍戸山學校軍樂隊）

被服廠に於ける白骨の山

一、東京府知事追悼文
一、東京市長追悼文
一、總理大臣追悼文
一、東京府會議長追悼文
一、東京市會議長追悼文
一、一同禮拜（奏樂）
一、閉　式（振鈴）
一、退　場（奏樂）

追悼辭

天災地殃史籍載スル所多ク古老亦傳フル所アリ何ソ圖ラム大正ノ昭代其慘禍ノ最モ甚シキモノニ遭遇スルノ不幸ヲ見ルニ至ラントハ嗚呼去月一日正午ニ先ツ數分帝都ノ地大ニ震ヒ倏忽高樓倒レ大厦碎ケ壓死スルモノ算ナク都民驚駭ノ間猛火四方ニ起リ煙炎天ヲ漲リ流火地ヲ焦シ難ヲ避ケ安ヲ求ムルノ生靈或ハ焦熱ノ旋火に靡爛シ或ハ斷橋ノ江水ニ沒溺ス慘ノ又慘凄ノ又凄眞ニ筆舌ニ絶ス明治ヨリ大正ニ迨フ都市ノ盛觀ハ一朝ニシテ曠野トナリ三百年ノ繁榮ハ半霄ニシテ灰燼ニ歸セリ洵ニ心裂ケ胸痛ム嘆惜曷ソ堪ヘンヤ然リト雖大厦高樓之ヲ復スルニ途アリ財貨ノ集積自ラ之ヲ致スノ策ヲ存ス獨リ數萬ニ上ル不幸ナル遭難ノ生靈ニ至リテハ夫何ヲ以テカ之ヲ償フコトヲ得ンヤ之ヲ天ニ訴フルモ鬼哭唯曉ニ啾々タルヲ聞キ之ヲ地號フモ青燐徒ニ夜燃ユルヲ見ル痛惻哀慟實ニ言フ所ヲ知ラサルナリ今ニ於テ厚ク弔慰ノ法ヲ講シ嚴ニ祭祀ノ典ヲ修ムルニアラスンハ夫何ヲ以テカ幽魂ニ酬ヒ何ニ緣テカ遺族ノ憂ヲ安センヤ即チ府市相謀リ此日災禍ノ後第四十有九日ノ忌辰ニ丁リ慘害最劇ノ地屍山骨嶽今ニ戰慄ヲ禁セサル當被服廠趾ニ於テ恭シク祭壇ヲ築キ虔ミテ香華ヲ供ヘ遺族各位ノ列席ヲ煩ハシ朝野ノ名流ヲ會シ府下遭難諸靈位追悼ノ式典ヲ行フ事

恭クモ天聽ニ達シ聖恩至仁祭祀ノ資ヲ下シ玉ヒ東宮殿下亦恩賜アリ加之懿德深重特ニ禁苑ノ菊花ヲ賜フ是實ニ民間ノ祭祀嘗テ例ナキ所各宮殿下亦生花及供菓下賜ノ恩命アリ優渥眞ニ嘗テ聞カサル所ナリ遭難慘死ノ寃魂既ニ未曾有ノ劇苦ニ亡フト雖何ノ幸ソ此未曾有ノ恩典ヲ拜シテ仁澤枯骨ニ及ヒ榮光殘骸ニ輝キ泉下定メテ感泣スル所アラン今擧クル所ノ式甚タ薄ク捧クル所乏シキト雖海嶽ノ聖旨ニ賴リテ祭式ノ榮ヤ千古ニ傳フヘシ府民亦此至仁至慈ノ聖恩ヲ奉戴シテ奮勵努力速カニ帝都復興ノ大業ヲ成シ以テ遭難諸靈ノ遺志ヲ繼承恢擴シ且遺孤遺族ヲ撫育保全シテ必憂ナキヲ期セン諸靈位希クハ來リテ薄力薦ムル所ヲ享ケヨ

大正十二年十月十九日

東京市長永田秀次郎謹テ大災遭難者ヲ哀悼ス顧レハ本年九月ノ災變タル帝都ノ强半ヲ燒毀シ累代ノ重寶貨財ヲ一空シ人命幾萬ヲ奪フ其被害ノ劇甚ナル眞ニ言語絶ユル者有リ思ハサリキ

東京府知事　宇佐美勝夫

被服廠に於ける白骨の山

一、東京府知事追悼文
一、東京市長追悼文
一、總理大臣追悼文
一、東京府會議長追悼文
一、東京市會議長追悼文
一、一同禮拜（奏樂）
一、閉式（振鈴）
一、退場（奏樂）

追悼辭

天災地殃史籍載スル所多ク古老亦傳フル所アリ何ソ圖ラム大正ノ昭代其慘禍ノ最モ甚シキモノニ遭遇スルノ不幸ヲ見ルニ至ラントハ嗚呼去月一日正午ニ先ツ數分帝都ノ地大ニ震ヒ候忽高樓倒レ大厦碎ケ壓死スルモノ算ナク都民驚駭ノ間猛火四方ニ起リ煙炎天ヲ漲リ流火地ヲ焦シ難ヲ避ケ安ヲ求ムルノ生靈或ハ焦熱ノ旋火に靡爛シ或ハ斷橋ノ江水ニ沒溺ス慘ノ又慘凄ノ又凄眞ニ筆舌ニ絶ス明治ヨリ大正ニ迨フ都市ノ盛觀ハ一朝ニシテ曠野トナリ三百年ノ榮榮ハ半霄ニシテ灰燼ニ歸セリ洵ニ心裂ケ胸痛ム嘆惜曷ソ堪ヘンヤ然リト雖大厦高樓之ヲ復スルニ途アリ財貨ノ集積自ラ之ヲ致スノ策ヲ存ス獨リ數萬ニ上ル不幸ナル遭難ノ生靈ニ至リテハ夫何ヲ以テカ之ヲ償フコトヲ得ンヤ之ヲ天ニ訴フルモ鬼哭唯曉ニ啾々タルヲ聞キ之ヲ地號フモ青燐徒ニ夜燃ユルヲ見ル痛惻哀慟實ニ言フ所ヲ知ラサルナリ今ニ於テ厚ク弔慰ノ法ヲ講シ嚴ニ祭祀ノ典ヲ修ムルニアラスンハ夫何ヲ以テカ幽魂ニ酬ヒ何ニ緣テカ遺族ノ憂ヲ安センヤ即チ府市相謀リ此日災禍ノ後第四十有九日ノ忌辰ニ丁リ慘害最劇ノ地屍山骨嶽今ニ戰慄ヲ禁セサル當被服廠趾ニ於テ恭シク祭壇ヲ築キ虔ミテ香華ヲ供ヘ遺族各位ノ列席ヲ煩ハシ朝野ノ名流ヲ會シ府下遭難諸靈位追悼ノ式典ヲ行フ事

恭クモ天聽ニ達シ聖恩至仁祭祀ノ資ヲ下シ玉ヒ東宮殿下亦恩賜アリ加之懿德深重特ニ禁苑ノ菊花ヲ賜フ是實ニ民間ノ祭祀嘗テ例ナキ所各宮殿下亦生花及供菓下賜ノ恩命アリ優渥眞ニ嘗テ聞カサル所ナリ遭難慘死ノ寃魂既ニ未曾有ノ劇苦ニ亡フト雖何ノ幸ソ此未曾有ノ恩典ヲ拜シテ仁澤枯骨ニ及ヒ榮光殘骸ニ輝キ泉下定メテ感泣スル所アラン今擧クル所ノ式甚タ薄ク捧クル所乏シキト雖海嶽ノ聖旨ニ賴リテ祭式ノ榮ヤ千古ニ傳フヘシ府民亦此至仁至慈ノ聖恩ヲ奉戴シテ奮勵努力速カニ帝都復興ノ大業ヲ成シ以テ遭難諸靈ノ遺志ヲ繼承恢擴シ且遺孤遺族ヲ撫育保全シテ必憂ナキヲ期セン諸靈位希クハ來リテ薄力薦ムル所ヲ享ケヨ

大正十二年十月十九日

東京府知事　宇佐美勝夫

東京市長永田秀次郎謹テ大災遭難者ヲ哀悼ス顧レハ本年九月ノ災變タル帝都ノ强半ヲ燼毀シ累代ノ重寶貨財ヲ一空シ人命幾萬ヲ奪フ其被害ノ劇甚ナル眞ニ言語絶ユル者有リ思ハサリキ

大正ノ昭代後明暦安政ノ凶事ヲ併セ見ントハ不肖秀次郎任ニ市長ノ職ニ在リ思ヲ慘死者ノ身上ニ致セハ同情ノ念特ニ切ナルヲ覺ユ曩ニ府市聯合シテ横死者ノ遺靈ヲ弔ハント欲シ本擧ヲ企ツルヤ事畏クモ　天聽ニ達シ供物御下賜ノ恩命ヲ受ク洵ニ無上ノ光榮ニシテ感激ノ至リニ耐ヘス惟フニ天災固ヨリ豫期シ難シト雖人事自ラ盡ス可キ者存ス今日ノ事唯禍難ヲ既往ニ鑑ミ幸寧ヲ來者ニ計リ以テ後世兒孫ノ憂ヲ輕減スルニ在ルノミ庶クハ遭難者在天ノ靈ヲ慰スルヲ得ム歟之ヲ追悼ノ辭ト爲ス

大正十二年十月十九日　東京市長　永田秀次郎

今次ノ震災ハ伴フニ火災ヲ以テシ其慘害一府四縣ニ亙リテ悽愴ヲ極ム

念フニ當時避難救援ノ事最善ノ努力ヲ盡シタル所ナルモ遂ニ幾萬ノ死者ヲ出セルハ痛恨限リナシ嗚呼人事ノ慘今後之ヲ言フニ忍ヒス

茲ニ東京府市合同シテ追悼ノ典ヲ擧ケラレ哀戚ノ至情懇到シテ殷切ナリ乃チ庶羞ヲ奠シテ恭シク精靈ヲ弔シ其ノ遺族ニ對シ深厚ナル同情ヲ表ス

大正十二年十月十九日　内閣總理大臣　山本權兵衛

以下東京府會議長堀江正三郎氏、東京市會議長伯爵柳澤保惠諸氏の追悼文朗讀もあつたが載錄を略す。

參列者の主なる人々は、各大臣、警視總監、社會局長官、貴族院議長、衆議院議長、商業會議所會頭、同副會頭、戒嚴司令官、第一師團長、近衛師團長、憲兵隊長、帝國在鄉軍人會長、府會及市會議員、東京市各局長、區長、課長、區會正副議長、震災善後會長、同副會長、震災同情會長、同副會長、生命保險協會理事、協調會長、佛教聯合會長、全國神道聯合會長、東京府神職會長、其他有志遺族等無慮二十萬と稱せられ、燒失區域の交通機關全く杜絶したる有樣にも拘らず參拜者は非常なる雜踏を極めた。

此の日は、畏くも　兩陛下より新宿御苑に咲ける菊花を以て飾られたる御輦輪一對並に御菓子、攝政宮殿下より御菓子の御下賜あり、又各宮家より生華一對及御菓子を下賜せられた。これ民間の祭祀には未だ曾て例なきことであり、市民は此の優渥至仁の聖恩に皆感泣したのであつた。殃死者のさまよへる靈も亦定めて感涕してこゝに初めて安らけく眠ることが出來たであらう。此外各大臣以下の寄贈生造花、及供物は山をなし、傷死者並に遺族達は感涙に咽びつつしめやかに且つ嚴かに此の四十九日祭を終了した。

此の年の十月、十一月の二ケ月に亙つて、變災に傷悲したる人心を慰安し、災後の荒んだ人心を和げるため、ほとんど毎日東京市その他の團體に依つて、各處で慰安會が催された。十二月一日には被服廠跡にも、東洋大學主催東京市後援の下に音樂會が開催された。

第二節　神式一年祭並佛式法要

越えて翌十三年九月一日、府市合同の一周年追悼祭を前にして八月二十八日本所區に於ては區會の決議を經て被服廠跡納骨場前で、區内震災殃死者一周年祭を區長の司會に依り擧行した。

九月一日、まざ〳〵と慘ましき追憶の思ひ出される最初の感銘ふかき記念日である。此の日も東京府市合同にて震災殃死者一周年祭並に法要が執行された。

從來この記念堂の敷地は前にも述べた如く、元陸軍被服廠の跡を東京市が購入し、大正十二年に

横網町公園として設備に着手した時不幸にも此の災禍に逢ひ、遂に震災記念堂が建設されることになつたが、敷地は依然として公園地である關係上、東京市は此の土地竝に納骨堂を管理し來つたもので、爾來管理祭典等は主として、東京市が主宰し今日に及んでゐるものである。

大震災の一周年、此の日、酸鼻を極めた慘禍の地被服廠跡に靜かに眠つてゐる四萬の有緣無緣の靈を弔むらふ人は、まだ夜も明け切らぬ頃から否前夜から押しよせて、默禱し涙と共に花を捧げては去つてゐた。

嗚呼九月一日！　今日はまたあの災禍の起きた彼の日と同じく燒け付くような炎天下を、群集は雪崩れの如くに集まつてくる、各署から召集された數百名の警官は聲をからして、「參拜者は正門に廻つて下さい出口は裏から」と叫ぶ聲と、群集の唱へるお題目や念佛の響は丁度去年の今日猛火に追はれてこゝへ逃げ惑ふた人の阿鼻叫喚の聲を彷彿として想ひ起す。

法螺貝を吹き立て、旗をかざして繰込む數百名の富士講員、其他何々講中、何々講中と各々の旗印を押し立てゝ太鼓の音高く、或は鈴の音賑やかに雲集して來る參拜者達により、式場前の廣場は蟻一匹の甫ふ餘地さへなく、揉みに揉まれ自ら動かずして入口より出口へと來てゐる物凄い有樣である。

トラックに花輪や供物を積んで運ぶ在鄕軍人の一團、中には白粉のあともなく、浴衣の裾を端し折り手拭を被つてゐる數組の藝者連、杖にすがつた老婆、いたいけない子供の手を引いた母なども混じつてゐる。中には餘りの人混みに式場によりつけぬ人々は遠くから賽錢を投げるので式場內は、花と銅貨が雨のやうに降つてくる。各所の卒塔婆の前や、式場の前で焚く香煙は纒々として空高く流れてゐる。

納骨場前の式場は三箇所の大テントにて張り廻らされ、正面祭壇の位牌は「大震火災遭難者之靈位」と未だ墨痕も鮮かであつた。靈位の傍らには　兩陛下、攝政宮殿下、竝に各宮家御下賜の生花や供物をはじめ、加藤首相、以下各大臣、大公使その他から贈られた生花、供物が山のやうに供へられ、香煙は絕えずあたりをこめ、しめやかな中にも莊嚴な式場としていともふさはしいものであつた。

九時の開式前には加藤首相、高橋、濱口、岡田、犬養、宇垣、若槻の各大臣が來賓席の前列に著席し、太田總監、粕谷衆議院議長及主催者側以下數百名の參列者が靜かに控へ、やがて、九時の振鈴を合圖に宇佐美知事、永田市長の追弔文に次いで、加藤首相はやをら身を起して前に進み壯重な聲で、左の追悼文を讀み上げた。

弔辭

茲ニ震災一周年ノ當日ヲ以テ東京府市主催ノ罹災死亡者追悼式ヲ擧ゲラルルニ方リ敬弔ノ誠意ヲ表スルトハ洵ニ不肖ノ感慨ニ勝ヘサル所ナリ顧レハ客秋ノ本日地大ニ震ヒ炎焰天ヲ蔽フモノ三日輦轂ノ下一望廢墟ニ歸ス

罹災者無慮百萬死傷者又十數萬其ノ慘禍ノ熾烈前古比ヲ見ス殊ニ本日ノ式場タル此地最モ酸鼻ヲ極ム光景悽愴今尙眼前ニ在リテ眞ニ痛恨トスル所ナリ

畏クモ皇室ニ於カセラレテハ直ニ弔慰ノ優旨ヲ傳ヘテ巨額ノ內帑ヲ賜ヒ更ニ帝都復興ノ詔書ヲ渙發アラセラル友邦ノ君民遙ニ資ヲ寄セ人ヲ派シテ慰問賑恤ニ從ヒ擧國ノ同胞警ヲ傳ヘ身ヲ挺シテ一意救護ニ努力セリ難ニ罹リシ者ノ遺族故舊ニシテ萬死ニ一生ヲ得タル者能ク艱苦ニ堪ヘ窮乏ノ中ニ發奮シテ未ダ暮年ナラスシテ生業ニ復シタル者十ニ八九荒寥タル焦土概ネ

巷屋ヲ列ネ市民拮据ノ意氣眞ニ旺盛ヲ極ム帝都復興ノ事業亦其計畫ヲ進メ井然タル新市街ヲ見ルノ日將ニ遠キニ在ラサラムトス今追悼ノ式典ヲ擧ケ遺族故舊此ニ會シテ懷憶ノ情甚タ切ナルモノアリ難ニ罹リシ者以テ慰スル所アルヘシ

乃チ茲ニ衷心ノ至情ヲ披瀝シテ在天ノ靈ニ告ク

次に主催者として知事、市長が挨拶を述べ、一同禮拜して十時に式を終り、引續いて宮西、平田各宮司、國學院大學長芳賀博士をはじめ其他數十名の神職による一年祭が開かれた。午後一時からは佛教各派聯合の一周忌法要に移り、山下淨土宗、新井曹洞宗各管長をはじめ百數十名の衆僧の莊嚴な讀經があつた、この間參拜者遺族の燒香禮拜は引切りなしにつゞいた。

追弔式が終つてから被服廠跡の人出は絶頂に達し、式場までの廣い通りから電車通り、舊安田邸附近はすつかり參拜者で埋められ犇めき合ふ樣は物すごく、正午までの參詣者は五十萬と推定された。此の日特に設けられた震災記念堂建立資金寄附箱の係員數名は目がまはる忙しさであつた。

十一時五十八分全市の各工場から汽笛の哀音が響き渡ると式場前の大群集は一齊に歩めをとゞめ、いづれも脫帽して肅然として聲もなく汽笛のやむまで默禱をつゞけるのであつた、かくして一周年の祭式は終りを告げた。

第二周年以降八周年に到る記念祭式も例年同じく府市合同の主催で神式竝佛式に依り盛大に擧行されて今日に到つてゐる。

第三節　聖上陛下震災記念堂に行幸

昭和五年三月二十四日は本協會にとつて、又四萬の殃死者の靈にとつても忘るることの出來ない日であつた。

聖上陛下に於かせられては、復興帝都御巡覽の途次、本記念堂に玉輦を止めさせられ親しく諸靈に御禮拜遊ばされ給ひしことである。この日江東の市民は無上の光榮に浴し得て嬉し涙に咽んだ。朝早くからこの光榮と歡喜に咽びつゝ御迎へ奉る民衆は附近の沿道一帶を埋め、さながら人の波であつた。沿道から「萬歳」のこゑが次から次へと雪崩れの如く響き送られて、やがて十一時五十一分龍駕は御著あらせられた、陛下には廣瀨東京市助役の御先導に依り御しめやかな玉歩を、庶民拜迎の中に移させ給ふた。

これより先記念堂に通ずる御通筋は、小砂利が敷きつめられて、兩側には區會議員、區劃整理委員、區委員、本協會員等が參列して御迎へ申上げた。

陛下には正面の階段を進御あらせられ、本堂入口に於ては畏くも御脫帽遊ばされ、祭壇に向はせられては親しく御拜禮遊ばされ給ひしと洩れ承つたが此處に眠れる諸靈如何ばかりか感泣したことであらう。

堀切市長は「記念堂建設費の淨財」に就いて御說明申し上げれば、陛下にはいとも御熱心に聞し召され、仰ぐも畏きことながら暫し御佇立の儘、當時を御回想遊ばされる御模樣で、市長も胸中たゞ恐懼、感涙に咽んだと傳へられる。

次いで兩翼の陳列室に玉歩を進ませられ、此處の陳列品を一々御熱心にみそなはせられ、殊に當時の須田町電氣時計の十一時五十八分に停つてゐる憶ひ出深い姿や、被服廠慘死者の遺留品を初め、當時アメリカ、フランス、イギリス等の諸外國より寄贈された救護品や壁間に掲げてある、德永柳

洲畫伯の描ける油繪十四枚等を御熱心に御眼を止めさせ給ひ、その繪の前を暫し御立去り難き御模様で、供奉員一同も言葉なく頭を垂れたと傳へられる。

かくて十一時五十九分還御遊ばされたのである。

顧みれば大正十二年九月十八日當時攝政宮に在はせられし　聖上陛下には、親しく慘害地御巡啓の折、此の地に於ては特に御馬を暫し止めさせ給ふて御暗涙に咽ばせられたと洩れ承るが、今日復興完成の日に再び記念堂へ、行幸し給ふて往年の御感懷を新にせさせ給ひ、剩へ祭祀料として金壹千圓御下賜の御沙汰あり且銀製花瓶を下し給ひし大御心の渥きには市民たる者唯々感涙に咽ぶのみである。

この日附近一帶の奉迎者は、遺族多く、其の數五萬と稱されてゐる。

第四節　神式七年祭竝佛式法要記念堂落成式

昭和五年九月一日、この日の式場、殿堂中央の「震災遭難者之靈位」と書かれた大位牌の左右には畏くも今春　聖上陛下から御下賜になつた恩賜の花瓶が、同じく御下賜の生花百合、カーネーション、菊、ルピナス等に依つて飾られた。

一段下つて東京府市の供物がそなへられ、更に祭壇の前左右には　皇太后陛下御下賜の立花一對と各宮家より御下賜の立花を始め、首相以下各閣僚、宮內大臣、その他の名士、町會、個人等寄贈の幾多の生造花の花輪は所狹きまでに堂內の兩側に飾られ、又供物等は正面入口の前に堆高く積み上げられて莊嚴華麗を極めた。

主催者側として東京震災記念事業協會長、東京府知事、東京府會議長、東京市會議長、來賓として濱口首相以下各國務大臣、宮內大臣、本邦駐劄大公使代表、警視總監、憲兵司令官及遺族代表等約千名參列の上、先づ神式による落成式七年祭は東京府神職會司祭に依り行はれた。

震災記念堂竣成式に於ける記念堂授受

神官の修祓、降神奉仕、獻饌のことあつて春田神職會長が祝詞を奏上すれば、永田東京市長及東京震災記念事業協會長代理牛塚府知事恭しく拜禮の後、會長から市長に記念堂の目錄と堂の鍵を授與し、こゝに記念堂は東京市に完全に引繼がれた。

それより別項の如く市長の式辭、濱口首相、安達內相の祝辭の朗讀あり、齋主、主催者、國務大臣の玉串奉奠禮拜あり、前代議士遺族代表として磯部尙氏禮拜の後、撤饌神式を終り引續いて佛式による落成慶讃追悼法要が營まれ、佛教聯合會各派の代表の導師十三名衆僧約三百名奏樂裡に昇殿、幹事に依つて落成慶讃の疏は高く讀み上げられた。後般若心經その他の讀經を終り、永田市長はじめ、安達內相、俵商相、來賓遺族代

洲畫伯の描ける油繪十四枚等を御熱心に御眼を止めさせ給ひ、その繪の前を暫し御立去り難き御模様で、供奉員一同も言葉なく頭を垂れたと傳へられる。

かくて十一時五十九分還御遊ばされたのである。

顧みれば大正十二年九月十八日當時攝政宮に在はせられし　聖上陛下には、親しく慘害地御巡啓の折、此の地に於ては特に御馬を暫し止めさせ給ふて御暗涙に咽ばせられたと洩れ承るが、今日復興完成の日に再び記念堂へ、行幸し給ふて往年の御感懷を新にせさせ給ひ、剩へ祭祀料として金壹千圓御下賜の御沙汰あり且銀製花瓶を下し給ひし大御心の渥きには市民たる者唯々感涙に咽ぶのみである。

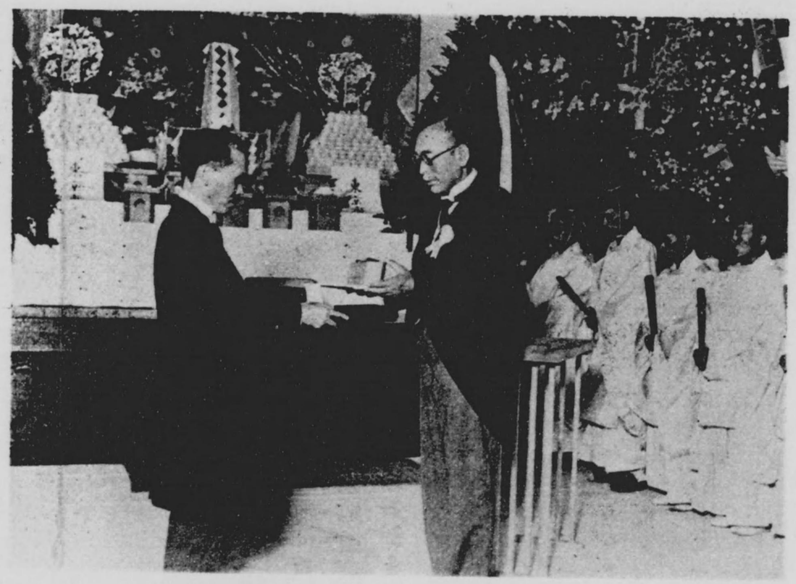
この日附近一帶の奉迎者は、遺族多く、其の數五萬と稱されてゐる。

第四節　神式七年祭竝佛式法要記念堂落成式

昭和五年九月一日、この日の式場、殿堂中央の「震災遭難者之靈位」と書かれた大位牌の左右には畏くも今春　聖上陛下から御下賜になつた恩賜の花瓶が、同じく御下賜の生花百合、カーネーション、菊、ルピナス等に依つて飾られた。

一段下つて東京府市の供物がそなへられ、更に祭壇の前左右には　皇太后陛下御下賜の立花一對と各宮家より御下賜の立花を始め、首相以下各閣僚、宮内大臣、その他の名士、町會、個人等寄贈の幾多の生造花の花輪は所狹きまでに堂内の兩側に飾られ、又供物等は正面入口の前に堆高く積み上げられて莊嚴華麗を極めた。

主催者側として東京震災記念事業協會長、東京府知事、東京府會議長、東京市會議長、來賓として濱



震災記念堂竣成式に於ける記念堂授受

口首相以下各國務大臣、宮内大臣、本邦駐劄大公使代表、警視總監、憲兵司令官及遺族代表等約千名參列の上、先づ神式による落成式七年祭は東京府神職會司祭に依り行はれた。

神官の修祓、降神奉仕、獻饌のことあつて春田神職會長が祝詞を奏上すれば、永田東京市長及東京震災記念事業協會長代理牛塚府知事恭しく拜禮の後、會長から市長に記念堂の目錄と堂の鍵を授與し、こゝに記念堂は東京市に完全に引繼がれた。

それより別項の如く市長の式辭、濱口首相、安達内相の祝辭の朗讀あり、齋主、主催者、國務大臣の玉串奉奠禮拜あり、前代議士遺族代表として磯部尚氏禮拜の後、撤饌神式を終り引續いて佛式による落成慶讃追悼法要が營まれ、佛教聯合會各派の代表の導師十三名衆僧約三百名奏樂裡に昇殿、幹事に依つて落成慶讃の疏は高く讀み上げられた。後般若心經その他の讀經を終り、永田市長はじめ、安達内相、俵商相、來賓遺族代

表等の燒香あり午前十一時頃この法要を終へた。

次いで午前十一時五十八分に至るや永田市長は記念堂外廊に吊された鐘を三たび打ち、マイクロホンを通じて、これを全國に放送し七年前の災害を追想して默悼を捧げ、かくして意義深い落成式典の全部は無事に終了された。

本堂の建設は大正十三年二月、當時の市長永田氏に依つて計畫されたものであるが、今こゝに又同氏に依つて落成式の擧げられた事は誠に因緣淺からぬものがある。

この朝秋雨少しく降つて一しほ感慨深く思はれたが、早朝から記念堂に參詣の人は波を作つて押し寄せ、午前九時漸く空晴れて殘暑とみに加はり、參拜者は雜踏を極め無慮二十萬の人は絡繹として續いた。沿道には花賣が堵列し、堂前の廣場は花束の山を築き、香の煙は縷々として人々の胸を打ち、投げ込まれる賽錢は恰も雨の降る如き觀があつた。

當日は各地方から左の如き弔慰の電報もあつた。

ツツシンデキネンブツヂヲ、チヨウモンイタシマス、アヲモリケン、ニシクン、オクムラヨシタカ、五エンコウデントシテ、デンソウス。

左は此の日の記念祭式の狀況をマイクロホンを通じて知り弔慰されたものと思ふ。

「シンサイキネンダウラクセイシキヲガシ、アハセテムスウレイコンノ、メイフクヲイノル」タキクチヨシナガ。

キネンドウノラクセイシキヲシクシ、シヨセイレイヲナグサム、ミナミサクカクシウレンゴウカイ、ニシダ。

第五節　國母陛下震災記念堂行啓

昭和六年七月四日此の行啓を辱ふする記念堂は早朝より東京市の係員が詰めかけて、記念堂構內は小砂利を敷詰め打水すが〳〵しく、掃き淨められ、特別奉拜席には市會議員、區會議員、區劃整理委員、方面委員、本協會員等襟を正してお待ち申し上げればやがて午前九時二十八分御車は御着遊ばされた。

陛下には、白上東京市助役が御先導申し上げ、記念堂祭壇の前で御禮拜遊ばされ、暫し御瞑目の後、永田市長の御說明申上げる言葉に、いとも御熱心に御耳を傾け遊ばれた。

殊に、支那佛敎徒の寄贈にかゝる梵鐘の由來を申上げ奉りし時は、深く御頷き遊されたと洩れ承る。

次いで構內南側の、遭難兒童の英靈を弔慰し給ひ、その瞑福を祈る爲めに、此程建立せる震災遭難兒童弔魂像の由來に就て、市長つぶさに御說明申上げ奉れば陛下には畏くも之等不遇の學童の靈を御追想遊ばされて暫し御感慨の御模樣であらせられたと承る。こゝより玉步を復興記念館に向けさせらる、記念館入口には、井下市公園課長初め、公園課諸員堵列して奉迎申し上げた。

此處でも、白上助役御先導申し上げ同じく市長御說明申し上げ奉りしが　陛下には、震災當時の災害をまざ〳〵目の當りに見るが如き、御樣子にて幾多の記念品を一々近く御立寄り、御痛はしげに御覽遊ばされた。

階上には、復興に關する文獻、圖表、繪畫、寫眞等が陳列してあつたが、これにも御熱心に御目を止めさせられ、殊に階上に陳列せる繪畫の中には、大震災直後、畏くも當時攝政宮に在せし　今上陛下が、

焦土を御巡視遊ばされし際の御馬上の御英姿と、當時　國母陛下に在せし　皇太后陛下が上野池の端の救護所に御成り遊ばされた御姿を拜寫し申し上げた繪畫を御覽遊ばされ、市長の御說明申し上げるまゝに、暫し御足を停めさせ給ふて御感懷深げに、御目を止めさせられたと洩れ承る。

陛下にはかくて九時四十四分御退出あらせられたが、遭難者慰靈祭祀の爲めにとて、金一封と、結構なる香爐一盒御下賜遊ばされた。

顧みるに、昨春帝都復興の大事業竣成の砌り、畏れ多くも　聖上陛下には帝都を御巡幸遊ばされ、震災記念堂にも玉輦を進めさせられ親しく遭難者の靈に向つて御默禱を賜りしことは、市民の記憶に未だ新しき所であるが、此度は又　國母陛下を御迎へ申し上げ、親しく御禮拜を賜ふ、嗚呼此處に眠る靈、如何ばかりか　兩陛下の御仁慈の程に、泣き咽んだことであらう。

第六節　記念堂落成後に於ける催物其他

昭和五年九月一日記念堂落成後、同月三日四日に亘つて、信州善光寺尼公上人親修に依り、本所區各宗佛教聯合會代表、本所區双葉同志會代表、佛教聯合會弔祭所主管等に依つて追悼會が營まれた。同じく十三日には上記弔祭所主催による震災に關する記念講話會が催された。同三十日には大震火災の際に兒童八百餘名及び教職員校長以下七名を失つた、二葉尋常小學校長主催により、滿七ヶ年供養竝に兒童の宗教的情操教育を主とする記念式が行はれた。同年十一月には江東重陽會主催に依る獻菊法要大會が開催され、咲き誇れる菊花を賞しつゝ記念堂に參詣する人達の足數は繁かつた。

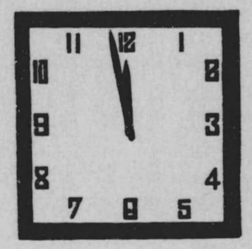
越えて翌六年六月一日には大震罹災勞働者慰靈大法要が、民衆宿泊所主山田庄藏、横田多門、本田市郎氏その他の有志に依り執行された。七月十三日より十六日までの間には盂蘭盆法要が執行され、夜間には講演會が佛教聯合會に依り主催され、七月二十三日より八月二日までの間には、朝顏の獻花大會が東京市及東京國の華會共同で開催されて、參拜者達の足をしばし佇めしめた。

八月二十七日には本所區石原町に在つた大震火災殃死者追悼碑が記念堂構内に遷され、右遷座法要が三枝圓藏氏の代表に依つて執行された。

九月二十一日より二十七日に至る七日間は佛教聯合會主催の彼岸法要が營まれた。

十月下旬より十一月中旬に至る間は、江東華道會竝に東京市共同主催に依り獻華大會が開催され、幾多の美はしい菊花、活花等が堂内及構内に飾られて、秋晴の日などには澤山の人が毎日詣でて賑はつてゐた。

かやうにして本震災記念堂は、設立の趣旨に副ひつゝ着々と其の實をあげて今日に到つてゐる次第である。



第十六章　餘　錄

被服廠跡の思ひ出

その日

大震災の悼ましい狀況、殊に被服廠跡の言語に絶した慘狀に至つては、八年を經た、今日も、尙鬼哭啾々たるものを覺えるのである。

本所方面に、すさまじい震火の襲ひかゝつた時、誰の胸にも、卽座に先づ、廣大な空地被服廠跡を、思ひ浮んだことであらう。そして最上の避難場所として、雲集したことは、洵に餘儀ない次第であつた。

初め山內相生警察署長等は兩國橋を渡り上野方面、又は日比谷方面に避難せしめる策を樹て、その指導に、全力を擧げた。然し花町、菊川町德右衛門町方面が猛火の洗禮を受け、加之、國技館迄が、火を發して、終に、渡橋不可能と見るや、餘儀なく群集を被服廠跡に避難せしむるに全力を注いだと云はれる。此の時此れ等の指導に當つた警察官は、聲を勵まして「家財を捨てよ」と絶叫したが、案外、捨てるものの尠かつたことがかち〳〵山の童話ではないが悲慘な出來事を招くことになつた。

斯う云ふ後から考へれば明瞭な誤りも、其當時、其刹那としては誰しも最も良き避難場所と信じ、當然の處置と信じて居つたことは止むを得ないのである。被服廠へ早く避難した人々の中には疊を敷き家具を周圍に立て並べ高張を立て、ビールの滿を引いてゐたのもあつたと云ふことである。

夫れ等の人々は、其の持込んだ調度品の爲に尊い命を失つたやうなものであつた。

尤も、此の慘害を斯くまで大にしたのは、火よりも突發した旋風の仕業であつた。

秒速、七八十米と云ふ、想像もつかぬ大旋風はすさまじい紅蓮を捲き起しつゝ、あつと云ふ間に人も、家具も、何も、彼も、捲き揚げ、燒き盡し、須臾にして幾萬の尊き生靈を奪ひ去つてしまつたのである。此の間僅かに、十分乃至十五分。天地晦冥、咫尺を辨ぜず。一大叫喚の聲も一瞬にして止み、只、見る、阿鼻の地獄と化し去つてしまつたのであつた。——此の時正に午後四時四十七分——此の旋風の一過した後、隅田川方面に二間許りの垂直の靑空が現れた。そして、それから、四邊は、漸く明るくなり初めたのであつた。

此の中に、奇跡的な生存者があつた。此の人々が人事不省の狀態から、漸く蘇つて來た時、誰からともなく「萬歲」の聲が擧つた。思へば、此の叫びこそは、萬死に一生を得たる歡喜であり、生の執看に對する、純眞なる姿であつたのであらう。此の時、太陽は、異樣な褪紅色を帶びて、荒寥たる焦熱の跡を照らしてゐた。

爰に忘れられないことは、軍隊の力である。此の時旣に、この被服廠跡に走せつけて、生存者に、道しるべし、江東製氷や、御藏橋附近の安田氏經營の朝顏畑に、いざなつてくれたのである。

生存者の多かつたところは、後に假納骨堂の建つた邊りで、長さ二十間、巾二間許りの水溜のあつた附近であつて、水溜に浸り他の下積になつた人達が僅かに助かつたと云ふことは實に何と云ふ悲しいことではないか。

その翌朝

その翌朝のこと、被服廠跡の小高い處に僧侶一人、累々たる數萬の屍に冥福を祈つて、靜かな讀經を續けてゐた。日蓮宗の僧であつたと云

ふ。これこそ、此の大災害の初めての回向であつたらう。

此れ等の氣の毒な死者の、殆んど總ては、性の判別さへなし得なかつた。昨日は避難民を救助せんとして、奮闘してゐた山内相生警察署長も、御眞影を奉じ最後迄「御眞影の守護」を、絶叫し續けてゐた山本本所高等小學校長も、孰れも多くの同胞と共に此の處で鬼籍の人となつてゐた。然も容貌が變つてゐてその誰なるかを判別し得なかつた位であつた。一刻にして慘憺たる修羅場となつた被服廠跡には同樣の悲しいエピソートで埋もれて居り洵に斷腸の極である。

中に辛うじて、死より免れ得た人々を救護する爲、一日の夜半、既に、此處に走せつけて、活動を開始した青年團員があつたと云ふことであるが、翌早曉には、警察官はもとより、青年團員、在鄕軍人團員等力を併せて、之が救護に從事したのであつて、それには數へ切れないほどの涙ぐましい話が殘つてゐる。救護には從事してゐるものゝ、自ら負傷に苦んでゐるものもあつた。又、家族を失つてしまつたものもあつた。併し、誰も彼も、よくその苦難に打ち勝つて、活動を續けたのであつた。

我等は、我等民族のみが持つ最も美はしい眞情を、全世界に向つて誇り得ることを喜ばねばならぬ。

その後

被服廠跡、數萬の屍は、其の場に於て、荼毗に附せらるゝこととなつた。

そして『死體取片付人夫募集、日給五圓、日拂ヒニシテ三食辨當ヲ給ス』と云ふ樣な廣告を、市川や草加方面へ出して人夫の募集をやつた。

被服廠跡の周圍は警官隊、憲兵隊等で守護した。人夫は、二十人を以つて一班とし、多い日は二十班を以て作業にかゝり、約十日間を要したのであつた。

又、これに使つた薪が約一萬九千貫、石油二百

石であつたが、以て當時の凄慘なる狀況を忍ぶことが出來る。

災後、ある大嵐の夜のこと、回向院の僧が小僧と一緒に、國技館三日より區役所の假廳舍となつてゐた)に逃げ込んで來た。そして卒倒した椿事があつた。

此の人達の語つた處によると、丁度、被服廠跡を通つてゐた時、突然「火の玉」が飛んだと云ふのであつた。「僧が火の玉で目を廻はした」と云ふと少々可笑しさが先に立つが、これは決して笑ひ事ではないのであつて、斯うした怪談が生れるほど、人の心が痛み切つてゐたのである。又斯う云ふ噂も立つた。被服廠跡附近を通ると何處ともなく「水を吳れ、水を吳れ」と呼ぶ聲がすると云ふのである。二年も經過した大正十四年頃でさへ、夜になると、被服廠跡になんとなく人の歩く足音がする。パタ〳〵、靜かに女の足音がすると云ふ樣な話が傳はつた位であるから、その當時、樣々な噂の生れたことは、無理もないことであつたらう。後になつて、火の玉は、實際は、燐が燃えたのであり、足音と思つたのは死者の靈を祭つた小旗が風に、はためいたのだと云ふ穿つた說が有力になつて、怪談も何時しか消えて仕舞つたが、一時は、なか〳〵眞劍に考へられたものであつた。

分骨に現はれた遺族の眞情

災害の爲、不歸の客となつた幾萬の遺骸は、主として被服廠跡に於て、荼毗に附した。その骨が假納骨堂に納められる迄、一時、山と積んであつたことがあつた。氣の毒な遺族達は、その骨の山を眺めて、たゞ茫然と立ち盡してゐる有樣であつた。

さう斯うする中、この骨片を捨つて、持つて歸へる者が出て來た。せめては、之を親身の者の靈として回向しやうと云ふ氣持と、これ等の遺骨を、此の儘にして置くに忍びないと云ふ氣持

とからであらう。

その氣持を汲んで當局では、臨機の處置として分骨に對する規定を制定して遺族の希望を充す事になつた。そうして、それから可成、多くの分骨を見るに至つたのである。

やがて震災記念堂建設の議が發表された。すると、ばつたり分骨を乞ふ者がなくなつた。それのみならず、終には返骨して來る者さへ現はれるに至つた。之れは吾々の企圖した、震災記念堂建設の計畫が、如何に遺族の滿足と待望を得たかを物語るものであつて、この一事を以てしても、この事業の意義深きことを信じ、欣快に堪えぬ次第である。

現在でも返骨に來る者があつて、之が處置に就き研究してゐる次第である。

毎年の震災記念日には、身動きもならぬ、參詣者の雜沓を見る許りでなく、記念日の前日、即ち逮夜にも、非常な雜沓を見るのであつて、其の他毎月の命日にも、相當の混雜を呈しつゝある。

遺族の中には、假納骨の初めより一日缺さず日參し、現在尙繼續してゐる人が幾人かあるが誠に美はしい事實として、關係者の語り草ともなつてゐる。

第一年祭と假納骨堂の淨財

灰燼の底より奮ひ起つて、一路復興への道程を歩みつづけて來た東京市民に取つては、その一周年記念日は、殊に、思出深き日であつた。

多事多難な一ヶ年、さしもの大災害も何處にそんな大變事があつたかと思ふほど、復活してゐたのである。例之、建築がバラックであるにしても、能く、此處迄に復興し得たことだと、今更乍らに感激を覺えるのであつた。

此の日、市內處々に震災當時を偲ぶ催が擧げられ、市中は到る處青年團、在鄕軍人團等の手に依つて、麥茶だの、氷だのの接待所が設けられ、復興の氣分を、彌が上にも高調するのだつた。

數萬の靈を祭祀する被服廠跡の納骨堂の第一年祭。記憶、未だ、新たなるだけに、此の日、これに詣ずる者、引きも切らず、日の高くなると共に次第に混雜を增して、遂には身動きもならぬ有樣となつた。午後より夜にかけて、その雜沓名狀すべからず、香華を手向けんとするものも、賽錢を獻ぜんとするものも、殆んど、堂に近寄る能はず、已むなく、人々は堂を目がけて、どん〳〵投げ始めた。

「投げては危ない」掛の者が聲をからしての、制止も、到底この群集に徹しやうがない、人波は次から次へ押寄せ、賽錢と花束、さては火の付いた線香も亦、どん〳〵投げ續けられて祭式に列して居るものも危險極りないのに手古摺つた。

斯うして、この一日は過ぎて、群集の去つた深夜掛の者が通路に落ち散つた賽錢を整理せんとした。ところが砂の筈の路が金色の光を放つて非常に堅くなつて容易に堀れさうもない。漸く堀割つて見て驚いたことには、砂と貨幣とが固まつて宛然、コンクリートの樣に成つてゐるのであつて、その厚みが、五寸にも、達する處があつたのである。

補助金と罹災者の熱誠

大正十四年の春、內務省より十萬圓の補助金を得たことに就いて一の挿話がある。

震災記念事業協會の最初の計畫では、その資金は富豪、或は實業家方面に寄附を仰ぐことに大きい期待を持つてゐたのである。そこで、資金募集に就いては、眞つ先に、東京商業會議所へ協議したのである。處が之がなかなかうまく行かなかつた。此の事に就ては、後に少しく詳しく記して見たいと思ふが、有產階級方面が、うまく行かないと云ふ事が、はつきりしてからは、協會幹部の考へが、次第に悲觀的に傾いてしまつたことは、是非ないことであつた。

尤も、此の時迄に零碎な資金が、約十萬圓許り集つてゐたのであるが、百萬圓を目標としてゐ

た協會の事業は、之れ位の金では、どう仕様もなかつた事は勿論である。

すると或日、舊協會の參事米本卯吉氏が、協會の庶務主管幹事井下清氏を訪問して種々會務に就て要談中この資金難問題に逢着すると、米本氏は

「震災の救護は生き殘つた人の爲めであるが死んだ人の爲めにも相當のことを爲すべできあるから內務省でも相當の補助を與へるに相違ない、万一六ケ敷ければ米國から來た、救恤品の中、配給し切れなかつた毛布が澤山ある、あれを貰つて資金を得やうではないか」と、井下幹事は耳寄りの話と贊成はしたが、まさか賣つて金を作るからとて毛布を貰ひに行けないので躊躇して居ると、氏は、一向頓着せず內務省社會局へ出掛けられた。

その翌日のこと、時の社會局長官池田宏氏から態々電話をもつて井下氏を招いて云はれるには

「協會は、餘り大きい希望を持ち過ぎるのではないか、今日の此の經濟狀態で、どうして百萬圓と云ふ大金が、さう〳〵容易く集まる譯のものではない。あまり無理なことをせずに、此際、內務省から十萬圓の補助金を出して貰へる樣心配して見るから、その補助金と既に協會に集つてゐる十萬圓と、都合二十萬圓で、この事業を完了して仕舞ふ事にしては、どうだらうか、若しその決心があれば、自分としての能ふ限りの盡力をして見やう」。

この同情に溢れた話を聞いて實際さうする外手段はあるまいと感謝し、取敢へず補助金交付の事を懇願して此の日は引下つた。すると、それから程なく、この話が長官の盡力で實現して、內務省から十萬圓の交付を受ける段取となつたのである。

さて、資金が增して來ると、段々望が大きくなつて來て、一生懸命活動すれば、後三十萬圓位は必ず出來ると確信して、それからと云ふものは

夜の目も寢ない程資金の募集に焦慮し又活動を續けて行つた。ところが又此處で喜ばしい思ひ懸けない話しがやつて來た。それは兵庫縣に救助金が殘つて居るといふ情報があつたので、直に其の寄附を交渉した處、快諾されて金十萬圓を受ける事ができた。欣喜雀躍此の調子なら必ず大丈夫だ、神樣は所期の目的を達成さして下さると勇氣百倍して、今一度內務省に、すがつて補助金を得やうと試みたのであつた。時の社會局長官は吉田茂氏であつた、氏は、本事業の計畫時代に於ける、東京市の助役であつて寄附金に依つて記念堂を建設せんとする井下案を支持された人であつただけに、此の問題に就ては非常に同情を持つて居られ、鋭意盡力せられた結果、極めて順調に進捗して、首尾よく二十五萬圓の補助金を獲ち得る事が出來たのである。

斯くの如くにして豫定資金の過半を得ることが出來たのであるが、若し此等の國費補助がなかつたならば、此の大事業も、斯く有終の美を成し遂げ得なかつたであらう。

さて本項の初めに少し書いたことであるが本來本計畫は罹災者にあらざる富豪、實業家の寄附を目標としたものであつて、商業會議所側の話では、百萬圓位は大なる困難なくして集ると云ふ見込であつた。それで大いに意を强ふして勸募に着手したのであつた。が、さて愈々となると、何うしたものか一向捗らない。捗らないどころか、その成績は、全く零と云つた始末だつた。そこで、東京市長であり、協會々長である永田秀次郎氏は自ら大富豪を訪問して勸募に努められたのであるが、折惡しく市長は突如辭職せらるゝに及んで、終に之も一頓挫するの止むなきに至つたのであつた。

永田氏のあと、時の東京府內務部長菊地愼三氏が暫らく職務管掌として市長の椅子に就かれし際も此問題には特別の同情を以て話を進められた。次で、その後を中村是公氏が選ばれ

て市長に就任せられた後、協會は從來の方針を變更し會が直接勸募に努めることゝして勸誘した結果、總計十萬圓許りの寄附金を得る事が出來たのであつた。

ところが、此處に意外なことには、實に零細な金の集りではあつたが、罹災者側から醵出された金が案外有望になつて來た。然も震災當時最も慘害の甚だしく、そして災害後最も財力の乏しかつた本所區から約四萬八千圓を醵金し斷然他の方面を凌駕せられたのは、洵に意外な涙ぐましい喜であつた。

本所以外の市内に於ても多額の同情金が集り又全國佛教團體に依る醵金も實に尠なからぬものであつて、何れも極めて零細な金額の集りであることを特に明記したいのである。

されば、本事業の完成に當つて、本事業を支持せられた、各方面に感謝の意を表すると共に、特に、血と涙とによる、貧者の一燈を寄せられたる諸氏に萬腔の敬意を表するものである。

悲しみの群像に就て

悲しみの群像は可憐な全市小學兒童の醵金に依つて造られたものである。併し當初小學校長會では、斯うしたものを造る豫定ではなく實は震災に殃死した憐れな兒童の弔魂記念碑を建立する筈であつて、碑石には根府川石を用ひると迄、話は進行してゐたのである。ところが、この弔魂記念碑建立に就ては本會幹部に一の主張があつて從來此の種の記念碑等の建設を謝絶して來たのであつた。其れは震災記念弔靈の對照は是非共單一でありたい。即ち震災記念堂の外に弔魂記念碑を造ることは此の地に建立する趣旨を數個に分割するきらひがあるから若し建立するなれば記念堂の風致を副ゆる美術的な記念像のやうなものなれば承認しやうと云ふことになつた。併しそれには費用が容易なことではなかつたので、理想としては、至極結構なことだが、それには現實が伴つてくれないと云つた樣な形であつた。茲に於て單一主體を主張した本會の井下庶務主事は根武川の碑を謝絶した責任上「一つ膽入りして見やう」と彫塑界の權威小倉右一郎氏に、この事を說いた處、小倉氏は欣然として「悲しみの群像」の製作を無報酬で引き受けやうと快諾して直ちに銳意之が製作に從事したのである。

像は青銅製とし、最初の構圖では九死に一生を得た十三人の少年少女が相助け、相勞はりつゝ猛火を遠望してゐる樣を寫したもので、實にその當時の有樣を如實に彷彿せしめた逸品であつた。

併し、物事は、なか〳〵うまく行かないものでこれに對して、意外な非難が現はれた。それは「悲しみの群像」は大震火災當時の苦難の有樣を餘りにも、如實深刻に現はしてゐる。これを藝術品として見る時は、實に立派なもので、誠に敬服の至りであるが、併し當時より既に幾年かを經た今日でさえ、見るものをして、その當時を思ひ起さしめ凄慘な氣分に胸を打たれる程であるから、之を可憐な兒童達に見せることは決して好ましいことではない」といふのであつた。

新聞の記事は、小倉氏の技倆を賞讃の餘り、最負の引き倒しと云つた形になつたのである。

此の時、これを知つた小倉氏は、何のこだわりもなく多少の修正を考へられたが、小學校々長會代表松下專吉氏は敢然として小倉氏の力作を支持し、當時を回想せしむべく建設した像が多少悲慘なる表現のあるは當然であるとして修正に同意せず只僅かに仕上げの色調を和らげる程度に於て所定の意匠を斷行されたことは特記に値することであらう。

弔靈鐘に就て

弔靈鐘が、渡來する迄の經緯に就ては、餘り世に知られてゐない苦心談がある。

震災直後、流言蜚語、旺んに行はれて、海濱の來

襲鮮人の暴行等、次から次へと傳播して恰も燎原の火の如き有樣となり、大災害の爲常軌を逸し切つてゐた民衆は、何時とはなく集團して、鮮人に對して暴行を加へ始めたと云ふ噂が立つた。之が爲、五日、內閣は、諭告を發し、民衆に誤りなき樣注意を喚起するに至つた。併し一旦流言蜚語に常軌を逸した群集の心理は實に危險極まりないものとなり、當局者の心勞は一通ではなかつた。此時、中華民國關係者は、萬一累を民國人に及ぼすことを慮つて、之が保護に當ると共に最も適當な方法として、留學生を初め一般民國人を歸還なさしむることに決した。此の輸送の任に當つた東方通信社々長水野梅曉氏は、千歳丸に依つて前後三回に涉り約四百名餘を上海に送つたのであつた。

ところが、偶々民國新聞に震災地に於て民國人百餘名が、日本暴民に依つて虐殺されたと云ふ記事が登載された。その出所は、もとより明かではないが、死者の氏名までが明記されたものであつたので、一度此の記事が發表されるや民國人の激昂甚だしく、翕然として、報復が絕叫されるに至つた。

爰に於て水野氏は、之が善後策を講ずる爲、上海カルトン・ホテルに支那の高官連、有力者等の來集を求め一夕の會合を催すことになつた。

此の時水野氏が發表した意見書は非常な尊いものであるが、今は全く散逸してしまつた。意見書の大意は次の如きものである。

「我々日本人は非常に博愛心に富む民族であることを今爰に斷言する。この一例を擧ぐれば、今次の大震火災の際、人として最も大切なるところの凡ての財寶を投げ捨てゝ迄も、その飼養せる家畜を救つた例は、枚擧に遑がない程である。身を以つて辛うじて逃れ得たる者、手に半錢だに持つ能はざる人々がその愛する、犬猫を必死とかき抱ける樣を見て誰か涙なきを得んや、斯くの如き日本人が何を以つてか人類を殺戮しやう。國籍こそ異にするとは云へ、日本人と民國人は同じ東洋人にして、同色人種である。眞に日本を知り、日本人を理解すれば、今次の民國人虐殺說が、單なる風聞から生じたる錯覺か、若しくは誤傳か、然らずんば、爲にせんとする者の流言に過ぎざるものなることは推斷するに難くないのである。希くは、その眞相を究明せよ」

この會合は氏の說と誠意を諒とし、その結果、調査員を派遣することゝなつた。而して調査員は、宗教家を選ぶことゝし、佛教派二名、基督教派一名と決し、これが案內役として水野氏自らが當ることゝなつたのである。

斯くて來朝せる一行は極力その眞相の探究に力を注いだ。何と云つても彼の大災害の事であるから、行方不明の者もあつたりして、その調査には非常な困難が感ぜられた。これに對しては時の內務大臣子爵後藤新平氏、司法大臣男爵平沼騏一郎氏、外務大臣男爵伊集院彥吉氏、陸軍大臣田中義一氏等が特に種々の便宜を與へられたる結果、調査員はその誠意を諒とし斯くの如き公明なる態度を取り得る日本に、暗い影のあらう筈がないと深く信ずるに至つたのである。

調査員が詳さに災害地を踏査し、その災害の餘りにも大なることを見て大いに哀悼し、歸國後その狀況を報告するに及んで、爰に禍轉じて福となり、「佛教普濟日災會」の組織を見、弔靈鐘贈呈の議を決するに至つたものである。

震災記念堂に奉安せる佛舍利に就て

昭和六年四月より震災記念堂に佛舍利を奉安することになつた。これは假の奉安ではあるが、思ひ懸けない佛緣のあることゝして其由來をこゝに附記する。

昭和四年夏、少年團日本聯盟は、人類親交の目的を以つて、暹羅國少年團二十一名を招待した事がある。

暹羅國では、朝野を擧げて之に感激し、昭和五年の暮、その答禮の意味を以て、我少年團員二十一名を招待した。この一行は、少年團日本聯盟理事長伯爵二荒芳德氏を團長として出發し、約半ケ月を暹羅國の少年團總裁であらせられる國王陛下の賓客として滯在したのである。

佛教國暹羅は、其少年團指導精神も佛教の「轉法輪」である。そこで一行は暹羅少年團員と共に佛寺に參拜し、或は說法の席に列し、神聖なる信仰の練磨に努めたのであつた。

一行は昭和六年一月十三日、暹羅の佛教大本山にして佛舍利を奉安せるナコムパトム寺院に暹羅全國少年團員と共に參拜せし折、同山の僧正プラ・デウァスディー師は日本少年團を閲せられ、遠來の勞を犒ひ、日暹兩國親善の爲に、特に佛舍利を、雨乞の佛像一體と共に頒ち與へられたものなのである。かくて渡來せる佛舍利は一時、二荒伯の守護のもとにあつたが、昭和六年四月五日に至り震災記念堂に假奉安せられたものである。

我國に佛舍利の渡來は今回のものが第二次であつて、その第一次のものは現に名古屋市外覺王山日暹寺に奉安せるところのものである。今佛舍利の由來を簡單に記せば次の樣である

釋迦は西紀前四百八十五年二月十五日吠舍離國、招尸那揭羅城、阿夷羅跋提河邊の沙羅双樹の間に於て、八十歳を以て入寂され、荼毗に付した。其時招尸王其他七方面の豪族の間に其舍利を收めて供養せんとし、相爭ひ遂に干戈に訴へんとするに到つた。香姓波羅門は「諸賢は佛の教戒を受け口に教敕を誦し乍ら、舍利を諍ふて相殘害せんとするは何ぞや、如來の遺形を得て廣益を慾せば宜しく之を等分すべし。」と說いたので皆其說に服し香姓をして配分せしめた。そこで香姓は舍利の中より先づ佛の上牙を取り摩竭陀國阿闍世王に奉り罌手に入れたる舍利を八國に等分して與へ、村人は地土の焦炭を得、香姓は配分に用ひた罌を取りたるを以て釋迦の遺骨は八國に分たれたる外、罌塔、炭塔と生時の髮塔とがあつたと傳へられる。右の內、八國の第五國は迦維衞國釋種民族であつて卽ち釋迦族の手に渡つたのである。

釋迦滅後二世紀にして摩竭陀國王は五印度を平定し大いに佛法を興隆したのである、近く佛教は分派異說を生じ、又印度教隆盛となり、西曆千一年よりは回教徒は數回印度を侵略し到る處の佛寺靈蹟を破壞して自己の勢力を擴めて行つた。千二百六年には遂に東ベンガルより南グヂヤラツトを攻略し回教徒の王國を建設した。斯かる異教徒の狼藉は全く佛教の遺跡を滅失し、近代に於ては其墟趾さへ知ることを得ざるに至つた。

十九世紀に於て印度の主權が英國に歸して後英國は自然及人文的研究を開始し、考古學的調査に着手して各所より有益なる資料が漸次露はれるやうになつた。そして之に依て招尸那城の墟趾を想定し、佛入寂の沙羅双樹の林も略々推定さるゝに至つた。我明治二十九年に至つては佛降誕處表彰の碑文を發見して其地は大雪山下の尼波爾のルシムデイタツパ村であつて、卽ち藍毘尼園であると云はれて居る。

次いで釋尊の故國迦維羅伐窣堵の墟趾を發見し、佛跡探險熱は大いに昂つたのであつた。バスチ洲ビルドフール邑のウスカニボール街道に添ふたピプラーヴ村附近の古墳は其外形が著しく大なることに注意せられるに至つた。其地の所有者英人ウイリアム・ペツペ氏は夫を發掘する事になつた。此地は六十餘年前迄は鬱蒼たる大森林であつたが其時には一面の沃野に開墾せられてあつた。

冢は地上廿一尺二寸、直徑地平面にて百十六尺、頂上より八尺下にて六十二尺四寸あり、冢の南には寺院の遺蹟らしき壯大なる墟趾あり、其他東、西、南にも三箇所の冢があつた。

明治二十九年、ペツペ氏は一度深さ八尺餘を掘つたが中止し、三十一年一月再び發掘に着手

し、頂上より十八尺六寸の處に於て巨大なる石板が現はれ、其下は一大石櫃である事を發見した。大さは長四尺三寸四分、幅二尺六寸六分、高二尺一寸七分であつて砂岩石より成る堅牢美麗なもので大石を穿鑿したものであつて、附近に產出する石ではなかつた。此の石櫃の中より現はれ出たものは水晶製の盒高二寸八分、直徑(二寸六分)、柄は魚形中空にして內に黃金裝飾品あり。滑石製壺(甲)高六寸、徑三寸六分、(乙)高さ四寸八分、徑三寸二分、滑石製蓮華形器(蓋付)高さ四寸六分、徑四寸六分、滑石製圓函高一寸二分、徑三寸。寶石類は紫水晶、紅水晶、白水晶、瑪瑙、トツパース、珊瑚等の玉及び工作品であつて總計七百二十三點。外に貴重なる裝飾品大小三百七十二點の多數が藏されてあつた。

茲に於てペツペ氏は直ちにパスチの收稅官ニマ・サンカー氏に報告したので、サンカー氏は熱心なる佛教學者ホエー博士に其の研究を依賴した。其の結果、遺物は釋尊火葬後、其兄弟サカヤスの保存したものであることが明らかになつた。而して前記滑石壺(乙)の中には骨片と腐朽せる木器の破片を混じてゐて、其蓋上には二行の文字あり、之をビューラー博士の飜譯によれば「婆伽梵釋迦牟尼の舍利を奉安せる此の寶龕は釋迦世尊兄弟姉妹妻子の共有に屬す」、とあつた。此の文字を刻した時代は正確に推定し難きも阿輪釋迦未時代より古きものであるとされ遂に之によつて釋尊の親族たる緣故を以て舍利の一部の分配を得たる釋迦族の手に依つて建造せられたる事を考證せられたのである。

斯の如く驚くべきピプラーヴ冢の發掘物は一私人の有すべきものに非ずとして、ペツペ氏は悉く印度政廳に寄附したのである。そこで政廳は此の寶物をカルカツタ及びロンドン博物館に送り一部はペツペ氏に分配した。而して釋尊の遺形は世界唯一の佛教國たる暹羅國王陛下へ寄贈した。これ明治三十二年二月であつて國王は勅使を派遣して迎へ、金塔に移し、白象に載せ軍隊を以て護り、王族貴紳之に從つて奉安し、前後三十餘日の奉安法會を行つたのである。

明治三十三年一月に、錫蘭と緬甸兩國よりの懇望に依り舍利を奉安した小金塔を緬甸に二個、錫蘭に三個を授けた。緬甸に二個を與へた事は、マシデレーと、ラングーンの二個所に奉安せん爲であつて、錫蘭に三個與へたるは、舊都アヌタダプラ、カンデー、コロンボに奉安する爲であつた。

名古屋市覺王山日暹寺に奉安せる、佛舍利は暹羅國王陛下の御思召に依り、明治三十三年渡來せるものであつて、震災記念堂に假奉安せるものは第二次の渡來であることは前にも述べた通である。

第十七章

收支決算報告

(一)收入之部

自大正十三年度
至昭和六年度

總額壹百貳拾七萬七千七百九圓七拾四錢五厘

內譯

種別	舊協會收入	財團法人收入	計	摘要
御下賜金	一〇,〇〇〇・〇〇〇	一,〇〇〇・〇〇〇円	二一,〇〇〇・〇〇〇円	事業資金 一〇〇,〇〇〇・〇〇〇 祭祀料 一,〇〇〇・〇〇〇
內務省補助金	三五〇,〇〇〇・〇〇〇	—	三五〇,〇〇〇・〇〇〇	第一回事業資金 一〇〇,〇〇〇・〇〇〇 第二回 二五〇,〇〇〇・〇〇〇
復興事務局補助金	—	一七,六五〇・〇〇〇	一七,六五〇・〇〇〇	復興記念館防火地區建築補助金
外務省補助金	—	五〇〇・〇〇〇	五〇〇・〇〇〇	梵鐘始撞式費
東京市補助金	一七,一六一・五四〇	五〇,五〇〇・〇〇〇	六七,六六一・五四〇	事業資金補助二回 一七,六六一・五四〇 記念館建設費補助 五〇,〇〇〇・〇〇〇
御下賜金並補助金計	三七七,一六一・五四〇	六九,六五〇・〇〇〇	四四六,八一一・五四〇	
震災遭難兒童弔魂像保存費寄附金	—	一,一〇六・八一〇	一,一〇六・八一〇	
本會直接取扱寄附金	二七六,八一一・四五〇	五五,七三六・六七〇	三三三,五四八・一二〇	
東京市各區役所取扱寄附金	八五,〇八〇・一三〇	一〇九,七九二・四三〇	一九四,八八〇・五六〇	京橋區扱寄附興行ニ依ル寄附四千圓ヲ含ム
東京府下町村役場取扱寄附金	三,九三〇・五〇〇	五三四・三五〇	四,四五四・八五〇	
佛教聯合會關係扱寄附金	八,二九七・七三〇	九四,六〇七・五四五	一〇二,九〇五・二六五	
寄附金計	三七四,一二七・八〇〇	二六一,七六七・八〇五	六三五,八九五・六〇五	
小計	七五一,二八九・三四〇	三三一,四一七・八〇五	一,〇八二,七〇七・一四五	
寄附興業收入金	一七,七四三・二一〇	三,八五八・一六〇	二一,六〇一・三七〇	本會主催五回 特志者主催十一回 九,六六五・一〇〇 一二,〇三六・二七〇
寄贈書畫賣却代金	一,四一〇・〇〇〇	三,三一八・〇〇〇	三,六三六・〇〇〇	日本畫家寄贈小點 中華民國名士寄贈書畫 一,四一〇・〇〇〇 二,三二八・〇〇〇
預金利子	一六八,六六六・八三〇	一五〇,七五九・六三〇	一六七,六三六・四五〇	
其他雜收入	一九九・九八〇	一,九四六・八〇〇	二,一四六・七八〇	不用品賣拂代其他
小計	三六,三一〇・〇一〇	一五八,一六二・五九〇	一九五,四七二・六〇〇	
總計	一,八七七,五〇九・三五〇	四九〇,二〇〇・三九五	一,三七七,七〇九・七四五	

(二)支出之部

總額壹百貳拾參萬八千九百八拾貳圓五拾九錢五厘

內譯

種別	舊協會支出	財團法人支出	計	摘要
事務費	二九、六三八、七六五円	三六、三四九、三一〇円	六五、九七八、〇七五円	
資金募集費	四三、〇四〇、九七〇	三八、四八八、八七五	八二、五二九、八四五	
震災記念堂建築並設備費	四、一〇三、五八〇	六七五、一六七、五七〇	六七九、二七一、一五〇	建築費 六七六、七四一、八九〇 設備費 二、五三九、二六〇
鐘樓建設費	—	七、一九三、六〇〇	七、一九三、六〇〇	
事務所建設費	—	八、六八八、六八〇	八、六八八、六八〇	
復興記念館建設費	—	一一三、二七六、三五〇	一一三、二七六、三五〇	
敷地外柵並門建設費	—	三三、二八〇、七五〇	三三、二八〇、七五〇	
建築設計並監督費	二、九七八、四三五	七〇、五四四、五三〇	八二、五三二、九六五	震災記念堂其他復興記念館 七六、〇九一、一八五 六、四三一、七八〇
附帶庭園設備費	—	五九、八四一、七八〇	五九、八四一、七八〇	
同上設計並監督費	—	七、八二九、〇七〇	七、八二九、〇七〇	

納骨費	—	一一、五〇八、六〇〇	一一、五〇八、六〇〇	遺骨燒上其他納骨容器 二、四〇八、六〇〇
靈名並靈名簿費	—	七、〇三四、一二〇	七、〇三四、一二〇	調査費 九、一〇〇、〇〇〇 靈名簿費 五、〇三三、九九〇
震災復興記念資料蒐集費	—	一三、五一三、九八〇	一三、五一三、九八〇	一、九九〇、四三〇
初度調辨費	—	四、六八三、〇〇〇	四、六八三、〇〇〇	
記念章並記念品調製費	—	五、八〇一、七二〇	五、八〇一、七二〇	獻上品及送達諸費用ヲ含ム
舊記念堂設計圖案懸賞金	九、四〇〇、〇〇〇	—	九、四〇〇、〇〇〇	
震災記念堂地鎮祭費	一、六七四、三三〇	—	一、六七四、三三〇	
同起工式費	—	二、〇八〇、六四〇	二、〇八〇、六四〇	
同上棟式費	—	二、一三四、九五〇	二、一三四、九五〇	
同落成式費	—	二、八四六、二一〇	二、八四六、二一〇	
中華民國梵鐘始撞式費	—	九六六、五〇〇	九六六、五〇〇	
復興記念館竣工奉告祭並開館式費	—	七三五、五三〇	七三五、五三〇	
竣成善後費	—	四八、三一一、五三〇	四八、三一一、五三〇	
合計	九九、八三五、九八〇	一、一三九、一五六、六一五	一、二三八、九八二、五九五	

收支殘金參萬八千七百貳拾七圓拾五錢

(三) 清算事務費豫算

種別	豫算額	説明
事務費	三、二三四・〇〇〇円	
諸費	一〇、五〇〇・〇〇〇	事業報告費其他
計	一三、六三四・〇〇〇	

附記

追而清算殘金ハ東京市ニ寄附ス

豫定額　貳萬五千百參圓拾五錢

第十八章　會員名簿

一、功勞者

名譽會員

東京　伊東忠太
同　伊澤多喜男
同　市來乙彦
同　入山祐次郎
同　井下清
同　池田宏
同　石橋政治
同　萩原孝一
同　堀切善次郎
同　本多靜六
同　十時尊
同　小野二郎
同　小木千丈
同　岡田忠彦
同　大西一郎

東京　太田政弘
同　勝正憲
同　米本卯吉
同　吉田茂
同　田中廣太郎
同　田村端穂
同　塚本靖
同　中川健藏
同　永田秀次郎
同　長岡隆一郎
同　宇佐美勝夫
同　牛塚虎太郎
同　柳澤保惠
同　伯爵
同　山口安憲
同　安井誠一郎
同　馬渡俊雄

特別會員

東京　丸山鶴吉
同　松本忠雄
同　牧山彦七
同　藤山雷太
同　藤田謙一
同　船田中
同　福田重義
同　男爵郷誠之助
同　近木新三郎
同　荒孟
同　齋藤守圀

東京　飯塚友一郎
同　伊藤仁太郎
同　伊藤勝義
同　伊藤高藏
同　伊藤佐市
同　伊藤治作
同　伊東美代松
同　市川政司
同　岩村成允
同　今井義男
同　池園哲太郎
同　池田清秋
同　稲村藤太郎

東京　佐藤功一
同　谷芳郎
同　阪慎三
同　男爵菊池正賀
同　見山信
同　溝口
同　宮田光雄
同　白上佑吉
同　故子爵澁澤榮一
同　霜島幸久
同　廣瀨忠義
同　平塚廣久

東京　井手久馬彦
同　服部賢成
同　鳩山一郎
同　羽田如雲
同　原伊三郎
同　林武雄
同　早川庄太郎
同　土生文之助
同　橋本菊次郎
同　橋本直祐
同　橋本信一
同　橋本信次郎

東京　井上萬吉

東京　長谷川眞澄
同　長谷川吉次郎
同　榛葉金吾
同　蓮江啓藏
同　西川嘉門
同　西村吉兵衛
同　細谷鎌太郎
同　北條彦四郎
同　本多市郎
同　本田義成
同　別役增吉
同　富田富治郎
同　富岡袖吉
同　戸倉嘉市
同　友成四郎
同　石熊吉
同　大井善藏
同　大岩豐吉
同　大橋誠一
同　大堀佐內
同　大神田軍治
同　大野伴睦
同　大野敬吉
同　大野傳吉
同　大野清作
同　大澤梅次郎

東京　大里常弘
同　大木金兵衛
同　太田信治郎
同　方山正隆
同　垣見八郎右衛門
同　片岡文太郎
同　片山久藏
同　渡邊繁太郎
同　渡邊海旭
同　渡邊德三郎
同　渡邊龜造
同　和田操
同　若林成昭
同　近江彌一郎
同　汪榮寶
同　尾後貫朝吾
同　尾中勝也
同　岡蕃
同　岡田四郎
同　岡田和一郎
同　小澤佐重喜
同　小俱一
同　小栗富五郎
同　小野養治
同　小瀧辰雄
同　小幡敏男
同　太田信治郎
同　大木金兵衛
同　大里常弘

東京　河井榮三郎
同　河村慶治郎
同　川部爽介
同　川口寛三
同　川島一郎
同　川村正夫
同　川手忠義
同　鎌田芳太郎
同　金子東一
同　金子清吉
同　加藤辰之
同　加藤正信
同　角野庄太郎
同　笠井重治
同　龜山忠之助
同　糟谷磯平
同　柿沼稠吉
同　吉井濱治郎
同　吉川忠志
同　吉山眞棹
同　吉田勘右衛門
同　谷川昇
同　高橋秀臣
同　高橋義次
同　高橋庄之助
同　高橋俊太

東京　高崎高次郎
同　高木謙
同　高山宅次
同　詫間武彦
同　田邊定義
同　立川太一郎
同　田中進
同　田中康三
同　竹下延保
同　瀧澤七郎
同　瀧澤遵道
同　田代義德
同　坪野房治
同　坪上貞二
同　土倉宗明
同　名和長憲
同　中田敬義
同　中村富三郎
同　中村萬吉
同　中村舜二
同　中山清松
同　中川重政
同　中西敏二
同　中南定太郎
同　中塚榮次郎
同　長町康夫

東京　長島武治
同　武藤騏駛郎
同　村山賢作
同　村松恒一郎
同　村田忠三郎
同　上原六郎
同　字都宮政市
同　字田川孝吉
同　卯木國三郎
同　野崎廣助
同　窪川旭丈
同　黑川一治
同　國枝捨次郎
同　栗原彦三郎
同　倉田金三郎
同　倉持忠助
同　桑原信助
同　山口德二
同　山口久吉
同　山口太郎
同　山田種三郎
同　山本繁三郎
同　山本繁吉
同　矢野鉉吉
同　柳田諒三
同　柳田宗一郎

東京　八太茂
同　安武直夫
同　間部藏
同　丸山岩藏
同　前田賢次
同　松岡淺太郎
同　松崎英太郎
同　松崎權四郎
同　松崎章太郎
同　松浦清三郎
同　松尾要
同　松東永一郎
同　松永和一郎
同　正木直彦
同　馬島個
同　增田知治雄
同　益田貫一
同　深澤豐太郎
同　福井正太郎
同　福田又一
同　藤原久人
同　藤原誠
同　藤原俊雄
同　藤浦富太郎
同　小原要三郎
同　小林半三郎